# ドラグーンズ・メイル

壬門州三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラグーンズ・メイル

【Ｎコード】
Ｎ５４７２Ｗ

【作者名】
壬門州三

【あらすじ】
貴族の次男カインドは、学院への旅の途中、とんでもない美形の剣士とドラゴンの子供に出会う。なりゆきで同行することになった二人と一匹は、厄介事をバタバタしつつ切り抜けるうちに、何故だか国を揺るがす陰謀の真っ只中にいた。魔獣騎兵を有する王国に伝わる二つの卵とは――。少々口と頭が回るヘタレと完璧超人に見せかけてぽややんな魔剣士、空気を読むドラゴンの物語。

# 1．出会い

俺の生涯初の旅路は、盗賊団に捕まってアジトまで連れて行かれるという、最高に素敵なクライマックスを迎えていた。

森の奥深く、アジトはちょっとした酒場か宿屋ほどの大きさがあり、屈強な男たちが溢れ返っている。

まさに勝利の宴といったご様子で、食べ散らかし呑み散らかし、まだ血がついたままの剣を振り回す。何人かケガ人も出ているほどなのに、誰も場を収めようとする者がいない。

それでも、後ろ手に縛られて転がされている俺にはどうでもいいことである。

「おいおい、辛気臭ェ顔してんなよ、兄ちゃん」

そばにいた髭面のおっさんが声をかけてきた。

良い仕事をした後の上手い酒で気持ち良く酔った盗賊にイジられるほど哀しいこともないだろう。

「――縄を解いていただけるか、食事をさせていただければ、笑顔で歌でも歌いますよ？」

「ガッハッハ！　縄を解くわけにゃいかねーが、パンぐらいはくれてやるぜ」

おっさんはそう言って俺の口に、パンを一斤そのまま突っ込んできた。口の中の水分が一気に持っていかれて、歌うどころではない。

「兄ちゃんには、これから稼がせて貰うんだしな。ただ、逃げようとすれば、殺す」

おっさんは台詞の締めだけドスを効かせた。

雰囲気が悪くなりそうだったので、俺は無理やりパンを飲み込んで、口を開いた。

「――ええと。一つ質問なんですが……」

「ふん、なかなか肝っ玉が据わってるじゃねぇか。何だ」

「俺で稼ぐってのは……？」
おっさんはゲハハハハハと腹を抱えて笑った。
「お前、どこぞの貴族だろ。若造がそんな格好してりゃあガキでもわからぁ。上手くやりゃ、親から金ふんだくれるって寸法さ」
やれやれ。こいつは困った。
俺の身なりは軽装の兵士といったところだ。ただ、装備はすべて新品で、しかもそこそこの金がかかっている。仕立てがいいだけでなく、装飾過多というか、見た目に派手だった。親が貴族というのも正解。
だが、しかしだ。
こいつらの悪だくみは絶対上手くなどいかない。
父上は俺がどうなろうと、鼻で笑って馬鹿めと罵り、ついでに唾を吐き捨てて、最後は高笑いするだろう。俺の為に金を払うことは絶対にない。母上に期待しようにも、父上の目を盗んで動かせる金額には限界がある。
つまり、目論見が外れて悔しい思いをした盗賊団の皆様は、俺で鬱憤晴らしをすることになるわけだ。最終的には作業的な奴隷か性的な奴隷かあっさり死亡か。どれも嫌だ。出来ればさっさと逃げ出したい。
しかしどれだけ無計画で粗雑とはいえ、盗賊たちは俺から武器を取り上げるのは忘れなかった。細身の剣も、魔銃も手元にはない。あったところで、数十匹の猫に追い詰められた鼠に角が生えた程度だ、という事実はこの際置いておこう。
「……ふーむ……」
大多数が眠るまで待つしかないか。
まだまだ続きそうな宴の中、そんなヘタレな結論に至った頃――。
耳が馬鹿になるほどの爆音が響き渡った。アジト全体が振動する。
「な、何だっ！？」

おっさんを筆頭に、馬鹿騒ぎをしていた盗賊たちの動きが止まり、場が静まり返った。

俺はといえば、嫌な予感がして、床を転がるように壁まで移動した。なるべく扉から離れる形で。

「……おい、誰か様子を見に――」

盗賊団の誰かがそう言い終わる前に、もう一度爆音。今度は、実際に扉やその周りの壁が吹き飛んだ。木片や小石と一緒に熱風が荒れ狂う。何人かは爆風をまともに受けて転がったほどだ。

「……っ」

俺は言葉を失った。

今この時出来た大穴の向こうには、月と森の木々を背にして、青年が立っていた。

シルバーブロンドは耳を隠す程度、細身の体。俺と同じような軽装の鎧を着込んでいるが、正直言って古めかしく、実用第一で装飾などもない。右手には体に不釣り合いなほどの大剣が握られていた。そして、何より目が行くのは、まるで絵画から抜け出たかのような、整いすぎた顔立ちだ。

切れ長なのに大きな目。瞳はやや赤みがかっている。すっと通っていながら主張しすぎない鼻筋。どちらかといえば薄い部類だがやけに引き付ける唇。柔らかさすら感じさせる頬と、鋭角な顎。あらゆる矛盾を押し通す、正真正銘の美形である。

わけのわからない事態に見た目麗しい乱入者。この状況に、俺も盗賊団の皆々様も動けない。ただ呆然と青年を見つめていると、彼が口を開いた。

「二十人ほどか。十分で片をつけよう――」

高めの声まで人を引き付ける。抑揚のある話し方といい、主役を張る舞台役者のようだ。しかし、言っていることは、演じられる英雄よりも極端だった。

「――さぁ、死ぬ気で来るがいい」

その一言で、盗賊たちの止まった時間が動き出した。

「フザけやがって！　かかれぇ！」

誰かが叫び、俺を除く全員が構え、数人が向かっていった。それぞれ剣やこん棒、槍など、その辺に落ちていたり、たまたま手にしていた武器を持っている。頭目らしき人間がいないわりに、統率がとれていた。

それも大した足しにはならなかったわけだが。

青年は見た目にも重い大剣を軽々と振り上げ、一瞬の溜めを見せた後、振り下ろした。

と言っても、俺に見えたのは、彼が大剣を高く振り上げたところまでで、気がつくと大剣は床板にめり込んでいたし、盗賊たち数名は大ぶりな肉片と化していた。

またしても盗賊団の時間が止まる。青年はその隙を見逃してはくれなかった。

「行くぞっ！」

ほとんど突風だった。見えるのは一歩踏み出すその瞬間だけ、次に見えるようになると何人かの盗賊がだいたい真っ二つに斬られていて、それらが床に落ちて音を立てる頃にはもう青年はどこにいるのかわからない。

「くそがぁ！」

俺に話しかけて悦に入っていたおっさんが、俺の魔銃を抜いた。ヤロウ、ちゃっかり自分の物にしてやがったな。おっさんは意外に機敏な動きで、青年が方向転換の為に立ち止まったその一瞬を逃さず、引き金をひく。

魔弾は、黒魔法の＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞が込められたものだった。魔銃に込めるには一般的な物の一つで、スピードがあり、場に左右されず真っ直ぐ進む為に狙いが付けやすい。殺傷力もそこそこある。例え青年がアホみたいに強くても、当たり所が悪ければ死ぬし、そう

でなくても当たれば無傷では済まされない筈だ。
打ち出された魔法は、きっちり青年のこめかみに向って飛んでいく。

「――ふん」
青年は鼻で笑った。

おっさんが起死回生で放った＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を何も持っていない左手の一振りで弾く。傍目には投げやりにも見える動作だった。弾かれた＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞は軌道を変え、天井に穴を開けた。
「んなっ！？」
おっさんが叫んだ。そうでなければ俺が叫んでいた。アホみたいに強いどころではない。完全に超一流、つまり、Ａクラスの戦士だ。

「狙いは良かったが。＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞ぐらいではな。さ、お前が最後だ」

彼の言葉で我に返り、慌ててアジトを見渡すと、生きているのは俺と青年とおっさんだけだった。おそらく全員、一太刀で息の根を止められている。打ち漏らしは一人もいない。ほんの数分前まで宴が催されていたアジトは、真っ赤なゴミ捨て場のような有様になっていた。
「それとも降伏するか？」
青年は大剣を肩に担ぎ、空いた左手をちょいちょいと動かした。あからさまな挑発である。
「この……、調子に乗り腐ってぇえええ！」
おっさんは斧を拾い上げ、怒号と共に突っ込んでいった。
「――んんっ」
対して青年は一つ息を漏らし、担いでいた大剣をそのまま振り下ろした。

おっさんの斧は青年にかするどころか、大剣にかすることも出来ず、溜めの位置から微塵も動いてはいなかった。それだけ青年の打ち下ろしは速かったのだ。おっさんは怒りに満ちた顔を完全に二つに割られて、倒れた。

実力差からすれば、真っ当な結果だろう。

「ふー」

青年は軽く首を傾け、大きく息をつくと、おっさんのズボンで大剣についた血糊を拭き取り始めた。ちなみに彼の服や鎧には返り血が一切ついていない。あれだけの乱闘の中、血を被らないという気配りが出来ていたということで、つまり余裕があったということだ。

「はぁー……」

あまりに華麗な立ち振る舞いに、俺は思わずため息をついてしまった。

「――!!」

弾けるように顔をあげた青年の指はすでに紋章を描き終えている。あとは魔力を開放させるだけで、＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞より2ランクほど上位の黒魔法――＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞が発射されるという状況だ。もちろん、俺に向って。

「――」

一言口に出すだけで撃ち殺されそうで、言い訳も出来ない。壁際に座り込んだ俺は、とにかく動かないことで敵意がないとアピールをするしかなかった。

少々の沈黙の後、紋章を俺に向けたまま、彼はそっと口を開いた。

「……手を挙げろ」

「あー、縛られてて無理ッス」

刺激しないように、そろそろと背中側で縛られた両手を見せる。

「……人質か？」

「そんな感じ。というか、縄切ってもらえると嬉しいんだが」

「うむ。それもそうだな」

青年はそう言って、発射寸前の黒魔法をキャンセルし、大剣を背中の鞘にしまってくれた。
視線が合うだけで失禁しそうになる威圧感が消え、人の良さそうな笑顔になる。元がとんでもない器量なので、軽い笑顔一つで場の雰囲気をがらりと一変させるだけの威力があった。
魔銃のように左脇の下に収めてあった短刀を引き抜く。刃渡り２０ｃｍほど、やや透明感のある赤い刀身。相当な業物であることは、ちょっとした刃物マニア程度の俺にもよくわかった。間抜けな人質の縄を切るには、勿体無いことは言うまでもない。

俺は手首をさすりながら立ち上がった。
「ありがとう、本気で助かった」
しっかりと一礼してから、最後にぶった切られたおっさんに向かう。
「――見たところ、新兵といったところか。どういう状況で人質になんてなったんだ？」
「メシでも食おうと通りに出たら、盗賊団の方々がお出ましして、気がついたら捕まってた」
「……情けない。それでも兵士か？」
「まだ訓練ひとつ受けてないんでね。――お、あった」
おっさんのベルトから、俺の魔銃を抜き出す。幸いにも壊れたり血で汚れたりはしていなかった。
「ああ、そういえば。それは何だ？　ほとんど動きなく黒魔法を撃ち出しただろ。新しい杖か？」
いつの間にか隣にいた青年が、聞いてきた。思わず苦笑しつつ答える。
「魔銃知らないって、どんだけ田舎者なんだアンタは」
「む……。や、悔しいが確かに世俗には疎い。特にここ百年と少しのことはほとんどわからん」
彼は顔をしかめた。どこか芝居がかってるというか、一々動作が

大げさなヤツだ。
「説明するのは構わないけど、先にとられた荷物を探させてくれ。旅の途中なんだ」
「ああ、それは災難だったな。僕も手伝おう」
これだけの容姿とあれだけの実力を持ちながら、なかなか気さくらしい。

彼に剣と荷物の特徴を伝え、無事だったランプを片手に、まずはアジトの中を探した。
一階部分は大したスペースもなさそうなのでとりあえず避け、二階の部屋を手分けして覗いて回る。汚い寝台と空になった酒瓶ぐらいしかなかった。
「どうも、ただの寝床らしいな」
溜息混じりの彼と共に、アジトから出た。
「うおぅ!?」
一歩踏み出したところで俺は思わず唸った。直径５ｍほどのクレーターに、細切れの肉に、大ぶりな肉。ついでに、なるべく見たくない色んな物が散らばっている。
夜で良かった。
「――……あー、これはお前さんが？」
「ああ。空から集団が見えたんでな。そのまま＜舞い散る毬栗（バモベクナッド）＞を、こう、ドーンと」
なるほど、一度目の轟音はその時のものだろう＜舞い散る毬栗（バモベクナッド）＞は爆裂系の上位黒魔法だ。実際にはドーン程度では済まなかったことは、この惨状を見れば明らかである。
どうもコイツは自分の能力を正確に把握しているとは言い難い気がする。

気を取り直して、当たりを見回した。
今までいた母屋は中途半端に切り開かれた森の中にあり、獣道よ

りはいくらかしっかりした道が二方向に伸びている。いくつかの小さな小屋や崩れかけた厩などがあった。連れてこられた時には大した余裕もなく、ほとんど引きずられていたので気付かなかったが、どうも元々は木こりか兵士かが集団で住んでいたのではなかろうか。

結局一つ目の小屋は普通の家庭にもあるような物置だった。実用的な雑貨や大工仕事用の道具などが詰め込まれているだけで、金目のもの一つない。当然、武器の類もなかった。

「あー、何か面倒になってきたな……」

「ふ、君の荷物だろう」

文句を垂れつつ二つ目の小屋に入る。入った途端に外れだとわかった。生肉の匂いが鼻をついたからだ。

「で、ここは食い物の貯蔵庫、と」

「こういうものもどこかから奪ってきたものなのか？　非生産的にも程がある」

「生産するつもりがないから、盗賊なんてやってんだろ」

「それもそうだな」

軽口もそこそこにして三つ目の小屋に向かった。少し離れた場所にあり、かなり大きい。ただ、作りはかなり粗雑というか古くなっていてボロボロだ。

「お、当たりっぽい」

思わず口笛を吹いてしまう。青年は鼻を鳴らして吐き捨てるように言った。

「鉄……いや錆か？」

確かに小屋の中は独特な臭いで溢れていた。ランプの明かりでは端までよく見えない。それでも見える範囲には剣だの金塊だの宝石だの、光を反射するもので溢れ返っている。整理整頓という発想が一切ないらしく、まさにただ詰め込んである。これでは下っ端あたりがこっそり盗んでも誰も気付かないだろう。

「ここから君の荷物を捜すのは、ちと手間だな」

「や、多分この辺りにあると思う」

入口近くの小山を指差した。整理する手間すら惜しむ連中なら、奪ってきた物を分類したり、分散して収容したりすることもない。おあつらえ向きに『今しがたとりあえず置いておきました』感溢れる荷物の山があるのだ。

二人で小山を上から崩していく。

「これだけの量だと、盗まれた物を返すのも一苦労だな」

青年が宝石で飾られた腕輪を放り捨てながら呟いた。

「まぁ、それはお上に任せておきゃいいだろ。て、お前、どこかの警備隊とか守備部隊のモンじゃないよなぁ？」

青年の鎧は隊などで配られる支給品よりみすぼらしい。何より、そういう連中はどんなに強くても一人で行動することは少ない筈だ。

「いいや。今の身分は完全にただの流れ者だ」

「ほー。じゃあ、何でこんな所に単身乗り込んで来たんだ？」

俺の質問に青年は軽く首を傾けた。意見をまとめているらしい。

「街に着いたと思ったら、火の手が上がっていてな。すでに盗賊団の襲撃を受けていたのだ。思わず剣を抜いて、幾人かは斬り伏せたが、結局本隊は仕事を終えて去ってしまった。火事を消すのを手伝っていると、街の者から討伐を頼まれたのだ」

「で、追ってきたのか……」

「いや、正確な場所を教わったので、雷進と＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞で急ぎ駆け付けた」

雷進は、瞬間的に移動する為の歩法だ。達人ともなれば１００ｍを一瞬で、なんてことも可能らしい。＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞は黒魔法の上位飛行術で、これまた相当な速度で空を飛ぶことが出来る。どちらも俺みたいな兵士見習いには憧れるだけの高等技術だが、この二つは組み合わせることで、さらに有用性を増す。黒魔法の飛行術は最高速度は素晴らしいものの、馬力と加速力においては精霊魔法や白魔法の飛行術に劣るのだ。その弱点を雷進は解消してくれる。十分に加速してから飛び立てるし、急な方向転換も足場さえあれば可能

になる。その速度は鳥よりもさらに速い。

「完全にボランティアで、しかもそれだけの実力とは」

流石に俺は感心した。俺が縛られたまま馬車に揺られ、小一時間尻の痛みに耐えていたのとは大違いだ。

「これじゃないのか？　ふむ、なかなかの業物。君には少しばかり過ぎた代物だな」

青年が少し鞘から抜いて眺めているのは、確かに俺の剣だった。魔銃同様、かなりいい物だ。鎧に関しては家の手前装飾過多になってしまったので、武器に関しては少々我儘を通し、実を取った。その件で父上とさらに揉めたのも、今ではいい思い出だよ。

剣のその下には、他の荷物を纏めたリュックサックも見つかった。盗られていた荷物が戻ってきただけで、嬉しくなるのは何故だろう。俺は鼻歌交じりで身支度を整えた。腰に巻くベルトの左に剣を下げ、右のホルスターに魔銃を差す。

さて、どうやって帰ろうか等と考えていると。

「む」

青年が声をあげた。

「どした」

「気配が――、馬が……十五匹、車が三台、とそれより大きな何か。ヒトも十人ほど走っているようだ。ようやく憲兵が来たのかな？」

言われてみれば、足に小さな振動を感じる。もちろん俺に馬が何匹だの車が何台だのわかるはずもないが。はて、何か引っかかるような……。

「あー、質問が」

俺が口を開くと、物置の扉を開けようとしていた青年が振り返った。

「ん、何だね？」

「雷進と＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞でここまで来たって言ってたよな。街からここまでどれぐらいかかったんだ？」

「ふむ、そうだな。二十分といった所か……。何だってそんなこと――」

青年の言葉は、最後まで俺に届かなかった。

俺のいた町からこのアジトまでは馬でそこそこ急いで一時間、さらに先ほどの宴と合わせれば、盗賊団の連中が仕事を終えてから一時間半はかかっている。襲撃の終盤に居合わせ、そこから馬よりはるかに速い方法で駆け付けて二十分だと計算が合わない。

まだ何か言っている青年を制して、尋ねた。

「もう一つ。お前がさっきまでいた町の名前は？」

「確か……サートレイトだ」

「俺が捕まった町は、スチフマーダっていう村に毛が生えた程度のところだ。さっきお前の言ったような規模の自警団なんて、ありえない」

嫌な予感は、ほぼ確信に変わっていた。

「ぬ？　つまり？」

「つまり、盗賊団は少なくとも二手に別れてた、ってことだわな」

## 1．出会い（後書き）

初投稿です。
忌憚ないご意見ご感想お待ちしております。

初稿９月９日

## 2. 一つ目の卵

「つまり、盗賊団は少なくとも二手に別れてた、ってことだわな」

疑わしげだった青年の表情が、一瞬で精悍なものに切り替わった。

「ということは、もう一戦か」

「おいおい、ちょっと待てって。こっちの方が本隊だと思うぞ」

地理にはあまり詳しくない俺でも、サートレイトは良くわかる。次の目的地だったからだ。スチフマーダよりもはるかに大きな街で、防備もしっかりしている筈だ。そこを襲えるのなら、それだけ人数が多いか、精鋭で固めてあるか、あるいは装備がより良いか。

「こんな所に隠れていたって、すぐに見つかるさ。何より奴らはもうすぐそこだ」

「げ」

確かに馬の蹄の音は相当大きい。機嫌の良い歌声や怒鳴り声まで聞こえてきた。身を隠すにも気配の消し方など知らない俺がいては、見つかるリスクの方が高い。

またもや情けないことになってきた。

青年がランプの火を消した。物置は暗闇に満たされる。彼は声を落として言った。

「君はここに隠れていろ。また捕まりでもしたら、困るからな」

その言葉には若干の苦笑も含まれていたが、むしろ俺には気遣っているようにも聞こえた。

「出ていくにしても、もうちょっと策を練るとか――」

「残念、時間切れだ」

俺が止める間もなく、青年はするりとドアを開け、外に出て行った。彼がドアを開けたことによって、盗賊団の気配が俺にも感じ取れる。

というより。青年がやや開けた道の真ん中に立った頃には、すでに皆々様はご到着なさっていた。

「――っ！」

ドアの隙間から外を覗き込んだ俺は、息を呑んだ。

人数など規模は先ほど青年が言っていたので、十分覚悟を決めていた、つもりだった。しかし、三十人以上の人間、十五頭ほどの馬、三台の馬車以外に、巨大なオルトロスがいては、衝撃を受けても仕方がないと思う。

オルトロスは二つの頭を持つでかい犬だ。背の高さで３ｍ半ほど、頭を持ち上げれば５ｍ近くにもなる。動きは俊敏で、二つの口はヒトなら一撃で噛み千切れる大きさがある。戦闘力の割りに扱いやすいことから、騎獣部隊なんかではちょくちょく見かけられるらしいが。

このランクの魔獣を盗賊団が飼っているなんて話は聞いたことがない。

「頭ァ！　あれ！」

松明を持った男が大声を張り上げた。一斉に止まる馬と車。半数以上がすでに武器を取り出している。

青年が、盗賊団の連中からの明かりにぼんやりと照らされる。その顔は無表情だった。

怯える馬を押しのけるようにしてオルトロスがゆっくりと前に出てきた。その首には首輪が、背には鞍がつけられていた。

「誰だ、貴様」

鞍に座っている大柄な男が言った。顔つきからすると、こいつがこの盗賊団の首領だろう。ギラギラとした目と、顔やむき出しの腕に走る傷跡が、潜った修羅場の数を示している。

オルトロスは良く躾けられているのか、一息で飛びかかれる距離でぐるぐると唸り声を上げた。

俺なら震え上がり小便漏らすこと確実な場面でも、青年はすっき

りと背筋を伸ばし、やけに芝居がかった声で堂々と答えた。
「悪党に名乗る義理はない。後ろの仲間共々、己の悪行を悔いながら逝くがいい」
青年の台詞は、盗賊たちを本気にさせるには充分だった。
「ああっ!?」
「おい、見てみろ！　あの生首、ありゃテムズだぜ！」
「それだけじゃねぇ、ブルも、サンチェスも！」
青年の後ろに広がる現場が目に入ったのか、怒りと苛立ちがざわめきと共に広がっていく。しかし、それでも盗賊たちは武器を構えただけで、動こうとはしなかった。全員が動く前に、オルトロスに乗った男を窺っている。
マズイ。
こいつらさっきの奴らよりも統制がとれている。よく見れば、大雑把ながら役割分担もしているらしく、比較的青年に近いほうは剣や斧を持ち、後ろのほうは弓や魔銃で武装していた。
頭目と思しき男は、呆れた様にため息をつくと、口を開いた。
「――用意」
近接武器を持った連中が、一斉に左右に散った。動かなかった者はすでに弓を引き絞るか、魔銃を構えている。
青年は大剣を肩に担ぐようにして真っ直ぐ立ったままだった。
「――ぅてェ！」
矢が十五条ほど、魔銃による黒魔法が五発ほど、放たれた。
青年の反応はやはり化け物じみていた。大剣を思い切り地面に叩きつけたのだ。地面が捲り上がり、轟音が響き、大量の土と石の壁がほんのつかの間立ち上がる。
少し離れていたからか、青年の動きは何とか見えた。
一部の矢と魔法は即席の壁を突き抜け、交錯するが、すでにその場に青年はいない。彼は、捲り上げた地面を目くらましにして、かなりの距離を飛び退いている。そして、避けたと思ったときには、正面のオルトロスに向かって突っ込んでいた。

盗賊団にしてみれば、土煙の中から突然大剣が飛んで来たようなものだろう。大した軍事訓練を受けていない奴らなら、この一手で詰みだ。

しかし、オルトロスは反応した。

「グワゥッ！！」

青年の横薙ぎをすれすれでかわし、二つある頭で噛み付こうとする。

「ハッ！」

鋭く笑うように息を吐いた青年は、やはりぎりぎりで二つの顎を避けた。

それでもオルトロスは追撃した。交互の噛み付きは、息つく暇もない連続攻撃になっている。まるで金属と金属をぶつけるような音が何度も何度も繰り返された。

オルトロスの背中で振り回されていた頭目は、いつの間にか気持ちを立て直したのか、部下に向かって怒鳴った。

「者共、こいつの足を止めろ！　手段は選ぶな！」

その台詞に、部下たちは武器を握りなおし、位置を確かめ、攻撃のタイミングを窺い始める。

そして、俺も我に返った。

青年がとんでもなく強いのはわかっている。しかし、アジトの中での大立ち回りがあそこまで一方的だったのは、相手が組織としてバラバラだったことや奇襲が成功したことが、大きいかもしれないのだ。そこそこの指導者がいる連携の取れた相手にどこまでやれるのかはわからない。その上、オルトロスまでいる。

飛び出していって格好良く助ける、なんていうのは論外だが、何人かの注意を俺に向けさせることならできるかもしれない。いや、伏兵の存在を臭わせる程度でも助けにはなるだろう。

俺はわざと音を立てながら、小屋の奥へ移動した。実際のところ、心臓はバックバクだ。

ギリギリ物の輪郭がわかる程度の月明かりの中、決定的な音だけは出さないよう注意して歩きつつ、何か武器になるものを探す。出来れば魔銃やクロスボウなど、飛び道具がいい。

さらに贅沢を言わせてもらえば、魔法爆雷などがあれば派手に場を引っ掻き回せるのだが。精霊魔法や黒魔法を魔力と共に封印した魔法爆雷は、手に収まるぐらいのガラス玉のような外見で、ちょっとした衝撃で封印された魔法が解放されるアイテムだ。対象に向って投げたり、地面に埋めて罠として使ったりする。

しかし、そんなうまい話が転がっているわけもなく。そもそも武器がありません。俺のように武器を持っている癖に強奪されるような間抜けはそうはいなかったのだろう。

外の様子を窺う。音や声から判断すると、戦闘はまだ続いているようだ。しかし、こちらに注意が向いている気配はない。

ふと、棚の一つに目が行った。かすかな月の光を反射した、玉がある。大きさは子供の頭ぐらい。黒い下地に、筆で赤い線を何本かいれたような表面。丸いといえば丸いといった程度で、完全な球体とは言い難い。盗賊団のかなりいい加減な保管の中、これだけは転がり出さないように台座にすっぽりと納められていた。

何かのアイテムだろうか。もしかしたら役に立つかもしれない。俺は屈み込んでその玉にそっと顔を近づけた。

カチリ、と。顔を近づけた瞬間、音がした。

慌てて辺りを見渡すが、何か音を出すような物は見つからない。それに外の様子も、戦闘はまだ続いているようではあるものの、大きな変化は感じられなかった。カチリ。残る可能性は目の前の玉しかない。カチリ。さらに鼓動が速くなるのと同時に、周りの世界が

縮まったような感覚。パキパキ――お、音が変わってる――パキン。磨き上げられた石のようだった玉に、天辺から下へ大きな亀裂が走る。

パグン。

玉が真ん中から二つに割れた。中に黒っぽい何かが入っていたようだ。

高い位置にある明かり取りから、より強い光が差してきた。月が雲から出てきたのだろう。

俺はその光を頼りに、さらに顔を寄せる。

「ク……ァア」

ソイツが、鳴いた。

玉――いや卵の中にいたのは、トカゲのようなモノだった。体色は黒で、背中に蝙蝠のような小さな翼、頭にはやはり小さな二本の角が――ってどう見てもドラゴンじゃねぇか！

小さなドラゴンは伸びをするように体と翼を伸ばした。大きさは子犬ぐらいだろうか。広げても翼は小さい。顔立ちは、一般的なドラゴンのイメージほど面長ではなく、どちらかと言うと哺乳類っぽいか。しかし、その身を覆うのは黒い鱗で、頭のてっぺんから尻尾まで赤い毛らしきものがある。

「……」

俺は言葉を失っていた。事態がいい方に向かっているのか、酷い方に転がっているのか判断がつかない。この小さな生き物を利用して何ができるか考えるべきなのだろうが、あいにくとコイツがどんなドラゴンの子供なのかもわからないのだ。俺の地元――ラチハーク王国では魔獣を戦力に組み込む方針を未だに拒否し続けている。結果、国内全体で魔獣に対する関心は狩り方のみであって、生態や成長の仕方などは研究調査をしていないと言っていい。そんな国で育った俺に、どれだけの種類があるのかわからない龍種の、それも

子供について判断しろというほうが酷だ。
実際に頭を抱えて唸っている俺を、ドラゴンが見た。目が大きい。ご婦人に喜ばれそうな愛らしさがある。しかし、かすかに開いた口には、やけに鋭い歯が見えた。尻尾をゆっくり振っているので機嫌は良さそうなんだが……。
「クァ、クァ――」
ドラゴンは奇妙な息遣いで口を開いたり閉じたりし始めた。

「――クチンッ」

可愛いクシャミが聞こえたのと、俺の左の耳元を赤い光の筋が通り過ぎたのと、俺が、熱ッ！と思ったのが同時だった。
結果として、俺の命を救ったのは、子ドラゴンのクシャミの角度だった。もしかしたら、顔面にクシャミを吹きかけるのは失礼だと気を使ったのかもしれないが、生まれて一分足らずの生き物にそんな慎みがあったとも思えない。つまりたまたまだったということだろう。

ドラゴンはクシャミと共に光線だか熱線だかを吐き出したのだ。その赤い光は、俺の顔面左スレスレを通り、小屋の扉を音もなく貫通し、凄まじい振動を巻き起こした。背後から聞こえたのは音というより、圧力だった。実際、俺がいる小屋は地震でもここまではないだろうという強さで揺れる。
俺は思わずしゃがみ込んだ。
適当に置かれていたお宝の類は棚と言う棚から落ち、床につまれていたお宝は崩れ、あっちこっちに散らばっていく。ついでにバキバキと木材が割れる音がした。見れば、扉側の壁はほとんど吹き飛んでいる。焦げ臭い熱風が吹き込んできて、息が出来ない。
「あっ、テメ！」
気付くと、ドラゴンはしゃがみ込んだ俺の膝あたりに避難してい

た。人懐っこいのか親だと思っているのか、ともかく今のところ俺に危害を加えるつもりはないらしい。

「――っ！　アイツは！？」

思い至って立ち上がると、小屋の外は火の海だった。空気までもが暑いというより、熱い。炎の踊る地面近くには、何か黒っぽいものがたくさんある。ただ、目を凝らしてそれが何か確かめようとは思わなかった。

動いている人影は見えない。どれだけの爆発だったのか火炎だったのかは不明でも、結果としてこんな場面を見せつけられると、青年が死んだ可能性を考えない訳にはいかなかった。自分でも驚くことだが、俺はショックを受けていた。彼の人柄に好感も持っていたし、その圧倒的な強さに敬意も抱いていた。出来ればもう少し話をして、食事の一つも奢りたかった。

「……」

へこんでばかりもいられない。さっきの衝撃でガタが来ているだろうし、いつ燃えるとも限らない小屋は危険だ。気合いを入れて外に出る。とりあえずドラゴンの子供も抱きかかえて持ち出してやった。さっきの光線はおそらく事故のようなものだろうし、悪気や敵意もなかった筈だ。コイツが火に強い種類かもわからないし、小屋が倒壊したら下敷きになるかもしれない。

小屋から抜け出したはいいが、呆然としてしまう。これからどうしよう。火とか消したほうがいいだろうなぁ。井戸から水汲んでコレ消すのどれぐらいかかるかなぁ。つか本格的に森に火が移ったら俺死んじゃうだろうな。馬でも盗んで逃げちゃおうかなぁ……。

「クアー」

俺の後ろ向きな思考を断ったのは、ドラゴンの鳴き声だった。鼻先を向けている方を見ると、黒いビロードのようなものが綺麗な半球状に渦巻いていた。確かこんな上位結界が黒魔法にあった気がす

る。俺はまだパチパチいっている炎を避けつつ、慌てて走り寄った。
「――おいっ、生きてるのか！」
「ああ。かなり驚いたが、何とか間に合った」
青年の声だ。しかも、えらく涼しげ。そしてスルスルと黒魔法の結界術がほどけていく。現れた青年はまたもかすり傷一つ負っていない。小屋の中での俺の気遣いなど、彼には無用だったのだろう。ドラゴンの光線の方がよっぽど危険だったに違いない。
「ふむ。君にも怪我はなかったようだな」
「ああ。耳の端っこに小さい火傷ができたくらいだ。コイツのせいでな」
青年の前にドラゴンを持ち上げる。途端に青年の顔がフニャッと崩れた。
「ん……？　おお？　か……可愛い……」
「確かに可愛いかもしれんが、さっきの光線と爆発はコイツのクシャミだぞ」
俺の皮肉も青年には通じなかったらしい。ドラゴンに指を差し出したり引っ込めたりして遊んでいる。まぁ、あれだけの戦闘力があるなら指を齧り取られることもないだろうが。
一息ついて辺りを見回すと、炎はほとんど治まっていた。爆発の範囲内にあったものは燃え尽きてしまったのだろうか。チロチロと小さな火もあるにはあるが、これぐらいなら踏み消して回れば十分だ。

どう行動するにしても、このまま彼とドラゴンに遊び続けられても困る。俺は青年に呼びかけようとしてまだ名前も聞いていないことに思い当った。
「あー、そういえば名前は？」
「ん？　この子のか？」
「違う。お前さんの名前だよ」
デレデレ顔のまま言った青年に思わずツッコんでしまった。それ

でもボケてるつもりはないのだろう。これまでの会話で冗談が言えるヤツとも思えない。

俺はさっさと話を進める為に自分から名乗った。

「ああ、俺も名乗ってなかったな。ラチハーク王国メイプラ子爵の子、カインド・アスベル・ソーベルズだ」

軽く一礼した俺に対し、青年は右の拳で胸あての中央を叩いた。

「僕の名は、ルース――、ルース・アーガード。ただのルース・アーガードだ」

奇妙な自己紹介をする青年――ルースと、俺はかなり強く握手をし合った。ドラゴンが尻尾を揺らしながら、俺たちの手に鼻を寄せた。

これが、俺がドラゴンみたいに強い奴とどんな種類かわからないドラゴンとに出会った顛末だ。

## 2. 一つ目の卵（後書き）

初稿９月１０日

## 3．街と憲兵

目覚めは最悪だった。

「……――いい加減、起きないかっ！」

「ぐほぅ！？」

「グァン！？」

腹に激痛を感じ、跳ね起きる。

一緒に寝ていた子ドラゴンも俺の勢いに巻き込まれ、ベッドから落ちて声を上げた。

「な、何てことをぅ……！」

夜更かし大好き貴族の次男坊である俺は、基本甘ちゃんお坊ちゃんだ。睡眠不足には弱い。そして、ぐっすり眠っている人間の腹を殴るような奴に出会ったこともない。

しかし、俺の涙目の抗議は、ルースの真っ直ぐな瞳に届かなかったらしい。やけに背筋を伸ばし、腰に手を当てて言い放つ。

「僕は五歳ぐらいの頃からこうして起こされた。すぐに体が慣れて自然と目が覚めるようになる」

「なんつースパルタだよ……」

「とにかくおはよう、カインド。君もな、ドラゴン君」

「クァー」

「……はぁ。ああ、おはよう」

溜息混じりに朝の挨拶を済ませ、窓を見ると、まだ朝の日差しだった。実質三時間も寝てないんじゃないだろうか。

昨夜、あれから。

俺たちはまず後始末の問題でちょっと議論をするはめになった。

ルースが遺体の埋葬をしたがったのだ。俺としては早く温かいベッ

ドに行きたかったので、その辺りは憲兵隊の仕事だと説き伏せるしかない。何とか納得して貰えたと思えば、今度はドラゴンの処遇だ。魔物を飼うのは、それが例え子供であっても危険なことだ。俺は森の中なら何とか生きていけるだろうと、もう一度説得したが、今度は梃子でも動かない様子で断固連れて行くべきだ、と言う。ああだこうだ言っている内に、やがて俺が根負けした。眠かったのだ。

という訳でドラゴンを、ここサートレイトへ連れてきてしまった。

常にかまいたがるルースの方が馴れそうなものなのに、ドラゴンは俺のそばから離そうとすると暴れた。盗賊団の厩からちょろまかした馬に乗る頃には、俺のベストについたフードを自分の巣と決めたらしい。ルースは黒魔術でもっと早く帰ることができるだろうに、自分も馬に乗って、俺の後ろからドラゴンに声をかけていた。

暗い森の中を、月明かりと松明を頼りに進むのは、道があって馬に乗っていようと大変だった。街に着いたはいいが、当然門がしまっている。襲撃後ということでしっかり起きていた門番とちょっとした口論になった。最終的には俺の貴族としての身分をちらつかせることで無理に入り込んだようなものだ。

最後には宿の確保という問題が。ようやく遅くまでやっている酒屋を見つけ出して、そこの片隅に二人と一匹が押し込められたのは、そろそろ空が白んでくる頃だったのだ。

「さぁ、憲兵隊の詰め所に行かなければ。街の人々を安心させるのは一刻も早いほうがいい」

やけに元気なルースは報告の為に、こんがり焼き上がったオルトロスの牙を一つ、わざわざ持ってきていた。昨日の夜、彼が素手で大きな牙を引き抜いた時には度肝を抜かれたものだ。

酒屋の親父に二人分の宿代を払い、心からの感謝を伝えてから、憲兵隊の詰め所を目指す。

サートレイトはかなり大きな街だ。通りは馬車がすれ違ってもなお露店を広げるスペースがあり、石畳は近くの人間が掃除でもしているのだろう、清潔だった。そろそろ店を開こうとする人々や巡回に出ようとする下っ端兵士たちの姿が見える。

見渡せば、火事の跡らしき焼け焦げや、割られた窓ガラス、ブチ破られたドアなどが散在している。ただ、昨日の襲撃で少し興奮は残っているものの、すでに日常が戻りつつあるのも見て取れた。

「あー朝日が眩しィ……」

「ふふ、まったく、だらしがないな。そういえばカインド、このドラゴンに名前は付けないのか？」

「まだ飼うって決めた訳じゃねぇよ……」

とは言え、俺のフードにはドラゴンが納まっている。とりあえず連れて来てしまったものの、コイツの扱いも難しい。ルースがお気楽にペット気分で可愛がっていても、ドラゴンはドラゴンだ。しかも盗賊団の倉庫にあった卵から孵ったもので、いくら懐いていたって所有権を主張することは出来ない。例えば、卵がこの街の誰かから奪った物だった場合、返せと言われればドラゴンは返すしかない。名前など付けてしまえば情が移るに決まってるんだ。候補がないこともないが……、呼びかけたら最後、死ぬまで世話する覚悟を決めなければならなくなる。

まだグチグチ言っているルースをのらりくらりとかわしているうちに、詰め所に着いた。

その途端に。

「――失礼する！　責任者は誰だ？」

「あっ、オイ！」

止める間もなくルースが乗り込みやがった。

この街の規模だ、憲兵隊の詰め所も普通の家より大きい。鎧兜姿の十数人が一斉にこっちを振り返った。

「昨日、この街を襲撃した盗賊団について話がある。責任者を呼ん

できて欲しい」
「何だお前は？」
手近にいた若者がルースに詰め寄って言った。俺とルースより頭半分背が高い。突然の訪問者に気後れしない態度といい、上から目線といい、憲兵としては素質十分だ。
しかし、ルースの胆力はその辺の憲兵などはるかに超えた本物である。
「昨日の襲撃に居合わせた流れ者だ。あの盗賊団は、我々によって、すでに全滅している」
まぁ、簡潔な説明。
俺はだいぶ慣れていても、ルースの容姿は戦士というより役者の方がしっくりくる。そんな美形が言っているのが、盗賊団をツブしてきた、だ。悪ふざけか頭がおかしいか舞台の度胸をつけようとしているか、向こうの取り方としてはそんなところだろう。
案の定、憲兵たちは苦笑交じりで吹き出した。
「おいおい、奴らはオルトロスまで連れていたんだぞ？」
「ハッ。お前さんが全滅させられるなら、俺達でヴァレンセンを攻め落とせるぜ」
口々にああだこうだと話し出す。ヴァレンセンは軍事国家で苛烈な攻撃をすることで有名な国だ。要するにルースは馬鹿にされている。ちらりと彼を盗み見れば、ああ、こぶしがギリギリいってます。
「落ち着け。問題を起こしに来たんじゃない」
「……わかっている。とにかく責任者を読んで欲しい。証拠もあるんだ」
ルースは背中に背負ったズタ袋から、まるで棍棒のようなオルトロスの牙を取り出した。
さすがにこれで話が通じるだろうと思っていたが。
「フン、こんなモンをそれ見たことかと出されてもな」
「ブハハッ、小道具まで用意してるたぁ、悪ふざけにしても凝り過ぎだろうよ！」

全員で腹をかかえて笑い出す。
しかしあれだけの規模を持った盗賊団に関することなのだ。些細な情報でも欲しいと思わないのだろうか。ルースほどではないが、俺ですらもう少し真面目に仕事をこなしてもらいたいと思ってしまう。
恐る恐るルースを見ると、今度はやけにあっさりした顔で、呟いた。
「良くわかった……」
「ほおー、俺たちに迷惑かけてるのがわかったのかい。だったらすぐにお家へ帰って――」
初めに応対した兵士は最後までしゃべることが出来なかった。
「――貴様らの、愚かさがだっ！！」
ルースが、詰め所も壊れるかと思うほどの大声を出したのだ。昨夜の戦闘ですら、ここまでの声は出していない。ビリビリと空気が振動する。
俺はといえば、ルースの沸点の低さに驚いて制止することも出来ない。
静まり返った憲兵たちを見渡し、ルースの大声は続く。
「先入観から疑いを持つのは構わない。だが、それでも態度というものがある。一人ぐらいは真面目な対応が出来なければ、有益な情報でも取りこぼしてしまうだろう！　貴様らの職務怠慢はそのままこの街の損失に繋がる！　襲撃を知らせる報があったとしても、貴様らはそこで笑っていられるのかっ！！」
実に堂々とした演説は、街の人々を呼び寄せた。ちらほらと通りからこちらを覗き込む視線を感じる。俺としてはあんまり大事にならないようにして欲しかったんですけど……。
憲兵隊が殺気立つ中、詰め所の階段からやけに太った男が姿を現した。

「何なんだ、この馬鹿騒ぎは！？」
今までの連中に輪をかけて偉そうだった。高そうなマントやキッチリ刈られた髭など身なりは良くても、その体つきは運動が得意ではないと如実に語っていた。というかお前の右手のジョッキこそ何なんだ。
「――あ、隊長」
「こいつらが昨日の盗賊団をツブしたとか言うもので……」
のしのしと部下をかきわけ、ルースの正面に立った隊長は、長々とジョッキを呷ってから口を開いた。
「――ふー。こちらも暇ではないのだ。ウソや冗談でからかうなら他所へ行け」
うわ、超酒臭ぇ。朝から仕事場で酒呑んでるのか。
俺とルースは顔を見合わせた。
「責任者までコレじゃあなぁ……」
「怒りを通り越して、呆れるしかないな」
いい加減挑発しすぎたか隊長が出て来たことで勢い付いたか、憲兵たちが一歩踏み出して来る。
隊長は詰め所の奥へ向かいつつ、投げやりに腕を振った。
「腕の骨を一、二本折ってやれ。そうすれば少しは頭が良くなるだろう。ただし面倒はごめんだ、殺すなよ」
じわりじわりと迫ってくる憲兵たち。顔には薄笑いを浮かべ、こぶしをポキポキ鳴らす様子は、チンピラと大差ない。昨夜の、頭目に率いられていた盗賊たちの方が、よっぽど連携がとれていた。
ルースはため息を吐いて、言った。
「……身をもって学んでもらうしかないようだ」
その言葉が終わる前に、手近にいた憲兵二人が飛んだ。後ろの男を押しのけるようにして、床に転がっていく。
「ぐぅ、はぁっ……」
「うっ……ぐぅうう～」
腹を押さえて呻くしかない憲兵たち。恐れ慄くその他大勢。隊長

に至っては、木製のジョッキを落としていた。

ついに手を出してしまったのね。相手は一応お国に任命された憲兵たち。流れ者の君は今後近付かなければいいのかもしれないけれど、俺は年一ぐらいでこの国通らなきゃいけないんだ。お尋ね者とか本当に勘弁してほしい。あと、朝のアレは思いっきり手加減してくれてたんだなぁ。

俺が現実逃避している間にも、ルースの大立ち回りはしっかり続いていた。

「その痛み、しかと思い知れ」

ほとんど適当にしか見えない動きで、一人一人的確に攻撃を加えていく。大体が腹を殴られるか、脇腹を蹴られた。恐ろしいことに、彼はその場からほとんど動いていない。良く見れば、誰一人気絶すらしていなかった。その上、血の一滴も流れていないのだ。床に這いつくばった憲兵たちは一様に腹を押さえて呻き続けている。

事が終わるまでに要した時間は、一、二分。唯一攻撃を受けていない隊長は、それでもさっきまでのほろ酔いがいっぺんに冷めてしまったらしく、顔を真っ青にして震えていた。

「さて、隊長というからには当然他の者よりは強いんだろう？」

ルースが怖い顔で隊長に詰め寄ろうとしたので、ようやく我に返った俺は、前に出た。ありったけの自制心を動員して、極々冷静に見えるように取り繕う。

「はい、ストップ。落ち着けって言っただろ」

「しかしっ」

「もう相手は十分に面子潰されてるよ。これ以上はやりすぎだ」

この時点で、何の後ろ立てもなければお尋ね者になってもおかしくない状況だ。とりあえず交渉の余地は残しておいた方がいい。

震えが治まらない隊長に向き直る。

「盗賊団の壊滅は本当なんです。運悪く居合わせました」

「……」

未だにショックから抜け切れていない隊長は、馬鹿みたいな顔で黙ったまま。今のうちに情報を詰め込んでおこう。

「まずは彼の無礼をお詫びさせてください。何せ、この通り武骨者でして。ですが、彼の言葉は、この街の平和と繁栄、そして皆様の輝かしい名誉を望んでのこと。どうか、そのことはわかっていただきたいのです」

ルースを盗み見ると、顔を真っ赤に、目を三角にしている。俺は隊長と彼の間をさりげなく遮って『まぁ待て』の意思表示をする。

「……ぅ……うむ」

「寛大なお心遣い、感謝いたします」

「ああ、まぁな」

先に頭を下げて、ただの相槌を言質に変えることに成功。

「さて、その時の状況を説明させていただきます。私自身は捕らわれていましたし、私の護衛は奴らと、いざ剣を交えようとしたところでした。よって正確なことはわからないのです。しかしながら、とんでもない爆発が起こったことだけは確かです」

「――爆発？」

「はい。学のない私には、何が起こったのかわからないほどの爆発でした。それにより、大半の盗賊共は焼死しましたし、運よく残った者も、この、私の護衛が斬り捨てました」

そう言ってルースを指し示す。

「……そうか、爆発か……」

「奪われていたと思しき品物は、おそらくですが、ほぼ無事です」

そこで少し間を開け、隊長にギリギリ届く程度に声を押さえる。

「我々は通りすがりの身の上ですので、これ以上の干渉は致しません。よって、盗賊団の壊滅も財宝の奪還も未だ手付かずと言っていいでしょう。私としては――事は急を要する、かと」

隊長の目に、理解の光が見え始める。俺は、手柄はいりませんよ、と言っているのだ。

「……うむ。わかった。急いで確認させよう」
「迅速なご判断、感服いたします」
これで問題はないだろう。やや回り道はしたものの、こっちの要望は通った。
「ただし、確認が済むまでこの街から離れてもらっては困る」
「……はい？」
「私個人の判断では嘘は言っていないと思うが、念の為だ。それとも何かマズいことでもあるのかね？」
ルースを見れば、諦めなのか呆れなのか、軽く目をつぶったままの無表情だった。何も意見がないということでいいのだろう。俺としても、まぁ、余裕のない旅でもないし。
「わかりました。我々の出発は明朝にいたします」
「うむ。今日の夕方には確認も終わっていよう。もう一度ここに来てくれ」
「では、お時間を割いていただきありがとうございました。失礼いたします」
少し強引にルースの背中を押し、二人で頭を下げた。

俺たちはさっさと詰め所を後にしたが、まだ呻いている憲兵を怒鳴る隊長の声が、しっかり聞こえてきた。
すでに集まっていた人々もそれぞれの仕事に戻っている。
「あそこまでこちらを侮辱しておきながら、詫びの一つもなく、その上、また来い、だと……！」
わりと良くやったつもりだった俺の横で、ルースは不満をぶちまけている。
「君も君だ！　何だ、あのへりくだった態度はっ！？」
「グアー！」
さっきまで大人しくしていた子ドラゴンと一緒になって、矛先をこっちに変えてきやがった。このドラゴンはわりと空気を読むというか、まるで言葉がわかっているように見えることがあるな。

「結果で見れば、明日まで出発出来ないこと以外、上手くいっただろうが……」
「君は子爵令息だろう！　普通、貴族はもっとプライドを大事にするんじゃないのか！？」
「そんなプライドは旅をする上では邪魔だね。大体、俺は権威をチラつかせるつもりだったのに、さっさと乗り込んでケンカ腰になったのはお前じゃねぇか」
「ぐっ……」
それでも、隣国で我が家の権威が通じたかどうかは微妙なところだ。ここ――ルークセント王国は、俺の母国ラチハークから見ると北に国境を接する。あの隊長がウチの家紋を見て、貴族だと気付く保証はなかったんだが、それはルースには伏せておこう。
「ま、あの演説には、俺もスカっとしたけどな」
俺がそう言っても、ルースはまだ機嫌が晴れないのか、顔をしかめていた。
充分に憲兵の詰め所から離れたことを確認して、俺はルースに尋ねた。
「で、一日縛られちまったけど、どうするよ？」
「ああ、あの人にも報告しないと」
「あの人って？」
答えるよりも前に、ルースはさっさと道を曲がった。
「盗賊団が襲ってきた時に、僕に助けを求めた女性だ。奴らのアジトを教えてくれた。彼女と会ったのは、門の近くにある料理屋だったから、そこに行ってみよう」

## 3．街と憲兵（後書き）

初稿９月１１日

## 4．少し早い昼食

――ルースに助けを求め、盗賊団のアジトの場所を教えた、料理屋の女性。

俺はその台詞から、美形で強い戦士と気立てのいい看板娘の、ちょっとしたロマンスを想像した。後々、町を救った英雄を語る時に、彩りを加えるアクセントになるような。

「盗賊団のアジトを知ってるってのも物凄い話だな。俺なら何か裏があるんじゃないかと勘繰るぞ」

「いや、その店にいた全員が口ぐちに肯定したんだ。どうも何度か襲われていて、町民たちで居場所を探ることまでやったらしい」

何だそりゃ？　そんな状況で憲兵は何もしなかったと言うんだろうか。

「僕が食事をしていたら、三人ほど乗り込んで来てな。そいつらを叩きのめしたら、その女性が涙ながらに助けて欲しいと言う。周りにいた者たちも拝むように頼みこんでくる。そんな心からの訴えを退けることなど、僕には出来ない。その後は君も知っての通りだ」

何という直情かつ待ったナシの一直線。しかし、ルースのそういう性格で助かった身としては、軽口も言えない。

「で、それを報告、か。明日になればさすがに憲兵たちから話が広がると思うが……」

「一刻も早く安心してほしいし、何より、あんなぐうたらした連中に任せておけないっ」

意気込んで早足になるルースを追いかけて辿り着いたのは、かなり大きな料理屋だった。とはいえ、今は朝食には遅く昼食には早い時間帯で、客はちらほらとしかいない。厨房からは賑やかな声が聞こえてきても、給仕のお嬢さん方はやや手持無沙汰な様子。

この中に、ルースが言っていた女性がいるのだろうか。
店員たちは一様にルースから目が離せなくなっている。一番近くにいた赤毛の子などは、腰が抜けてしまったのか床にへたり込んでしまったぐらいだ。

「ああ、アンタ！　無事だったのかい！？」
しかし、彼に声をかけたのは、孫が十人ぐらいいそうな老婆だったわけだが。

ばあさんは皺くちゃの顔に驚きと安堵の表情を浮かべ、テーブルを弾き飛ばすように走り寄ってきた。しっかりと彼女を受け止めたルースは優しい笑顔で、頷いた。
「もちろんだ。盗賊団は一人残らず死んだ。憲兵たちと一悶着あったが、今頃確認に出発しているだろう」
「昨日は思わず助けてくれなんて口走っちまって。後でよく考えてみたら、何てことを言っちまったんだろうって後悔するやら心配になるやら……ああ、どこにも怪我はないかい？」
ばあさんがあと五十年ほど若ければ、非常に絵になったであろう光景だ。それだけに惜しい。もったいない。
「ああ、大丈夫。取り急ぎ報告をしないと、と思い訪ねただけだ」
「クソ憲兵どもに聞かせたいねぇ、その台詞。それで、コチラは？　昨夜は一人でいたようだったけど」
頬を涙で濡らした老婆は、笑顔になると、俺を見た。完全に添え物扱いだが、事実その通りだ。
「奴らに拉致されていたんだ。何だかんだと道連れになってしまった、といったところか？」
「大変な危機的状況を電光石火で助けてもらいましたよ。貴女が彼に助けを求めなければ、今頃はどんな目にあっていたか……」
両方を立てる言い方で面倒な説明を省略した。俺の間抜けな醜態をわざわざ話すこともないだろう。

「そう言ってもらえると少し気が楽になるねぇ。アンタたち、時間はあるかい？」

思わず俺とルースは顔を見合わせた。

「危険な頼みをしちまった分には程遠いかもしれないけど、せめて感謝の気持ちを受け取って欲しいんだよ。好きなだけ食べてっておくれ」

「いや、しかし、そういう訳には……」

「何、昨日アンタがいなかったら、どれだけ被害があったかわからないんだ。これぐらいしか出来ないババァの我儘を聞いておくれ。そっちの人もついでだよ」

ルースの遠慮をばあさんは満面の笑みで一蹴した。

「ほら、いつまでもサボってないでっ、さっさとこの二人にありったけの料理持ってきな！」

ばあさんの一喝で、ずっとルースに見惚れていた給仕たちが我に返った。一目散に厨房へ向かっていく。

ここまでされたら断るわけにもいかない。俺とルースはもう一度顔を見合わせると、どちらともなく苦笑してテーブルについた。

運ばれてきた料理は種類が豊富で、本当に感謝を示しているのが良くわかった。分厚い牛肉やたくさんの野菜が煮込まれたスープなど、素朴でありながら材料の味を良く引き出している。今までの旅ではそれなりに金をかけていて、当然出される料理も豪華だったが、それが馬鹿らしくなってしまうほど、ここのメシの方が美味い。

「グゥー」

一通り味を楽しんだ頃、俺のフードで大人しくしていたドラゴンが恨めしそうな鳴き声を上げた。そういえば、昨夜から何も食べさせていない。

ちょうど別の料理を運んできたばあさんが目を丸くして言った。

「おや、魔獣持ちだったのかい？　人は見かけによらないってのはホントだね」

「……ここで食べさせるわけにはいかないですよねぇ？」
恐る恐る尋ねると、ばあさんはあっさり首を横に振った。
「いんや、ルークセントでは魔獣持ちはそれほど珍しくないんだ。さすがに大きいのはお断りさせてもらうけど、これぐらいだったら四六時中店ん中で飲み食いしてるよ」
恐るべし、ルークセント。さすが騎獣部隊を早くから取り入れた国だけある。
お言葉に甘えて、隣のテーブルにドラゴンを降ろした。目の前の料理から何をやろうか選ぼうとして、コイツが何を食べるのか一切知らないことに気がついた。
「ド、ドラゴンの子供は何を食うんだ？」
「ふーむ。とりあえず色々置いてみて、この子に選ばせてみればいいんじゃないか？」
んな乱暴な、とは思ったが、結局ルースの提案以上のものは思い浮かばなかったので、肉や野菜、ついでにミルクと水などを小皿に盛り分けて、ドラゴンの鼻先に近づけてみる。
結果として――、何でも食った。
「か、可愛い……けどっ、どうして僕からは何も食べてくれないんだっ！？」
いちいち感動するルースが差し出す肉には目もくれず、今は俺が皿についでやったミルクを細い舌で舐めとっていた。コイツは俺たちが皿に取り分けるところをジッと見ていて、俺が用意した物は肉から野菜から物凄い勢いで口に入れていくのに、ルースの方はチラ見するだけで匂いすら嗅ごうとしないのだ。
「やっぱ、俺のこと親だと思ってんのかなぁ……」
「ううん、絶対、カインドよりも僕の方が可愛がるのに」
いや、何故俺を睨む。こんな強い奴にこんなことで恨みを持たれるのは勘弁願いたいんだが。

そんなこんなで自分たちも食事をしつつ、ドラゴンにも結構な量の食べ物を与えることが出来た。
「あー、食った食った」
「グァー……ケプッ」
「うわ、今ゲップしなかったか！？　ああ、何て可愛さだ……」
昨夜盗賊にねじ込まれたパンから何も食べていなかった俺は、ドラゴン同様腹が減っていた。貴族にあるまじき暴食をしてしまっても仕方がないと思う。ただ、向こうの厚意に甘えすぎかもしれない。
「すみません、ついでの分際で……」
お茶を淹れてくれるばあさんに頭を下げ、俺とドラゴンの分の支払いを考えながら財布を探った。
「気にしなさんな。どうやらもう友達と言ってもよさそうだしね、アンタにだけ払わせたら、こっちの人も気持ち良く食事できないだろう？　ここは諦めておくれよ」
「どうも、ありがとうございます」
「僕からもお礼を。ありがとう、おばあさん」
二人で頭を下げるとばあさんは顔をしかめた。
「やめとくれ。お礼を言うのはこっちなんだからね。じゃあ、好きなだけゆっくりしていって」
気風のいいばあさんは逃げるように奥に引っ込んでいった。何となく見送ってから、カップを持ち上げる。
「あそこまで言われちゃあ、もう何も言えないよなぁ……」
「ふふ、ここはお言葉に甘えよう。コラ、逃げるな」
「グァッ！」
ルースはドラゴンを抱き上げていた。思いっきり嫌がられるのを何とか宥めすかしている。微笑ましいと言えないこともない。どうにか逃げようと体をくねらせるドラゴンに注目しながら彼が言った。
「そういえば。君は、僕とは違って、どこか目的地へ向かって旅をしているんだろう？」

「ああ。フツーは、旅には目的地があるもんだ」
「最終的な目的地はどこなんだ？」
こちらの皮肉にも気付かずさらりと返してくるルース。そういえば言ってなかったか。
「この国から見ると、北に隣接するユミル学院だ。そこの学院生になる為に、な」
「ほう。アレイド・アークや彼の弟子たちで有名な、あの……」

ユミル学院。創立から三百年ちょっと経っている由緒正しい戦力育成機関だ。戦士から魔法使いまであらゆる分野に対応できる教師が多数雇われており、海や山、広大な森などを含む多種多様な土地には魔物が多く、実戦にも事欠かない。大抵十五、六歳で入学、約五、六年で卒業するころには立派な戦士や魔法使いになっており、国に帰れば軍の幹部候補生として歓迎される。

元々は、周辺の国々がたまたま平和な時期に、友好の証として、それぞれの土地や人材を提供し合って、若者の育成をより良いものにしようと始められたらしい。この国――ルークセントも設立に協力した一国だった筈だ。

ちなみにアレイド・アークは二百年ほど前のとんでもなく有名な大英雄で、彼やその四人の弟子たちはユミル学院の出身だったと言われている。

「しかし、平民上がりの兵士でもないのに、何で一人旅などをしているんだ？　普通なら従者を伴って馬に乗って、といったところだと思うのだが……」
「父親の反対を押し切った形で、ユミルに入るんでね。援助は一切ナシってことになったのさ。自分のヘソクリと母親が出してくれた金で装備を整えたら、従者にまで回らなかったんだ」
言う必要はないと判断して言わなかったが、元々父上とは折り合いが悪かった。その上、俺が軍を目指すなどと言い出すとは、何代

も前から文官として地位を築いてきた血と家を大事にする父上には、我慢ならないことだっただろう。これぐらいの嫌がらせは覚悟の上だった。

しかし、何とか用意した馬を失うとは思っていなかった。盗賊に捕らわれる前、預けておいたあの馬は今頃どうなっているだろう。

「……そうか。どこもかしこも、なかなか儘ならないものだな……」

「……ま、俺には合ってるよ。おい、いい加減ドラゴン放してやれ。どうみてもストレス溜まってる」

テーブル越しにドラゴンの首根っこを掴んで、俺のフードに避難させる。

ルースの言い回しには引っかかるものを感じたが、俺にはそこまで深入りするつもりも権利もない。彼自身に対しては親しみや恩義を感じていても、俺に出来ることなどたかが知れているし、短ければ今日明日で別れる関係でしかない。

「クゥー」

そんな自分への後ろめたさを誤魔化す意味合いもあって、ドラゴンに話を持っていったんだが、結果としてはそれが良かったかもしれない。

この小さな魔物は明らかにほっとした様子で、俺のフードの中で力を抜いた。見た目の可愛らしさについ忘れがちになっても、コイツはあの熱線を吐き出すことが出来るかもしれない魔物だ。暴走しかねない状況からは出来るだけ遠ざけた方がいい。

「ぬぅぅぅ、この敗北感はどこへぶつければ！」

「構いすぎると嫌がるってこともあるんだって。生まれてまだ丸一日も経ってないんだぞ。我慢を覚えるのは、さすがにもうちょっと後だろ」

「グア」

「くそぅ、息までぴったり合わせてっ！　見せつけてるのか君たちはっ！？」

等と、グダグダ話しているうちに客が増え始めた。そろそろ昼になるのだろう。食事も終わったし、これ以上居座るのも悪い。
「そろそろ出ようぜ」
「む、そうだな」

料理屋を出ようと俺たちは腰を浮かせた。その時――。
「――憲兵隊だ！　二人連れの旅人を探している！」
「全員顔を良く見せなさいっ」
乱暴にドアが開いて、二人の憲兵が堂々たる声と態度で踏み込んできた。
腰を浮かせたままのルースと俺は思わず顔を見合わせた。
「――あれは」
「ああ、俺たちに用があるんだろうな……」
料理屋の客たちは手を止めて、ドアに顔を向けていた。さっきまでの健全なざわめきは跡形もなくなり、嫌な緊張感が充満していく。
場の空気が悪くなる前に、俺は憲兵たちの前に進み出た。
「ひょっとして我々にご用ですか？」
「もう一人は――、ああ、そこにいたか。大剣背負った美形に、身なりのいい平凡な男……」
「彼らのようですね。そう、隊長があなた方をお呼びです」
片方はガタイが良く鎧から見える腕がムッキムキ、もう一人はガリガリで剣とは別に短い杖を腰に差している。二人とも俺やルースより二、三歳年上だろうか。詰め所では見なかった顔だ。
「我らと共に来ていただくことになります。会計を済ませて出てくるように」
「逃げ出そうとか思うんじゃねぇぞ」
憲兵二人は言うだけ言って出ていく。態度はでかいが、まぁ、どんな街でも憲兵なんてこんなもんだ。緊張が解けた客たちが口々に話し出し、料理屋は元の喧騒を取り戻した。
「ちょっとアンタたち大丈夫かい？　最近の憲兵隊ときたら、イザ

となったら何の役にも立ちゃしないってのに態度だけデカくて――」
「あんな口だけの連中、束になってかかってこようが平気だ」
心配して駆け寄ってくるばあさんに、涼しい表情で頷くルース。
チラチラこちらを窺っていた給仕の娘が顔を真っ赤にして溜息をついていた。実際、昨夜も今日も大人数を一人で相手にして傷一つ負っていないのだから、まさに彼は口だけではないのだ。
「いや、悪いことしてるわけでもないですし。事務的なものでしょう。手早く終わらせるに限ります。ごちそうさまでした」
「美味しい食事をありがとう、おばあさん」
お礼を言って店を出ると、二人の憲兵が偉そうに待っていた。ムキムキが顎で大通りを指し示し、勝手に歩き出す。

「……一つ、言っておくことがある。さっきはばあさんの手前ああ言ったが、どうにもキナ臭い」
憲兵たちから少し距離をとってついていく道すがら、俺はギリギリ届くぐらいの小声でルースに言った。
「何がだ？」
「後で来てくれ、ぐらいだったのが、わざわざ探し出してまで呼び出すっていうのがな。しかもあの仕事出来なさそうな隊長が、だぞ。もしかしたら何か面倒なことがあるかもしれない」
「ふむ。確かにな。わかった、覚悟だけはしておこう」
ルースは小声で頷いた。頼もしすぎる。
わざわざ俺が注意を促す必要はないのかもしれないが、心の準備一つで変わってくることもあるかもしれない。

詰め所の前には二頭立ての馬車がとまっていた。黒い車体は実用性と、見た目の豪華さとがなかなかのバランスで両立された、品のいいものだった。今のところ御者台には誰も乗っていない。
二人の憲兵に促されて詰め所に入ると、隊長がどっしり座ったまま顔を上げた。

「ああ、やっと来たか」
俺たちがいない間に精神を立て直したのか、不遜な態度が復活している。
「先ほど、盗賊たちのアジトが壊滅しているのを確認した。盗賊どもの死体やオルトロスの残骸らしきものがあったという報告も受けている」
隊長が向かっているテーブルには鳥かごが置かれ、一羽の鳩がじっとこちらを見ていた。この詰め所に帰るよう育てられた伝書鳩か。
一方、ルースは無表情を装っているが鼻の頭がピクピクしていた。正しいのは自分だったと叫びたいのを我慢しているに違いない。
小さな紙切れを広げ、隊長は悪びれもせず続けた。
「もちろん財宝の確保も完了している。さて――、何か我々に報告をし忘れた事柄はないかね？」
「ありません。あ、昨夜アジトからここへ来るために、馬を二頭借りましたね。門番に預けてあります」
考えをまとめるフリをしつつ、答える。
思い当たる節はドラゴンの子供ぐらいだが……。憲兵がそのあたりの情報を持ってはいないだろう。
「……よかろう。最後に一つ。我々は今回の襲撃と盗賊団の壊滅に関して、直接本部へ報告をしに行くことになったのだ」
「はぁ」
思わず生返事をしてしまった時には、嫌な予感は確信に変わっていた。
「お前たちにも証人として、王都までついてきてもらいたい」

## 4．少し早い昼食（後書き）

初稿９月１３日

１１月２２日誤字修正
俺のフードに非難→避難
また誤字とはちょっと違いますがわかりづらい部分を修正
ドラゴンの首→ドラゴンの首根っこ
ご指摘ありがとうございます

## 5．気まずい馬車

馬車は速足で整備された道を進んでいた。
ルークセントの道はまずまずといったところだ。たまに跳ねても、縛られて身動きがとれないような状況でなければ、尻が痛くなるようなことはない。

それでも、馬車の中の空気は重かった。

「このペースなら、王都までは二日と少し、というところか……」
隊長がぽつりと呟く。
馬車内には俺とルース、隊長とムキムキがそれぞれ隣同士で、向かい合わせに座っていた。さらに、ガリガリは一人御者台だ。
それにドラゴンは俺のベストについたフードの中にいる。一切鳴き声も上げず、大して動かないのは、もしや眠っているのだろうか。なるべく存在は隠したいし、そうなると隠す場所もない馬車内で騒がれても堪らないので、非常に助かるのだが。
「……」
ルースはルースで黙りこくったままだ。それほど狭くないとはいえ、大剣を背負ったままでは馬車の座席にはいられないので、やけに装飾的な鞘に入ったままの大剣を抱え込むようにして座っている。
ムキムキは腕組みをした上で口を真一文字に結び、瞑想するように目を閉じている。
結果として、馬車内で発言するのは隊長のみ。誰も相槌一つ打たないとあって、気まずい雰囲気は一向に晴れない。

俺は仕方なく口を開いた。
「……我々も同行することになった経緯を聞かせてもらえますか？」
「王都の憲兵本部からの命令だ。盗賊団壊滅の報告を行ったところ、

至急関係者を含めて直接来るように、との返答をもらった」
隊長はスラスラとそう言った。憲兵隊の詰め所には通常、通信用の共感水晶（クリスタル）が置いてある。かなりかさばるし、地脈の影響を受けやすいので、携帯して使うには不向きだが、速い情報のやり取りには欠かせない物だ。
「憲兵隊本部でもう一度報告をすることになるだろうな。それほど気負う必要はあるまいて」
嘘ではないだろうが、といったところか。だが、真実全てを話している訳でもないだろう。少なくとも額面通りに受け取ることは出来ない。
「我々に拒否権は……」
訪ねる俺に隊長は冷ややかな目を向ける。
「ないな。逃げたとしてもお尋ね者になることは避けられん。大体、聴取を避けなければならないような理由があるのか？」
隊長はルースの実力を知っている。その上で釘を刺しているのだろう。俺は慌てて言った。
「いえ、ありません。しかし、一般市民というのは、国家権力には意味なく怯えるものですよ。それも本部となると余計です」
恭順を示しておくと、隊長はにんまり笑った。
「気負う必要はないと言っただろう。我が憲兵隊は紳士の集まりだ」
これは考えるまでもなく嘘だ。
ルースがピクリと反応した。どうやら俺と同意見らしい。
「こういった報告の為に王都に行かれることは、よくあるんですか？」
「私自身は年に何回か行くぞ。ルークセントでは憲兵隊に弓引くような愚か者はいない。心配は無用だ」
別にそういう意味で心配してるわけじゃないだがなぁ。
結局、車内の空気が良くなることもなく、気まずいまま半日が過ぎた。

「ここに泊まってもらうことになる」
日が沈む寸前、サートレイトから半日かかって、辿り着いたのは小さな村だった。
だが、二十戸あるかないか、というぐらいの村でも、普通の宿があるのがルークセント王国だ。
国営の宿が等間隔で点在するのだ。それほど豪華ではないとはいえ、貴族でも我慢が出来る程度には広く、清潔。ついでに値段も高い。
どこから出発しても宿の心配だけはないらない、というのがこの国のウリだった。
隊長一人、ガリガリとムキムキ、俺とルースでそれぞれ一部屋が割り当てられた。
宿の中でも従者や奉公人向けの部屋なのだろう、ベッドが二つに机が一つ、あとはランプが一つあるぐらいだった。
前日から続く寝不足と、ルースの行動に対する一喜一憂、ついでに馬車内の空気に疲れていた俺は、ほとんどベッドに倒れこむように眠りについた。

「さぁ、朝だぞ！」
「ぐほあっ！？」
「グァン！？」
昨日の朝と同じ激痛を伴う起床を経て。

朝特有のやけに眩しい太陽の光を浴びながら、俺たちは宿を出発した。
相変わらず気まずい雰囲気の中、昼には小さな町で昼食、午後もずっと馬車の中だ。日の光が赤くなる頃、昨日よりは大きな村に辿り着いた。家々が寄り集まるように十数軒、少し離れて森を背負うように宿が立っている。
昨日泊まった宿よりは大きい、それでも泊まれる人数は３０人前

後といったところだろうかか。
「明日は早めに出発したい。日の出には起床、一時間以内に出発。以上」
隊長はそれだけ言うと、自分が泊まる部屋に引っ込んだ。
「私たちも失礼します。余計な気など起こさぬよう……」
ガリガリがそう言い残し、隣に泊まる憲兵二人も、一礼して部屋に入った。食事も部屋で取るのだろう。
談話室兼食堂といった感じの広間に取り残された俺たちは、顔を見合わせた。
「俺らはここでメシにするか……」
「やれやれ。肩が凝ったな」
「グァー」
丸一日ともなると、馬車でただ揺られているだけでも、結構疲れるものだ。気まずい他人と一緒では尚更である。さっさと食事をとることにした。
丸いテーブルにつき、適当に注文をする。
料理を待つ間、暇そうにしていたルースが頬杖をついたまま言った。
「そう言えば……、腰の物についての説明をまだ聞いていないぞ、カインド」
「あ？」
「盗賊の一人が使ったほとんど動きなく黒魔法を打ち出したアイテムがあっただろう。一昨日の夜、後で説明してやると、君が言ったんだぞ」
確かにそんなことを言った気もする。
俺はホルスターから魔銃を抜き出してから口を開いた。
「アイテムじゃなくて武器な。黒魔法の紋章とか、精霊魔法の呪文を封印した魔弾を解放、発動させるってモンだ。名前は魔銃」
「魔力を通す？　昨日の盗賊が＜貫く枯れ葉＞を打った時には何も感じなかったんだが、その魔力はどこから来るんだ？」

「魔力は弾の後部に蓄えられてる。このサイズだとCクラス程度の魔術師が使う魔法とほぼ同じ威力だ」
俺は弾倉から魔弾を抜き取って、そのうちの一発をルースに渡した。
「38口径＜貫く枯れ葉＞弾だ。弾頭は＜貫く枯れ葉＞の呪紋が描かれた紙を粘土で封印してあって、鉄製の薬莢に魔薬として水晶の粉が入ってる。これはメイプラ製の弾丸だから水晶の粉が使われてるけど、地域によっては魔力を有してる植物とか魔物の骨を魔薬として使ってる所もあるらしいぞ」
「……ふむ。これは……凄いな」
ルースは俺の言葉に反応出来ないぐらい弾を見つめている。
少し大きな街ならいくらでも売ってるものなんだがなぁ。
買い与えられた玩具に夢中になる子供のようなルースがおかしくて、少し笑ってしまった。
「む。笑うことはないだろう。初めて見る物なんだ」
「いや、悪かった。お詫びじゃないが、こっちも触ってみるか？」
機嫌を損ねたようなので、弾を抜いたままの魔銃を銃身を握って渡す。
「いいのかっ！？」
飛びついて来たルースの笑顔は、喜び一色で塗り潰されたような、本当に無邪気なものだった。
あれだけの実力にこれだけの容姿なのに、行動は素直で飾ることを知らない。変な奴だ。
「おおぉ……。ふむ、なるほど。この筒の――内側部分は魔力反射で……。持ち手辺りに力場のようなものが……。微かな魔力を発生させて、それを起爆剤として用いるのか……。ふむふむ、良く良く見れば確かに武器だ。余計な装飾がない代わりに、全ての動作を円滑にする為の配慮がある。分解しては――駄目だよな？」
「ああ……、駄目だ」
ちなみにこの銃は、技術国であるメイプラ、その中でも名工と名

高いジイさんの最新作だ。手入れはともかく、ヘタに分解などしたら、その辺の鍛冶屋には直せない。
「一度撃ってみるのは――」
「駄目だ」
「……そうか、残念だ」
途端にしょんぼりするルース。魔銃のグリップを握ったまま、俺に差し出してくる。弾が入っていないとはいえ、非常に怖い。
「一発とはいえ、そこそこ値が張るんだ。一応、旅の途中だから無駄遣いは避けたい」
魔銃を受け取りつつ言った。というか、俺から言わせれば、自由自在に魔術を使えるルースの方がずっと羨ましい。
「それなら仕方がない。僕もどこかで手に入れるとしよう」
「グアッ」
ドラゴンが鳴き声を上げたので、辺りを見渡すと厨房から料理が出てくるところだった。
「今の今まで黙ってたのにな」
「フードから出した方が良くないか、カインド？　いや、是非テーブルで食事をさせてやるべきだ！」
料理は普通だった。昨夜の夕食、今日の昼食と印象がほとんど変わらない。サートレイトの料理屋の方がはるかに美味い。それでも量はあったし、俺もルースもドラゴンも文句は言わずにしっかりと食べた。

食事を終えれば、特にやることもない。俺たちはさっさと部屋に引っ込んだ。用意された部屋も昨日と同じ。また同じ部屋に戻って来たか、と錯覚してしまうほどだ。
「……風呂に入りたいなぁ」
鎧を脱ぎ、一応装備を点検している時にルースがぼやいた。
巨大な剣を鞘から抜きながら言うような台詞ではない。
「そりゃあ、無理難題ってところだろう」

「わかってる。思わず言ってしまっただけだ」
「サートレイトなら風呂屋ぐらいあっただろうけどな」
「……それを聞いたら、またあの隊長への怒りが沸いてきたぞ……」
隣のベッドから確かな圧力を感じる。これが――怒気？
「忘れて、寝ろ。王都につけばさすがに入れるって」
「グァー」
「おお、慰めてくれるのか、可愛いなぁ」
鼻を寄せて鳴き声を上げるドラゴンに、ルースの雰囲気が一変する。元々本気で怒っていた訳ではないだろうが、それでもこの変わり身の早さには感心することしきりだ。あと慰めるというよりは宥めているんだと思う。

横になれば、すぐさま眠気が襲ってくる。
ドラゴンを抱き上げようとするルースの猫撫で声と、それでもしっかり嫌がっているらしいドラゴンのむずがる声を聞きながら、俺は眠りについた。

「……ンド……、……きろ、カインド……」
自分の体を揺り動かされる驚きと、囁くようなルースの声で起きたのは何時間後の事だったか。二日連続で鳩尾に鉄拳を食らっていたこともあって、俺はわりとあっさり目を覚ました。
上半身を起こして、室内を見渡しても暗い。
「クァ」
ドラゴンまで起きている。俺の懐から見上げるようにして俺の顔を覗き込んでいた。無意識に赤い毛でフサフサの頭を撫でつつ、重たい口を開いた。
「……何だよ、まだ夜じゃないふぁ～……」
「あまり音を立てるな。この宿は囲まれている」
「――あぁ？」
「宿が囲まれていると言ったんだ。人数は五人ほどだが、猟犬かそ

れに近い生き物が十頭以上いる」
「!?」
俺の意識は一気に覚醒した。
この二日とちょっとでルースの性格と能力は大体把握している。こんな冗談を言うような奴ではないし、盗賊のアジトで俺には聞き取れない音を正確に把握していた実績もある。
「気付いたのはどれぐらい前だ?」
「つい、さっきだ。不穏な気配とでも言えばいいかな、囁き声や極力たてないようにする足音などが耳に入った。おそらく……、そろそろ包囲が完了する」
そう言いつつルースは鎧を着始める。俺も慌てて、毛布の上にのせたままだったベストに袖を通し、鎧と剣帯に手を伸ばした。
「目的は……?」
「それこそ彼らに聞かないとわからないだろうな」
口元を歪めながら、ほとんど音を立てないで大剣を背負うルースの姿はとても様になっていた。俺の方も準備完了。最後にドラゴンをフードに押し込み、考えを纏める。
「包囲ってのが気になる。物取りならそんなことする必要ないだろ」
「感じとれる気配が暗殺者レベルだ、普通の物取りとは思えない――っと完全に包囲されたな」
時間はないということか……。
「とりあえず、僕が出て行って相手をしよう。敵の目的が何であれ、向かってくる者がいれば出足は鈍る」
「それでいくしかないか。ルースが注意を引きつけている間に、俺は憲兵たちと宿にいる人間を起こす」
「なるべく多く相手をするつもりだが、全員を引きとめるのは難しいだろう。君は逃げに徹した方がいいぞ」
ルースはその端正な顔を心配そうに歪めて言った。
「俺一人ならともかく、憲兵たちがいれば、こっちの安全は何とかなるだろ。お前こそヘマするなよ」

「グアー」
「ふふ。そうか、君もいたな。カインドを頼むぞ」
「グアッ」
ドラゴンの頭を一撫でして、ルースは大剣を抜き放つ。音もなく窓を開けると、するりと外へ出て行った。

「ふぅー……っし、行くか」
俺も魔銃を抜き、慎重に部屋のドアを開けた。
右。左。ついでに上。臆病かもしれないが、ここまで確認してから廊下へ出る。
音を立てないように隣のガリガリとムキムキの部屋に。俺たちと同じ広さの部屋で二人は普通に寝息を立てていた。
「起きて、起きてください」
二人を同時に揺り動かす。
「……あァ？」
「一体何だと言うんですか……」
とてつもなく不機嫌そうな声を上げながら起きるムキムキとガリガリ。それでも一応兵士らしく、突然の起床にもそれほどうろたえた様子はなかった。俺は人差し指を口の前で立てる。
「静かに。先ほど私の従者が奇妙な気配を感じ取りました。彼はすでに外へ出て、曲者の相手をしています。しかし、人数が多いらしく、全員を抑えるのは難しいかもしれません。彼が言うには、暗殺者のような気配が五人ほど、さらに猟犬のような気配が十頭以上いるとのことです」
具体的な内容に、すぐに二人の顔が真剣なものになる。
「逃げる為に嘘をついてる訳じゃねぇよな」
俺を睨みつけるムキムキに、ガリガリが少し間を置いて言う。
「……こんな嘘をついても意味はないですよ。わざわざ我々を起こすのならなおさらです」
「まずは隊長に報告か」

ムキムキは壁に立てかけてあった剣を抜いて言った。すぐにでも飛びだしそうだったので、慌てて口を開く。
「宿の主、それにもし他に宿泊客がいるならその人たちにも、伝えないと」
「なら、ウェイバーは隊長の所へ」
「おう」
ムキムキことウェイバーは鎧も着ずに部屋を出て行った。そういえば名前すら聞いていなかったんだな。
ていうかウェイバーて。
「貴方も、彼と一緒に隊長のところへ行ってください」
ガリガリは胸当てだけを着け、枕元にあった指輪をいくつか指に嵌めた。
「いいえ、私も主のところへ向かいます」
俺は即答した。
こんなにバタバタしている中、ただじっとしているだけなんて嫌だ。
この状況なら、どうせどこにいようとも襲われるリスクは存在する。
それならより派手で、起伏に富んだ、後々話す時に面白い方を――。
「貴方たちは本来護衛対象なんですがねぇ」
ため息交じりの言葉に暴走しかかっていた思考から覚める。
「この状況なら、目と耳は一つでも多い方がいいでしょう？」
「それは説得力のある言葉ですね。よろしい……では、一緒に行きましょうか」
ガリガリがそっとドアを開け、俺もその後ろに続く。
当然のことながら灯りはつけられない。廊下はかすかに外の光が入ってくる程度で、充分に目が慣れている今でも、ぼんやりとした

輪郭しか確認出来なかった。
パキパキと音がする。
「――ッ！？」
驚いてそちらを見ると、ガリガリが指の関節を鳴らしていた。思わず囁いてしまう。
「この状況で何してんすか……」
「僕は白魔法が専門なのでね。指の動きは少しでも滑らかにしたいんですよ」
言葉で精霊に呼び掛ける精霊魔法、紋章で理を超える黒魔法に対して、形で奇跡を起こす魔法を白魔法と呼ぶ。手指で印を組み、それを何度か組み替えることで、魔法を打ち出すのだ。基本的に防御や敵の拘束など、補助的な魔法が多い。
この状況では少々心もとないがこればかりは仕方ないだろう。
それに、戦闘に関して素人で、唯一まともに使える武器といったら魔銃ぐらいの、この俺が最も心もとない存在である。
「緊張で気が立っていたもので……失礼しました」
「いえ……。援護をお願いしますよ」
曲がり角だ。ガリガリは片目以外を壁に隠すように、そっと角の向こうを確認し、一拍を置いて一気に踏み込んだ。
「ふぅ――……。オッケーのようですね」
一歩一歩足音を殺しながら進み、何度も何度も視線を動かし、怯えた鶏の様な動きで、ようやく宿の主の部屋と思しき場所まで辿り着いた。
「もし……、もし、主……」
ガリガリがドアを小さくノックし、小声で呼びかける。その間、俺は彼と背中合わせになって、周囲を警戒していた。
「ルークセント憲兵団、サートレイト隊所属、フィリップ・ゴゥラです。火急の用件で参りました」
ガリガリが憲兵として名乗り、耳を澄ますが、返事はない。
思わず背中合わせで、顔を見合わせてしまう。暗闇の中、相手の

表情までは読み取れないはずなのに、俺にはガリガリの顔が引きつっているのが、見えた気がした。

「……い、行くしかないでしょうねぇ……」

頑張れ憲兵。

廊下側に気配がないので、俺は少し距離をとり、魔銃を構える。ガリガリがドアの取っ手に手をかけ、こちらを向く。互いに呼吸を計る。心臓が煩い。グリップを握る手が汗で湿っているのが今になってわかる。一度銃を持ち替え、ズボンで手を拭いてから、今度はしっかりと握った。

「……」

俺が頷くと、憲兵はドアを蹴破るように勢いよく開ける。

「ガァァァウウ！！」

咆哮とまったく同時に躍りかかる黒い影。

俺の体は反射的に魔銃の引き金を引いていた。

## 5．気まずい馬車（後書き）

9月14日初稿

# 6．未明の火柱

開いたドアから飛び出してきた影に、思わず発砲したことだけは自覚出来た。

「ギャン！」

影は、尻もちをついていたガリガリの体をかすめるように、石の廊下に倒れ伏した。

黒い大型犬のような外見。開いたままの赤い瞳。おそらくはヘルハウンドと呼ばれる魔犬だろう。やはり開いたままの口の奥には燻るような炎が見えた。しかし、それもすぐに消えていく。

横倒しになったその眉間には、俺が撃った＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞によって穿たれた穴があった。

「――っ、っぁ……」

声も出ないガリガリは座り込んだまま、動かない。

「……ハッ、ア、ふぅ～」

俺もまた荒い息をつくしかない。今のは完全にたまたまだった。たまたま構えていた所にヘルハウンドが現れ、たまたま驚いた筋肉が勝手に動いただけだ。ついでに、たまたま転んだガリガリが射線上から外れていた、という幸運もあるだろう。

それでも、いつまでも幸運と成果に浸ってはいられない。

乾いた口を無理やり動かし、震える手でガリガリの腕をとる。

「しっかりしてくださいよ、ゴゥラさん」

「……な、名前教えました……っけ」

「今さっき、ここで名乗ったでしょう？」

「そういえばそうですね。ハ、ハハ。腰が抜けてしまいました……」

自嘲的に笑うガリガリを立たせ、ほとんどお互い寄りかかるよう

にして部屋に入る。
部屋には月明かりが少し差し込んでいて、廊下よりも少しだけ明るかった。俺たちに宛がわれた部屋よりもやや広く、しっかりとした机や本棚などが並んでいて、生活感がある。
そしてベッドは上掛けが膨らんだまま。
「すみませ――」
主に声をかけようとして、気付く。
ガリガリが呼びかけても返事がなかったこと、部屋からヘルハウンドが飛び出してきたことからして、主の生存は絶望的だ。
しかし、上掛けが動いた。
「ぐ……むぅ……」
微かな月明かりの中良く目を凝らせば、恰幅のいい中年が猿轡を噛まされた状態で眠っている。
慌ててベッドに駆け寄った俺は、大声を出さないようにしていたのも忘れていた。
「おい！　だいじょ――」
呼びかける言葉を最後まで言う前に、視界の隅に動くモノ、そして銀色の光を見た、気がした。
次の瞬間には金属を打ち合わせるような音と仰け反る様な衝撃。
「フガゥッ！！」
部屋の隅に潜んでいた何者かが、俺の右の首筋に向かってナイフを振り下ろした。だが、その刃を、フードから顔を出したドラゴンが、その小さな口と牙でしっかりと受け止めたのだ。
「――う」
ドラゴンの子がいなければ、その小さな口が届かない場所を狙われていたら、そもそもコイツが俺を守る気がなかったら。ほんの些細な違いで確実に俺は死んでいた。その恐怖と、意外にもまだ萎えない戦う気持ち。異なる感情が荒れ狂っていて、頭の中はもはや真

っ白だ。
「ううぅぅあぁっ！」
暴れ出しそうになる感情を押し殺しながら、襲撃者へ向かってほとんど当てずっぽうに魔銃を撃つ。一発、二発、三発、四発。
「ちぃ！」
襲撃者の舌打ちが聞こえた。転がるような動きで全てあっさり避けられる。この至近距離だと射撃能力ではなく、格闘能力の方がより重要なのだろう。俺は狩りはしたことがあっても本格的な戦闘訓練を受けたことはない。
だが、襲撃者は避ける為にナイフを手放していた。彼の得物はドラゴンがその口にがっちりと咥えたままだ。この状況で諦めるわけにはいかない。
少しでも距離を取ろうと床を蹴る。
その時、完全に忘れていたガリガリの声が響いた。
「――＜拘束鎖錠（バインド・チェーン）＞！！」
俺の後方から、白い鎖が飛び出した。鎖はまるで生きているように襲撃者に巻き付き、その体を引き倒す。
うつ伏せになった男の顔が驚愕と屈辱に歪んでいるのが見えた。彼にとっても、ガリガリからの攻撃は予想外だったのだろう。暗殺者は当たり障りのない服装に平凡な髪型だった。街中で見かけても気にも留めないような普通さだ。しかしその目はあくまでも殺気を持ってこちらを見ていた。
ガリガリは両手に白く輝く鎖を握り締め、座り込みながらも必死に引き寄せている。
白魔法＜拘束鎖錠（バインド・チェーン）＞。大ぶりの鎖を魔力によって編み上げ、対象を縛り上げる。それほど高位の術ではなく、込める魔力によって拘束力が上下する為に、術者の技量が如実に表れる。
「ぬぅぅぅう！」
上半身を魔力の鎖に束縛された暗殺者がもがく。
「ぐぅううう！」

ガリガリも汗だくで唸っていた。抵抗があればそれだけ消費される魔力が大きいのだろう。

敵はまだ諦めていない。味方は焦っている。

それなら、俺に出来ることは――。

ドウン、と。

俺は残っていた最後の一発で、暗殺者の眉間に〈貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）〉を撃ち込んだ。

「――」

ガリガリが呆けた顔でこちらを見る。いまだ〈拘束鎖錠（バインド・チェーン）〉を消していないことからも混乱していることがわかる。こういう時には命令してやった方が精神が立ち直りやすいだろう。俺は、震えだした指で何とか弾倉に魔弾を込め直しつつ、言った。

「まだいるかもしれません。特に廊下側を注意して、見ておいてくれますか」

衝撃と恐怖はまだ口にまで届いていないらしい。

何とか冷静に聞こえる声が出せたことにほっとする。

「――……あ、は、はいっ」

慌てて立ち上がり、ガリガリはドアへ向かう。

俺はベッドへ駆け寄った。

「大丈夫ですか！？」

「……むぅぅ……」

宿の主は目を覚ましていた。体を小刻みに揺らす。良く見れば口の猿轡だけでなく、両腕を後ろ手に、足も揃えてしっかりと縛られている。ほどこうにも固すぎてほどけない。

「グ」

ドラゴンが肩口から顔を乗り出して、咥えたままのナイフを差し出してくる。ついさっき自分を殺しかけた刃物を受け取って、俺は言った。

「ああ、そりゃ刃物が一番だ、頭イイな。さっきのも含めて、ありがとう」
「グァ！」
暗殺者のナイフはやはり切れ味が良かった。猿轡も手足を拘束していた縄もあっさりと切れる。
「……あ、ありがとうございました……」
「事態はある程度理解しているんですね。ただ、お礼を言うのはまだ早いですよ。今日の宿泊客は？」
「サートレイトの憲兵様方だけ……です……。雇い人も、通いの者ばかり……なので……」
何度も頭を振るって、主は必死な様子だった。それでも、どもっている。
「わかりました。急いで隊長のところへ向かいましょう」

ベッドから下りる宿の主人に手を貸し、ガリガリの待つドアへ。ガリガリは真剣な表情に戻っていた。ちらりと主を見ると囁く。
「怪我もないようで何より」
「……あ、はい。憲兵様のおかげです」
憔悴した様子の主人は少し反応が悪い。眠いのを無理して起きている子供のような――。
「何か薬品でも嗅がされましたか？」
「あ、ええと……。そんな気も……」
俺の質問に対しても、あまり明確な答えが返ってこない。自分の判断を口にした。
「これだけ前後不覚だと、我々の間に挟むようにして行かないと……」
「そうですね。先頭は――」
「先頭は私がいいでしょう。この場では私の魔銃が一番有効のようです」
ガリガリが何か言おうとするのを制して、自分の考えを押し通す。

「いや、それは」
ガリガリにはガリガリの憲兵としてのプライドもあるだろうが、はっきり言って、どっちが先でも大した違いはない。それなら、ドラゴンがすぐそばにいる俺の方が死角が少なくなるだろう。さっきのようなラッキーだって期待出来ないわけではない。
「次にご主人。しんがりに、えーと、ゴゥラさん。何かあれば先ほどのように援護お願いしますね」
言うだけ言って、さっさとドアを出る。こういう時には、先に行動することで主導権を取ってしまうのが、一番手っ取り早い。

ヘルハウンドの死体を跨がないように廊下へ。それでも俺のブーツは、ぴちゃりと液体を踏んだ。ざわりと全身に鳥肌が立つ。
「……」
魔銃を構えながら慎重に廊下を進んでいく。ガリガリはなかなか息が整わないし、宿の主人が何度もふらつき大きな音を立てる。怒鳴りつけたくなるのを押し殺して、空中に張られた縄を渡るように、ほとんど摺り足で歩く。
さっきまでも緊張していたが、本当に襲撃されたことで、今の緊張は段違いだった。恐怖と興奮。すぐそこに暗殺者がいてもおかしくないような気がして、何度も確認してしまう。
助かったのは、視界にドラゴンの子供がいたことだ。俺の肩に前足を乗せ、キョロキョロと顔を動かして周りを警戒してくれている。はっきり言ってガリガリよりも頼もしい上に、愛嬌があって千切れそうな緊張感がほんの少し解れる効果もあった。

普段なら数分で済む距離を、どれぐらい時間をかけて移動したのか。隊長の部屋に辿り着いた頃には、俺は汗だくだった。
「ふぅ～～……」
大きく息を吐いたガリガリが小さくノックをする。俺はまだ警戒を解く気にはなれなかった。魔銃を構えたまま中からの返事を待つ。

ドアは普通に開いた。
「うぉっ！　何だ何だ!?」
出てきたムキムキは驚きの声を上げた。
ガリガリは飛び退いて白魔法の印を組もうと必死になっているし、俺は俺で魔銃をムキムキの額に向けて今にも撃ち出す姿勢だったのだ。
「襲撃されてるってのに……。何ですか、そのノンキな反応は」
「いや、それが」
ムキムキは歯切れが悪い。しかし、そんなこと知ったことじゃなかった。
「とにかく、中へ」
俺は全員を促した。どこから何が来るかわからない廊下より部屋の中の方がずっと安心出来る。

薄暗い程度の部屋は俺たちがいた所よりかなり広い。ベッドも大きく、寝椅子や低い机もあって豪華だ。机の上には空になった瓶が何本も――。
酒の臭いが鼻についた。さらに大きな鼾が耳に届く。

「貴方……まだ隊長起こしてなかったんですかっ!?」
「何度も呼びかけたんだが……。御覧の通りだ、すまん」
頭を抱えるガリガリと恐縮するムキムキの隣を過ぎ去り、俺はベッドまで歩み寄った。
大変幸せそうな顔で眠る隊長。縞模様の寝巻きに、ご丁寧に三角のナイトキャップまでつけている。
「……んごぁ、ぷふぅ～……」
俺は強く握ったままだった魔銃をゆっくりと振り上げ――。

グリップの底を隊長の鳩尾に叩き込んだ。
「ぐもっっぱがはッ！」

隊長は跳ね起きた。確かにこの方法は効果的だ。
「おいおい」
「ま、仕方ありませんね」
ムキムキとガリガリがそれぞれ呟く。この反応が隊長の普段の行いを表している気がする。
「なっ、何事だっ！？」
「静かに。現在我々は襲撃を受けています。私の従者が外に出て大半を相手にしていますが、全員を抑える保証はありません。現に、この宿の主人の部屋には、暗殺者が潜んでいました。とにかく一か所に集まった方が危険が少ないという判断で、この部屋に集まったわけです。説明は以上です。よろしいですか？」
「う……うむ……」
俺の静かな怒りに怯んだのか、隊長はあっさり頷いた。もう少し何か言い出すかと思っていたので、普通にありがたい。よく考えると起こさない方が良かった気もしてきたけれど。
ガリガリが隊長とムキムキに先ほどの戦闘を報告している間に、俺は窓にそっと近付いた。

「グゥ……」
ドラゴンもフードから顔を出し、窓を覗き込もうとする。構われると嫌がる割に、ルースを心配する程度には仲間意識を持っていたようだ。
窓はガラスだったが、それほど透明度は高くない。顔をつけるようにして、外を確認しようとしたその時。

にょっこりと、人影が現れた。
「うぉわっ！！？」
「――！？」
俺の大声に、室内が緊張に満たされる。俺はすでに魔銃を抜いていたし、隊長はベッドから転げ落ちた。

「僕だ」
たった一言でもすぐにわかる、高く、良く響く声。人影はルースだった。慌てて魔銃を降ろし、声をかける。
「脅かすなよ……」
「カインドッ！　大丈夫か!?　気配だけじゃ状況が掴めなくなってきた頃に、君の大声が聞こえたものだから――」
「何とか大丈夫だ。そっちの首尾は？」
「外にいた連中は全て片付けた。屋内に入ったのは、おそらく一人と――」
「一人と一匹は倒したぞ」
ルースの台詞から、外からの脅威はないと判断し、俺は窓を開いた。
巨大な剣を肩に担いだままのルースが、顔を突っ込むようにして近付けてくる。真剣な表情で、俺の足元から頭まで、何度も確認された。
「はぁあああ。無傷のようだな。奴らが思ったよりも強くて……、君をチョロチョロさせるんじゃなかったと後悔していたんだ」
「チョロチョロて」
ルースも見る限り無傷のようだ。

続いていた緊張がゆるみかけた瞬間、うつ伏せに倒れていた暗殺者と思しき人間が動いたのが見えた。手にはガラス玉のようなものを持ち、それをこちらに投げつけようと構えている。
「ルース、走れぇえ!」
叫ぶのと魔銃を構えるのを同時に。
俺の視線を読んだのか、まだ生きていた暗殺者にルースが弾かれたように走っていくのと、俺が＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を撃つのも、同時だった。
さすがのルースも＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞より速くは走れないのか、暗殺者にとどめを刺したのは俺が撃った魔弾だ。しかし、それで終わり

にはならない。事切れた男の手から零れ落ちたガラス玉のようなモノは――魔法爆雷だ。例え衝撃がなくとも、封印を解けば、任意の時間後に爆発させることが出来る。封印が解けているか否か確かめている余裕はない。

「そのガラス玉は卵が割れる程度の衝撃でも爆発する！　壊さず、出来るだけ遠くへ！！」

「何て注文だ！」

ルースは大剣の切っ先を地面に突き刺し、魔法爆雷を地面の一部ごと持ち上げ、そのまま器用にそれを投げ飛ばした。

……真上に向かって。

「ここに落ちてくるだろうがボケぇ――――ッ！」

「あ。そうか」

ぼんやりと呟くルースに構っている暇はない。

慌てて窓から飛び出し、魔銃を白み始めた空に向かって構えた。

俺は貴族の割に目がいい方だし、明るくなってきたのが幸いした。朝日の光を反射しながら魔法爆雷が上がっていくのが微かに見える。

一発。外れた。二発。外れ。三発。当たらない。四発。ダメだ。かなり高い位置とはいえ、落ちてくるのを確認。ほとんど祈りながら五発。距離が近くなればそれだけ難易度も下がるだろうが……。

もう一度引き金を引くも弾切れ。残弾数も忘れるほど焦っていては、再装填だってもたつく。

「僕も！」

いつの間にかすぐ隣にいたルースが叫び、一瞬で空中に紋章を描く。＜踊る枝葉（エクナズ・テルーブ）＞だ。＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を五発以上同時に発動させる上位術である。本来なら、タイミングや軌道を少しずつ変えた連続射出で相手を捉える術だが、ルースはそれを一気に上に向かって放った。

それでも魔法爆雷に当たっていない。

「ぬぅぅ、くそうっ！」
珍しくルースが毒づいた。正確に狙いをつけるのが苦手なのだろうか。
俺も装填が終わった魔銃をもう一度空に向かって構える。もう一発撃ってダメなら避難を考えないと危ない。

「グァッ」
引き金を引こうとした時、ドラゴンがフードから俺の頭に移動した。前足が額辺りにかかり、腹の温かさが後頭部に感じられる。
「今忙しいんだ！　遊んでる暇は――」

「グゥゥゥラアアアアアアアアアアッ！！」

ドラゴンが鳴いた。
この小さな体のどこからこんな大きな声が出てくるんだっていうぐらいの大声だ。

その鳴き声に導かれるかのように、俺の頭上に、炎が渦巻く。魔法陣か、と思った瞬間、空気が弾けた。
炎の魔法陣から天に向かって、俺の腕ぐらいの太さがある赤い光が立ち上る。ほんの一瞬でどこまでも伸びていく、まるで水が地面から空に向かって落ちていくかのようだ。

「！！？」
爆発した、と確認した時には視界のほとんどが黒く染まる。次いで、衝撃。世界が揺れた。よろけて倒れ込みそうになる俺をルースが支えてくれた。
「これは――」
「黒魔法の上位防御術＜断ち隔てる皿（エタラペス・ドレイス）＞だ。防御力は高いんだが……」

円盤状の黒い盾のようなものが俺たちの頭上を覆っている。直径は3m以上。普通なら至近距離で魔法爆雷が炸裂してもビクともしないだけの防御力があるのだろう。

しかし、頭上以外からの衝撃が思わずコケそうになるほど凄かったのだ。

「お前のおかげで助かったと言うべきんだろうけど……。いくらなんでも威力強すぎじゃねぇの？」

俺の頭から下り、肩に前足を置いて顔を覗き込んでくるドラゴンに愚痴る。

「グァ～っ」

「いや、この衝撃はあのアイテムのものだ。この子のアレは、おそらく＜烈火の柱＞のような高温射撃魔法に近い。爆発するような特性は一切感じられなかった」

やや畏怖の混じる顔でルースは言った。ある程度以上の魔法使いは、見た目や結果だけでなく、気配だけでその魔術の特性や構成を見抜くことも出来るという。精霊魔法の＜烈火の柱＞に近いということなら、今のはドラゴンが精霊に呼びかけた、ということだろうか？

たっぷり一分ほど待ってルースは＜断ち隔てる皿（エタラペス・ドレイス）＞を解除した。軽くため息をついて呟く。

「しかし……あんな小さなアイテムでこれほどの爆発を起こせるものなのか？」

空にはまだ黒い煙というか粉塵というか、黒雲が大きすぎてまるですぐそこに漂っているかのようだった。

風が強く、木々は振り回されている。慌てて周りを見れば、宿の屋根は一部色が変わっている。瓦が吹き飛ばされたらしい。村の方でも、人々が家から出てくるのが見える。建物が倒れてしまうようなことはなくても、窓が割れたり、屋根が飛ばされたりしたのかもしれない。何より家畜が怯える気配が俺にも感じとれるほどだ。

「全く知らなかったから助かった。ごく至近距離だったらマズかったかもしれない」
「いや、俺の想定していた規模よりはるかに威力が強い……。防御魔法なんて必要ない、せいぜい軽い衝撃を感じる程度の影響で止めようとして、焦ってたんだ」
空を見上げたまま言う俺の肩を、ルースは何度も叩いた。
「それでも、結果的には助けられたさ。意外と度胸があるじゃないかっ」
何が嬉しいのか、声が弾んでいる。どうでもいいけど肩が痛い。
「度胸というより暴走に近いと思うぞ。コイツが助けてくれなかったら一回は確実に死んでただろうからな」
俺は反対側の肩にいるドラゴンを親指で指し示した。
「グァ」
「そうか。君も偉いぞ、ドラゴン君」
あまり俺の言葉を聞いていない様子で、ルースがドラゴンの頭を撫でる。子ドラゴンも今は大人しく身を任せている。

太陽が顔を出し始め、空は赤く染まっている。笑顔の美形と可愛らしい小動物。まさに絵になる光景だった。
後ろには人間とヘルハウンドのゴロゴロ死体が転がっていたのだけれど。
「いやー、参りましたねコレは」
「俺にゃあ状況がさっぱりわからん」
ガリガリとムキムキの声が響く。呆けたような表情で、窓から身を乗り出し、外を見上げていた。
俺たちは慌てて窓に駆け寄り、訪ねた。
「ここのご主人と隊長さんは？」
「主はまた寝入っています。外傷は見受けられないのでやはり薬品の類でしょうね。隊長は……」
「さっきの爆発でひっくり返って気絶しちまったよ」

つ、使えねぇ……。
思わずルースと顔を見合わせる。やっぱり起こす必要なかったな。
「ところで」
呆れ果てる俺たちに、ガリガリが気まずそうに切り出した。
「――その肩の魔物が何なのか、聞いてもいいですか？」

「「あ」」

俺とルースはもう一度お互いの顔を見る破目になってしまった。

# 6．未明の火柱（後書き）

9月16日初稿

# 7．お国柄談話

「――という訳でですね、このドラゴンの子は森で拾ったんですよ」
「ぐあー」

馬車の中、俺はドラゴンを拾った経緯を語り終えた。
卵から孵った場面や、オルトロス諸共盗賊たちをこんがり焼き尽くした熱線のあたりをぼかした為、実際起こった事の半分ほどしか伝えていない。それでも嘘は最小限だ。
襲撃をやり過ごした後、当然のことながら村は大騒ぎになったが、隊長が強引に出発を主張し、結局俺たちは王都への旅を再開していた。

そんなこんなで、昨日よりもやや早く出発した馬車の中、ドラゴンについて説明を求められたわけだ。
「龍種がそんなに人懐っこいなんて話は聞いたことがありませんねぇ……」
ガリガリが呟く。今朝の襲撃以来、何となく気安くなっている。やはり同じ窮地を経験すれば互いに情も沸くというものだ。
そんなガリガリが橋渡しとなり、隊長やムキムキとも会話が成立したこともあって、車内の空気は昨日よりずっと穏やかだった。
「我が国でも、龍に乗れるのは極一部の騎士のみだ。それほど貴重で重要なものなのだ。それをこんな若造が……」
隊長は、今朝の失態以来、不機嫌だった。しかも、部下たちにすら、それを取り合ってもらえていない。
拗ねたおっさんの皮肉を遮って、俺は言った。
「この魔獣騎兵で有名なルークセントでも、龍種は珍しいものなのですか？」
「当たり前だ。虎の子の飛竜部隊で十体、輸送にも使われる陸戦竜

でも十五体ほどと言われている」
「繁殖も難しいらしいんです。主力というほどのものでもありませんし、実際は名誉職に近いものですから、国民の目に触れることも極稀なんですよ。昔は、野生の目撃例――というか被害なんかも多かったんですけどね。今ではさっぱりです」
「そうなんですか……」
ルークセントと言えば、飛竜部隊がすぐに思いつく外国人の俺には、ちょっと衝撃的な事実だ。アレイド・アークの冒険譚――飛竜部隊がアレイドたちに協力し、ヒト数人と飛竜が混成編隊飛行を行う場面――に目を輝かせたものだったのだが。
「私でも数年前の軍事パレードで初めて龍を見たんだぞ。それをその辺で拾ってきただのと……」
また隊長がぶつくさ言い出した。ガリガリが苦笑しつつ口を開く。
「崩御されたウッドウェイン王陛下最後の年の軍事パレードですね。私も見たかったなぁ。あれ以降ないんですよね」

早足で進む馬車の小窓から外を覗けば、広い平野が見渡せる。基本的に起伏の多い土地であるラチハークではあまりお目にかかれない光景だ。
春前で旅をするには適した時期なので、すれ違う馬車も多い。

「ラチハークでは魔物を軍事力とすることを嫌がっていますから。そういった軍事パレードがあっても、大型魔獣なんて見ることもありません」
ちらりと故郷の事を考えた所為か、思わずそんな言葉が出ていた。
「ああ、ラチハークの出身だったか……。あそこはドワーフが多いと聞いたことがあるが」
そう言えば、俺とルースの名前だけしか教えてなかったか。まともな自己紹介をするような雰囲気じゃなかったからなぁ。観察眼がある者なら、俺の鎧についている紋章で、国どころか地域まで一発

でわかるだろうが、隊長にそんな眼はなかったらしい。
「ラチハークの王族にはドワーフの血が流れていますからね。国ではヒト種といえば、人間とドワーフでした。といっても大きな街に下りてくるドワーフはそれほど多くないですよ」
「我がルークセントではドワーフはほとんど見ないな。一部付き合いがあるのがエルフとホビット。獣人は大昔多かったそうだが、今では外見だけでソレとわかる者は少なくなった」
「エルフですか……。見たことないなぁ。綺麗なんでしょうねぇ」
「アレは確かに美しいぞ。ただ全体的に細すぎる。私などはもっとこう凹凸があるほうが――」
隊長が瓢箪の形を両手で描く。はるか昔から、男同士の親睦を深めるのに下世話な話は欠かせないと決まっている。
俺たちが友情を深めようとソッチ系に話題を持っていこうとしたその時、怒号で馬車が震えた。

「――そんな話を、している場合かっ！！」

それまでずっと黙っていたルースだった。和み始めたばかりだった車内の空気が凍りつく。
「暗殺者は確実に我々を狙っていたんだぞ！　相手の分析や対策ぐらいしたらどうだ！！　不安がる村人の訴えを、重要な任務があるからと耳を貸さず出発したのは、猥談をする為かっ！！」
ルースはとても滑舌がいいし、声もよく通る。しかも抑揚まであって、最後の締めに最も声が大きくなるよう計算されているかのようだ。
確かに朝、村を出発する時からルースは不機嫌だった。隊長が愚痴を言うタイプならルースは黙るタイプらしい。ずっと抱えていた怒りが、俺たちの会話で爆発したのだろう。猥談というほどのものではなかったとは思うが、イライラした奴は小さなことでも別の大きな何かのように感じるものだ。

一頻り吠えたルースが息をついたのを逃さず、俺が弁解を試みた。
「確かに下世話な話をしすぎた。でもな、今朝のアレコレを気にしすぎるのもどうかと思うんだ。結果としては無傷で倒せたわけだし……」
「あんなの運が良かっただけだ！　この子がいなかったらあの村は半分吹き飛んでいたし、カインド、君はさらにもう一回死んでいたんだぞ！」
「グアーッ」
フードに納まっていたドラゴンまで攻めるように鳴き声を上げた。
その辺の話題を避けていたのは事実だ。
俺としては助けを求めて、憲兵たちに視線を送るしかない。
「出発までに簡単な見分はしたが、目ぼしい成果はなかった。魔法爆雷は爆発した一つだけだったし、全員しっかり事切れていたのだから、残った所で、別の憲兵隊が到着するまで待っていることしか出来なかっただろう」
隊長が口を開き、ガリガリが続ける。
「それに、貴方たちを王都の本部へ連れて行くのが重要な任務なのは、嘘偽りのない真実ですよ。調査の為に足止めをされるより、早く王都に行って、そこで報告をした方が無駄が省かれます」
実質ルースは俺たち全員にとって命の恩人だ。憲兵たちも自然と態度が改まっている。
理屈の伴ったそこそこ真摯な態度の二人に、ルースの勢いは若干弱まった。
「はぁ～～。なら、出発については仕方なかったとしよう……。しかしだな、襲撃を受けたその日に、相手や状況に関して、話題にもしないのは兵士――いや、戦士としてどうなんだ？」
憲兵たちに対しても当たり前のようにタメ口を使うルース。俺などはハラハラしてしまうのだが、憲兵たちはわりと順応しているのか、その辺りを問題視していないようだった。

「そうは言っても、実際に戦ったのは貴方とカインドさんが主ですし……。接触があった私でも、連中が何者で何が目的だったのか、一切心当たりはありません」

ガリガリの言葉に、ルースは軽く顎に手を添え、思案の表情を浮かべる。そんな何気ない仕草が絵になる奴である。

「ならヘルハウンドだ。ほぼ完全に支配下に置かれていたし、数匹での連携も完璧だった。僕はあのような使役の仕方は聞いたこともない。この国では当たり前のことなのか？」

「一般的にはどうか知りませんが、軍では当たり前ですよ。突撃兵と一緒にヘルハウンドを敵陣に突っ込ませたり、隠れている敵兵をあぶり出したりするわけです」

ルースはガリガリの言った情報を整理しているのか反応しない。俺は自分の考えを言ってみた。

「ということは軍属から外されたはみ出し者が、ああいう仕事をしている可能性もあるわけですね」

ガリガリが渋い顔で答える。

「有り得ないとは言い切れない、ぐらいですかねぇ……。魔獣使いとして必要な技術や魔法を軍で覚えたとしても、ヘルハウンド自体を用意する必要はあるわけですし」

「除隊の際に持ち出すのは重罪だしな」

隊長が相槌を打つ。

少しの沈黙の後、ルースが誰に言うとでもなく呟いた。

「……それでも、奴らの動きは連携が取れていた。一人一人はそれほどの使い手ではなかったが、互いに補い合う形を崩さなかった。こちらとしても、出来るだけ多数を引き止めなければならなかったから、攻め手に欠けたんだ」

「お前も足止めされていたってことか？」

「悔しいが、そうなる。敵と僕とで利害が一致してしまった訳だ。今相手取っている者を逃がさない、という利害だ」

「そうなると……、奴らの目的はルース以外、になるのか？　実際のところ、宿に侵入したのは暗殺者一人とヘルハウンド一匹だったから、そっちの方が片手間なのかと思ってたけど」

憲兵たちは俺たちの会話に聞き入っている。

「奇襲をしようとしていたところを僕が迎え撃ったんだ。向こうにしてみれば一人と一匹を侵入させるのが精一杯だった、と見るのが自然じゃないかな。逆に僕が標的だったとしたら、全員で向かってくればいいわけだし」

「ふぅむ……。そもそも、俺たちの誰が標的だろうと、殺すことが目的なら、あの魔法爆雷で一発吹っ飛ばすのが一番手っ取り早い筈だもんなぁ」

「そういえば、その魔法爆雷？　それは簡単に手に入る物なのか？」

ルースの疑問に答えたのはガリガリだった。

「魔法爆雷自体は街で普通に売られてますよ。と言っても、あんな威力はありませんけど。一般で手に入る物だとCクラスの＜弾ける傘（ベモベッツル）＞ぐらいの威力が限界です。それ以上となるとやはり裏社会か……軍関係になりますね」

黒魔法の＜弾ける傘（ベモベッツル）＞は爆裂系では中位にあたる。至近距離なら体がバラバラになるぐらい、近距離なら手足が飛ばされるぐらい、少し距離があると爆風で転がされるぐらいの威力だ。上手く使えば家一軒ぐらいなら壊せるかもしれないが、村全体を巻き込むような魔法では決してない。

やっぱりルークセントでも、あの威力は異常だったのか。魔道具の加工で言えばラチハークが最も技術が進んでいる。そんなラチハークで育った俺にもあの威力は完全に想定外だったのだ。その辺の暗殺者が持ち歩けるような品ではないと思っていた。

それぞれ考え込んでいるのか車内が静かになる。馬の蹄が立てる音と、軋む車輪の音。

俺は一つため息をついて、口を開いた。
「結局のところ、決め手に欠けるってのがわかっただけですね。現状では相手が誰なのか、まで行きつけません。目的が何なのか、さえはっきりとはわからないんですから」
「我がルークセントでは徒に憲兵に弓引くような輩はいない。となれば、目的はお前たちではないのか？」
他より多く憲兵がいるサートレイトみたいな大きな街でも、襲撃受けてましたけどね。
俺は皮肉を呑み込んで、隊長に言った。
「私はただの兵士見習いで、旅の身の上ですよ。考えられるとすれば、この従者が先日滅ぼした盗賊団あたりですが……」
「恨みか……。しかしあの盗賊団は完膚無きまでに叩き潰されて、その上我が隊で調査にも乗り込んだんだぞ。仮に生き残りがいたとしても、逃げ回るのに必死でお前たちの動向を探るどころでもないだろう」
「それに付け加えると、この従者の強さを目の当たりにしたら、あの程度の戦力でどうこう出来るなんて思いませんよね。残りの我々はともかく」
ルースを見れば得意げに胸を張っていやがる。
ガリガリが片手を上げた。
「あと可能性がありそうなのは……そのドラゴンの子供ですかねぇ」
「グァ？」
俺の肩に前足を乗せたドラゴンが軽く首をかしげた。
龍種が珍しいものだとすれば、それも有り得るか。ほとんどフードの中で動かないとはいえ、食事の時にはテーブルに出ている。たまたまそれを見た者が良からぬことを考えても不思議はない。
或いは、盗賊団に卵があり、それがすでにアジトにないことを知る人物が、繋がりを辿って行って――これはちょっと苦しいか。
それでもルースへの恨みよりはしっくり来るような。
「――何にせよ、暗殺者共は全滅。今日にも王都に着く。もう襲わ

れるような心配はあるまい」
もはや議論に飽きたのか、隊長がまとめらしきものを言い放った。

そう言われると、荒事ばかり続いた所為で気が立っているだけ、とも思えてくる。隊長が言ったように憲兵相手に襲撃をかけるような輩はそうはいないだろう。明確な答えが出ないアレコレを考えて唸っているよりも、まずは――そう、さっさと王都へ向かい、報告を澄ませ、風呂でも浴びる。ルースとはそれでお別れだろう。ドラゴンのことはそれから考えて、ユミル学院への旅を再開しなければならない。

ぼんやりとそんなことを思案していると、フードの中身が突然暴れ出した。
「グアーッ！」
「な、何だっ!?」
思わず身を捩って叫んでしまう俺。
「クッ。どうした、カイ――」
笑いをこらえた様子でこちらを見たルースが、途中で言葉を切った。いつの間にか真剣な表情になって、辺りを見回す。
「――速度を上げろッ！！」
「はい？」
ガリガリは何も飲み込めていないのか、呆けた表情で呟いた。おそらく俺と隊長も同じ顔をしているだろう。
「そうそう有り得ない筈の！　襲撃だッ！！」
ルースが高らかにそう言い放った瞬間、窓の外が赤く染まった。

爆音と衝撃。

俺は堪え切れずにルースに倒れ込んでしまう。華奢な割に柔らかい。アレか、使う為に鍛え上げられた筋肉は乙女の柔肌のように柔

らかい、とかいうアレか。
「――っ！　さ、さっさと、退く！」
一瞬ぼんやりしていると、ルースに押し退けられ、何とか身体を支えるという情けない格好になった。
「な、ななな！」
「何事ですかっ！」
憲兵たちも必死に自分の体を支えながら叫んでいた。
御者台と車内に挟まれた窓からムキムキが顔を出す。
「無事か！？　何かの魔法による爆発らしい！」
「爆発ぐらいは予想がつきます！　攻撃ですかっ！？」
「はっきり言ってわからん！」
憲兵たちも混乱しているのか要領を得ない。
「とにかく速度を上げろ！　隊長っ、悪いがこの馬車、穴を開けるぞ！」
脇の下から赤い短刀を抜き放ったルースは、それを天井に向かって振るった。一瞬のうちに、人が一人、楽に通り抜けられる綺麗な円形の穴が出来上がる。
「隊の備品がぁ！」
「それどころじゃないっ！」
隊長の嘆きを一蹴し、ルースは自分で開けた穴から屋根へ飛び出した。

「――二発目、来るぞっ！！」
さっきよりもでかい――いや、近い衝撃。扉の窓に使われていたガラスが砕け散る。
「いやぁぁぁあああああああ！！」
隊長の甲高い悲鳴がウザくて、自分で悲鳴を上げる暇がなかった。
割れたガラスの破片が車内に飛び散った。怖い。心の底から怖い。
それでも状況を知りたくて、ルースが開けた穴から顔だけを出した。

馬車の後方に立ち上る砂塵がまず見えた。そして、何頭もの馬とそれに乗る武装した男たちが小さく確認出来る。距離はまだ１ｋｍぐらいあるだろうか。

「頭を引っ込めろっ、カインド！！」

屋根にしゃがみ込んでいたルースが強引に俺の頭を押し込む。すぐに爆音が響いた。しかし音は大きかったが衝撃はそれほどでもない。

車内で首を竦めている俺に、ガリガリが詰め寄ってくる。

「何なんですか、これはっ？」

「ルースの言う通り、賊の襲撃に間違いありません」

「何故だっ！？　おかしいぞこんなことは！！」

隊長の嘆きを無視し、もう一度穴から顔を出す。

「この爆発はアイツらの魔法攻撃なのか？」

「いや、どうやら上空にもいるようだな。あのアイテム――魔法爆雷と言ったか、あれらしい。小さい上に透明だからかなり近くまで落ちてこないと確認出来ないんだ」

空を見上げると、影が二つ見える。距離がありそうなのに小さいということは、巨大な何かが上空にいるということだろう。

「……魔法で防ぐことは？」

「僕が防御に専念しているうちに、アレが追い付くぞ」

後方から迫ってくる集団のことか。確かに先ほどより距離が縮まっていた。俺たちの乗る馬車も相当な速度になっているが、向こうはおそらく馬一頭に一人、こちらは馬二頭で五人プラス馬車そのものの重さまである。そのうち追い付かれるのは火を見るより明らかだ。

「それなら……、お前は先に空の方を排除した方がいいな。出来るか？」

「楽勝だ、僕一人なら。でも、君たちを守るのは難し――また来たっ！　今度は後ろからだ！」

ルースの腕が霞み、一瞬にして空中に紋章が描かれる。＜立ち隔（エタラペス）・ドレイス

てる皿＞だった。後ろから馬車を隠すように、黒い円盤状の魔力障壁が現れる。今度は音も衝撃もなかった。矢や魔弾での攻撃だったらしいが、全て＜立ち隔てる皿（エタラベス・ドレイス）＞が防いだのだろう。

「……っ！」

しかし、一本の矢が障壁の上を超えて、俺の顔のすぐ横に突き立った。全身に鳥肌。うん、これは、最低一人は腕のいい射手がいるってことだな。

内心の動揺を表に出さないよう、俺は口を開いた。

「や、やっぱり空の方を早く何とかするべきだ。馬か馬車にイイのをもらったら逃げることも出来なくなるだろうし。後ろから来るってことは爆発系の攻撃はしづらいだろ」

何とか普段通りの口調で言った提案に、ルースは不安そうな顔を見せた。

「……本当に大丈夫か？」

「魔銃で牽制すれば何とかなる、かもな。心配なら、焦らない程度に急いで、空のをやっつけてくれ」

無理やり口の端を持ち上げて笑う。ルースは一瞬顔をしかめたが、馬車の上で大剣を抜き放った。空いた左手ではすでに複雑な紋章を描いていた。

「一発＜舞い散る毬栗（バモベクナッド）＞を放ったら、空の敵に向かう。上空からの攻撃は完璧に阻止してみせるけど、あまり無茶はするなよ、カインド！」

「了解、頼んだ！」

「ぐあー！」

俺とドラゴンの激励に、ルースはにっこりと輝くような笑みを返した。

こんな状況でなければ絵師に頼んで絵画にしてもらいたいほどの笑顔だった。

「行くぞ！！」

ルースが〈舞い散る毬栗（バモベクナッド）〉を後ろの集団へ投げつけ、馬車の屋根を蹴る。

それと同時に、俺は頭を引っ込めた。

# 7．お国柄談話（後書き）

9月19日初稿

## 8．逃げ戦、空戦

青ざめた顔をしている隊長とガリガリ、そして御者台にいるムキムキへ伝える為に、俺は大声で言った。

「敵は上空と後方にいます！　爆発は空からの物でしたが、こっちはルースが抑えるので、これ以上はないと思っていいでしょう。ウェイバーさんはなるべく速く馬車を走らせることに集中して下さい！」

「言われなくてもそれぐらいしか出来ねェよッ！！」

ムキムキが言い終わるか終わらないかで爆音が響いた。

衝撃はほとんどないのでルースの置き土産だろう。気にはしていられない。

ガリガリの肩に両手を置いて、力を込めた。

「問題は後ろから迫ってくる集団です。弓矢はもちろん、魔法だか魔弾だかまで撃って来る。我々に倒せるとは思えませんから、ルースが空の敵を倒して戻ってくるまで時間を稼ぎましょう！　白魔法使いなら、防御魔法は得意ですよね？」

「あ……は、はい……」

ほとんど放心状態のガリガリは生返事が精一杯のようだ。

震える手で、縋り付く様に剣を握り締めている隊長が口から泡を飛ばした。

「ど……どどど、どこかに逃げ込めんのかっ！？」

「外見て言って下さいよ！　どこに馬車隠すようなところがあるんですかッ」

馬車が走っているのは草原で、木立があっても道から外れ過ぎている。

「な、なら戦うべきだ！　馬車を止め、剣を抜き、我らが武勇を世に問うのだ！！」
「俺らじゃ秒殺だ、ボケェッ！！」
「グガー！」
的外れな隊長の提案に思わず俺とドラゴンの口調は荒くなった。
諦めに基づく玉砕など冗談ではない。驚いて黙った隊長に畳み掛けてしまう。
「それとも何か、隊長サン一人でアイツら全員と戦ってくれるのか？　倒してくれるのか？　勝てないまでも足止め出来んのかッ！？」
隊長が目をまん丸にしたまま首を横に振り続ける。
さらに追い討ちをかけるべく顔を近付けようとした俺を、ガリガリが止めた。
「落ち着いてくださいカインドさん。防御魔法で馬車を守りながら逃げる訳ですね？」
俺と隊長のダメっぷりを見て、自分がしっかりしないといけないとでも思ったのか、ガリガリの目には知性の光が戻っていた。こういう戦意の上げ方もあるのかもしれない。
俺はガリガリに向き直り、その細い目を真っ直ぐに見据えて言った。
「……失礼しました……。――そう、逃げ切るのが目的ではなく、時間を稼ぐわけです。ルースが戻ってくるまでなら何とか出来ませんか？」
「……ルースさん次第ですか……。でも、これ以上の案はないでしょうね。やるだけやってみましょう」
ガリガリが緊張した表情ながら、しっかりと頷いた。
言われるまでもなく、俺の案はルース次第、いや、ルース頼りだ。自分も含めた上で、アイツ以外に敵を倒せるだけの戦士がいないのだから、当然ではある。

だが、そんな戦力や駒として以上に、俺はいつの間にか、ルースを絶対的に信用し始めていた。

＊＊＊＊＊

ルースは視界の端で、＜舞い散る毬栗（バモベクナッド）＞の爆発と、その為に急停止せざるを得なかった盗賊たちを確認した。

馬車を蹴って飛び出した勢いがあるうちに左手で＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞を描き、上空１００ｍほどで羽ばたいている鳥に向かって行く。

鳥はおそらく、サンダーバード。雷色の羽を持つ巨大な鷲だ。体長は３ｍほど、翼を広げると１５ｍを超えることもある。

そして、その背にはヒトが乗っていた。鞍らしき物まで備え付けていることから、先日のオルトロス同様、魔獣使いによる襲撃なのだろう。

――ヒトが一人乗っていたところで大した違いはない。一交錯で一体ずつ、出来るだけ早く、殺す。

手前に位置するサンダーバードの首に狙いを絞り、最大限魔力を込めた＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞の勢いをそのままぶつけるつもりで大剣を引き絞る。

「ハァッ！」

気合声と共に振るわれた黒い大剣は、敵に届く前に弾かれた。鉄と鉄をぶつけたような音が響く。

「――ッ！？」

「ただの魔物と一緒にされるたぁ、舐められたもんだぜ！」

サンダーバードの背に乗った男が笑いながら叫んだ。右手を前に突き出している。その掌から５０ｃｍほどのところに、半透明の塊が淡く光っていた。一辺１ｍほどでダイヤ状の板のような形をしている。

白魔法＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞だ。使用魔力の割りに堅く、扱いやすい防御魔術。その魔力の盾は、一度発動させれば、掌の向きや腕の動きで好きなように移動させることが出来る。

突撃の勢いを完全に殺されたルースは、一瞬身動きが取れなくなった。黒魔法の飛行術は馬力が少ない。

サンダーバードが羽ばたいた。距離を取るように、後方へ移動する。

「！！」

考えるより先にルースの体が動いた。大剣を弾かれて流れた体勢を利用して、そこから体を捻る。上下反転しつつ、目線は上空へ。

すぐそこに、もう一匹のサンダーバードが飛び込んでくるのが見える。こちらの乗り手は滑稽なほど長い槍を持っていた。

「くっ！」

ルースはさらに体を捻り、手足を畳んだ。

ブーツの端を穂先がかする。風切り音と共にサンダーバードがすぐそこを通り過ぎていく。

今ならやれるか。

ルースは呪紋を描き、槍を持った敵の背中に狙いを絞る。精神集中の為、術名を叫んだ。

「＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞ッ！」

黒い雷が轟音と共に奔った。

ルースの声で気付いたらしく、こちらを見て驚愕の表情を浮かべるサンダーバードの乗り手。この距離とタイミングで避けることは出来ない――筈だった。

魔力弾の射線上に飛び込んでくる影。そしてガラスが割れるような破砕音。

「――ッ！？」

ルースの＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞は再度、＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞に防がれていた。

『槍持ち』を『盾』が守った形だ。
しかし、向こうも損失がなかった訳ではない。
「一撃で砕けるとかありえねーよッ！？　何だコイツ！」
二十代前半と思しき乗り手が大声で嘆く。
例え＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞が優秀な防御魔術で、使い手が常に魔力を補充できる状況であろうとも、防ぎきれる限界は存在する。ルースの＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞とそこに込められた魔力量が、敵の＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞を砕いたのだ。
ルースは端正な顔を顰めた。

――やりづらい。

敵は得意分野を活かし互いを助け合うことで、攻め込まれる隙を減らす戦法だ。元々多対一に慣れていないルースにはどこから崩していいものかわからない。しかも、観察や対策に時間をかけられない状況である。

脅威だとは思わないが、やりづらい。未明の襲撃でも痛感したことだった。
＊＊＊＊＊

馬車の速度は相当なものになっている。普段の俺なら、頼むからもっとゆっくり、と泣いて頼むような速さだ。しかし、明らかな敵意害意を持って集団が追いかけてくる状況では、そうもいかない。

「もっとスピード出ないんですかっ！」
御者台に向かって叫ぶと、ムキムキがより大きな声で怒鳴り返してきた。
「ムチャ言うなッ！！　これまで事故ってねぇのが奇跡なんだよッ

！！」

ルークセントの道がいくら整備されていると言っても、延々と平らな道が続いている訳ではない。その上、馬で走り抜けるには何の問題もないような段差や、避ければ済む小石が、二頭立ての馬車には致命的になり得るのだ。

ムキムキの言ったことの方が正論である。

「グァッ」

突然、ドラゴンの子供が鳴いた。

そして、ダン、と叩きつけるような音が響く。

「！」

車中に嫌な沈黙が下りる。

天井に空いた穴から、俺は恐る恐る頭を出した。

馬車後部の板に、矢が突き刺さり、びぃんと震えているのが見えた。

さらに視線を後ろに移動させると、小さく見える十五人ほどの騎馬集団。ルースの＜舞い散る毬栗（バモベクナッド）＞で一旦離れた襲撃者との距離は、もうほぼ取り返されていた。

攻撃が再開される。

「ガリガ――……ゴゥラさん、お願いします！」

「今変なコト言いかけませんでした？　まぁ、いいですけど」

馬車内で座ったままのガリガリが、両手を様々な形に組み替える。

後方に向かって両腕を伸ばし、術名を口にした。

「行きます、＜大円硝子（サークル・グラス）＞ッ！」

馬車の後ろギリギリに円形の防御結界が形成された。直径は３ｍ弱といったところか。ルースが使った＜断ち隔てる皿（エタラベス・ドレイス）＞とは違い、ほぼ透明で、こちらからも向こうからも相手が見える。

「この術はそれほど防御力は高くありません！　ただの矢なら十数本同時に当たっても大丈夫ですが、魔法だとヘタをすれば一発で砕

けます！　マズそうな時の警告や、砕けた時のフォローをお願いしますよ！」

話を聞いているだけで不安が増してくるが、魔法を使うのはガリガリだ。彼の判断を信じるしかない。

白魔法は、衝撃を受けると劣化していき、限界を超えると砕ける。劣化は魔力を補充することで完全な状態に戻るのだが、強力な術ほど当然補充にも魔力をたくさん必要とするらしい。数発防いでガリガリの魔力が尽きました、では笑い話にもならない。

防げる範囲と盾としての堅さ、術のランクと使用魔力量のバランス、いつまでどれぐらい続くかわからない戦闘、そして後方の確認のしやすさ等を踏まえた上で、＜大円硝子（サークル・グラス）＞を選んだのだ。

「グアー！」

もはや攻撃警報装置となっているドラゴンの子供が鳴き声を上げ、＜大円硝子（サークル・グラス）＞に三本の矢が突き刺さった。

「来ました！　これぐらいなら大丈夫ですよね！？」

「ええ、魔法に注意して下さい！」

車内のガリガリが緊張した表情で答えた。ちなみに隊長は頭を抱えて座り込んでいる。

敵との距離は３００ｍ程度だろうか。

土煙を上げて追いかけて来る集団から一頭の馬が飛び出した。見るからに魔法使い然としたローブ姿の男が乗っている。突き出した片手のすぐ前に、大人の頭ほどの炎の塊が見える。

「魔法です！　多分、＜火炎の球＞！」

数条の矢と共に発射された＜火炎の球＞は、矢よりは数秒遅れて＜大円硝子（サークル・グラス）＞にぶつかった。

透明な防御魔法が一面炎で塗り上げられる。＜大円硝子（サークル・グラス）＞に突き刺さったままだった矢が一気に燃えた。遠くから見ているヒトがいれば、馬車の後ろに円形の炎を背負っているように見えただろう。

「ヒィィ～！」

「余裕はありませんが、これぐらいなら耐えられます！」
隊長の悲鳴を無視して、それ以上の声量でガリガリが叫んだ。

精霊魔法としては一般的なランクである＜火炎の球＞は、見た目に派手でも、攻撃力はそれほどでもない筈だ。それが一発でもう余裕がない、となると。
「……っ」
俺は生唾を飲み込んだ。これは厳しいかもしれない。

勢いが激しい分、炎が消えるのも早かった。
今度は魔銃を構えた男たちも前に出て来るのを確認。
「魔銃！　＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞三発！」
降り注ぐ矢と共に、黒い光が三本＜大円硝子（サークル・グラス）＞に当たる。
「ぐぅぅ！」
ガリガリの呻り声。声の感じからするとこの辺りがギリギリ限界か。
「グァッ！」
俺の肩に乗ったドラゴンの子供が尻尾で俺を叩いた。これまでにはない行動に、俺は慌てて集団に意識を集中する。
一瞬、先頭を走る魔法使いが光ったのかと思った。
まるで炎が集まるように、空に伸ばした両手の先へ集まっていく。
やがて馬の全長よりも長い炎の槍が出来上がった。
ゾクっと全身に鳥肌が立つ。
「で、デカイの来ます！　＜紅蓮の炎槍＞ッ！！」
魔法使いが投げつけた炎の槍は、いきなりスピードを上げ、一直線に＜大円硝子（サークル・グラス）＞に飛び込んで来た。＜火炎の球＞の倍以上の炎が吹き上がる。
俺はあまりの眩しさに一瞬目をつぶってしまった。
パキィィィン、と皿を落としたような音がして、慌てて目を開く。
透明な防御魔法は粉々に砕け、炎と共に消えていく。

「ヒィィヤアアアァァァ～！！」
隊長の曰く言いがたい悲鳴。気持ちは良くわかるが凄くウザい。
矢が馬車の後部や当たり始める。まだ数は多くないものの、やがて馬や御者台まで届くことになるだろう。
「牽制お願いします！！」
「はい！」
ガリガリの怒号に答え、魔銃を構える。狙いは正面の魔法使い。出鱈目に連射する。元々このサイズの魔銃では遠距離射撃には向かないので牽制目的だ。
だが、俺には珍しい幸運が訪れ、六発の＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞のうち一発が、一頭の馬に当たった。かなりの速度で走っている集団では良くあることで、倒れた馬がもう一頭を巻き込み、転げ回る。欲を言えば魔法使いか、それでなくても魔銃を持った奴だと良かったが……どうも違うらしい。
ルースが空で戦っている今、反撃されるとは思っていなかったのか、脱落者が出たことで慎重になったのか、敵集団は少しスピードを落とした。
「お待たせしました！　行けます、＜大円硝子（サークル・グラス）＞！」
やけに頼もしく聞こえるガリガリの声と同時に、透明な円盤が復活する。
「はぁ～――」
俺は穴から出した胸から上を、馬車の屋根に投げ出した。安堵のため息が出てくる。
「――あ」
ため息を終える前に、気付いてしまった。
魔法使いを倒さない限り、＜大円硝子（サークル・グラス）＞は一撃で破壊されてしま

う、という事実に。

＊＊＊＊＊

ルースは＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞を描き、落下の勢いと併せて速度を上げる。

敵もこちらを伺いながら、孤を描くように一定の距離を保つ。『盾』は手印を忙しく組み砕けた＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞をもう一度発動、『槍持ち』は鞍の上で体勢を整え、再度の攻防に備えていた。

時間が惜しい。ルースは敵の上空を取ろうと体を上に向けた。

二匹のサンダーバードも高度を稼ごうとするが、加速した＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞には敵わない。

魔力を限界まで込めて、今度は『槍持ち』に向かう。

しかし、あと一瞬というところで＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞に阻まれた。

「……っ！」

攻撃は失敗に終わったが位置的に『槍持ち』が来ることはない。

どう攻めたものかと、ルースはすでに次の攻撃に気持ちが移っていた。至近距離で敵と鍔迫り合いをしている時には致命的な油断である。

『盾持ち』は不敵に笑うと、右手をこちらに向けたまま、左手で曲がった筒状のモノを抜いた。

カインドが持っているモノより一回り大きな――魔銃だった。

「なッ！？」

「驚くようなことか！？　基本だろうがよ！」

驚愕で一瞬動きが止まったルースに向かって、敵は突き放すように笑い、引き金を引いた。

奇しくも、撃ち出されたのは＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞だった。ルースの

放ったものより魔力は弱いのか、黒い雷の幅は短いが、この状況では避けられない。
「くぅっ！」
ルースは呻り、弾かれた大剣を強引に体の前に引き寄せた。流れに逆らった力任せの動作に筋肉が悲鳴を上げた。それでも何とか、射線上に構えることに成功する。
直後に着弾。
板に水をぶちまけたような音がして、＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞は起動を変えた。体を掠るようにして明後日の方向へ飛んで行く。
「ぉお……っ！」
しかし、衝撃を殺すまでは出来ず、ルースは吹き飛ばされた。
「何ィいっ!?」
会心の射撃を無効化された『盾』が叫んだ。
「魔剣か？　聖剣か!?　冗談じゃッねぇぞ！」
驚愕と怒りを混ぜたような表情で＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞を連射してくる。
五発撃たれた魔弾を、ルースは弾き、流し、全て捌ききった。先ほどより距離があるのだ、不意を突かれることがなければこのぐらいは対処出来る。
ということは。
迅速に倒す為には――こちらが向こうの不意を突かなければならないのか。
ルースは覚悟を決めた。
＊＊＊＊＊
「――サ、＜大円硝子（サークル・グラス）＞……ッ！！」
ガリガリの悲鳴じみた叫びが響いた。

これで彼が発動させた＜大円硝子（サークル・グラス）＞は四回目になる。
敵はこちらの狙いと対策に気付いた様で、馬車への攻撃というよりは＜大円硝子（サークル・グラス）＞を砕くことに専念している。敵魔法使いは、嫌になるほどの勤勉さで、休むことなく＜紅蓮の炎槍＞を放って来るのだ。
こうなるとガリガリと敵魔法使いとの総魔力量（スタミナ）勝負という形になる。
そして、ガリガリはあまり総魔力量（スタミナ）は多くないらしい。
当然弓矢や魔銃での攻撃も続いているので、こちらの分はさらに悪い。大部分が＜大円硝子（サークル・グラス）＞で防がれているというのに、馬車の後部にはすでに数十本の矢が突き刺さっている。それほどの射撃から馬車を守っているのだ、使われる魔力も相当なものだろう。
俺は、魔銃を持った右腕で馬車の屋根に寄り掛かり、震える左手で剣帯に下げられたポーチから魔弾を取り出した。そろそろ魔弾も尽きそうだ。
防御魔法がない間の牽制もこれで三回。こちらからの射撃で倒せたのは初回の幸運による二人だけで、未だ集団の人数は十人以上いる。

絶望の嗚咽を漏らしそうになるのを堪えて後ろを見ると、敵との距離は１００m近くにまで迫っていた。もう十分顔の判別が出来る距離だ。
俺は枯れ始めた喉に鞭打って叫んだ。
「――＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞三発！」
ここまで近付いてわかったのだが、向こうの魔銃は長距離用の大きなもので、タイミングを合わせかなり正確に撃ってくる。救いがあるとすれば、どうも連射は出来ないらしい、ということぐらいだ。
＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞が＜大円硝子（サークル・グラス）＞に当たり、弾けた。
「そろそろ魔力が尽きます……！　ルースさんはまだですか……っ

！」

ガリガリの悲痛な叫びに、こちらもあまり変わらない声色で怒鳴り返す。

「まだです！　あと何回＜大円硝子（サークル・グラス）＞使えますッ！？」

「一回と半分！！」

そんなことを確認している間にも、魔法使いが次の＜紅蓮の炎槍＞を用意している。

「来ました、＜紅蓮の炎槍＞です！」

「コレ砕かれたら、次ので最後ですよォォ！？」

一度立て直したと思われたガリガリの精神が、また恐慌の色を帯び始めた。

それでも敵は待ってくれない。

炎が空気を切り裂く不思議な音を伴って、＜紅蓮の炎槍＞が＜大円硝子（サークル・グラス）＞を完膚なきまでに砕く。

ガリガリが次の＜大円硝子（サークル・グラス）＞を用意するまで、牽制しなければ。

これまでと同じように魔銃を構えた俺は、敵の動きが変わったことに気が付いた。

「二手に分かれる……！？」

敵は五、六頭ずつの集団に分かれ、それぞれ道の端の方へ移動し始めた。

かなり距離が迫ったことで何かしようというのか、業を煮やして強硬手段に出る為か、こちらの魔力が尽きかけているのを察したか。

何にせよ、どちらも近付けるわけにはいかない。

今日何発目になるか分からない＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を、今度は当てずっぽうではなく、狙って撃った。標的は向かって右側を走る集団の先頭。

一発、二発は外れ。

しかし、距離が縮まったからか、三発目が馬に当たった。またしても倒れた馬が他の馬を巻き込み、三匹が転げ回って道に取り残される。

「――っしゃ！」

俺は思わず拳を握り締めて喜んでしまった。

次の瞬間――。

「グァーッ！！」

どこか焦ったようなドラゴンの鳴き声が聞こえたと思ったら、左肩に衝撃。矢ではない。敵の魔銃による＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞だ。撃ったのはどっち側の誰だ。貫通したというよりは抉られたと言った方が近く、その分出血が多い。そこまで確認したところで痛みを感じた。

屋根に顔を押し付けるようにして呻いてしまう。

「――ッ！！　ぐうううう……！」

「グァ！　グアー！」

何とか悲鳴を上げるのを我慢するが、ドラゴンの子供が騒いだ。

憲兵達がまたパニックになるかもしれない。静かにしてくれ。

「サ……ッ、＜大円硝子（サークル・グラス）＞ッ……！」

息も絶え絶えの声でガリガリが言った。これが最後というのは、大げさではないのだろう。

痛みに耐えながら、視線を上げ、敵を確認すると、左側の集団が強く光っていた。

……何で後がない今になって間隔が短いんだよっ！？

炎の槍を掲げた魔法使いが他の者を追い抜き、先頭になる。

＜紅蓮の炎槍＞が発射された。

「……っ」

俺は、ただただ息を呑み、迫ってくる炎を眺める。

ガリガリに警告することも忘れてしまっていた。

絶望で痛みすら忘れてるんだ、しょうがないじゃないか。

## 8．逃げ戦、空戦（後書き）

9月22日初稿

書き溜め完全に尽きました。頑張ります。

## 9．グリフォンライダー

＊＊＊＊＊

ルースはもう一度＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞を発動させ、標的を馬車に移されない範囲内で、出来るだけ距離を取る。

向こうは羽ばたきの邪魔にならない程度に近付き、どちらも待ちの構えだった。

「すー……、はっ」

呼吸を一つしてから、ルースは敵よりやや上空へ向けて、突撃を開始した。

――速度とタイミングが重要だ。

敵と接触するまでは5秒ほど。黒い大剣を刺突剣のように体の正面に構え、空いた左手は体の後ろに。速度が限界に達したところで＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞を解呪。左手は体で隠したまま呪紋を描き、発動の瞬間、体を捻って左手を敵に向けた。

すでに『盾』は真正面にいる。

敵が掲げる＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞に掌底を喰らわせるつもりで左手を叩き込み、ルースは叫んだ。

「＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞ウッ！！」

「ぐぬぅッ！」

零距離で放たれた＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞は＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞をあっさりと砕いた。

次いで、魔法を撃ち出した勢いを利用して体を逆に捻り、大剣を真横に薙ぐ。

「――悪いが、想定内だぜ！」

『盾』が笑いを含んだ声色で叫んだ。

ルースの斬撃はサンダーバードの嘴にしっかりと受け止められていた。

「やっちまえええ！！」

『盾持ち』の合図に答えるように、いつの間にか移動したもう一匹のサンダーバードが、ほぼ真下から飛び出して来る。鞍から腰を上げた『槍持ち』がその長い槍をルースに突き込んだ。

穂先がふくらはぎを貫通する。

「くぅぅぅっ！」

ルースの口から押さえ切れない呻き声が漏れた。

真下から左足を突かれたことで、左半身を上に向けて地面と平行の姿勢だ。

――これなら……使える！

「死ねぇえええええ！」

動きが止まったルースに向けて魔銃を構える『盾』が叫ぶ。

――撃たれる、前に！！

ルースは嘴に咥えられたままの大剣を握り直した。さらにこれまで右手だけで握っていた柄へ、左手を添えた。貫かれたふくらはぎの筋肉を締め、右足を槍の柄に乗せる。

例え不安定の極みである槍の柄だろうと、例え片足を貫かれていようと、一瞬の足場にはなる。

ルースの覚悟とは、防御や回避を捨ててでも、攻撃の糸口を――迅速な勝利を掴むことだった。

呼吸を整え、姿勢を調節した。

「――無極流大剣術――」

足の指先から力が増幅され、腕の先で弾けるイメージと共に、ルースは叫んだ。

「羅振断ッ！！」

傍目には静止しているようにしか見えなかったルースの大剣は、その剣を咥えたままの嘴の付け根から頚部までを真っ二つに切り裂いた。下顎以外の頭部を失ったサンダーバードから血が噴き出し、その巨体がぐらりと傾く。

「……ッ！！」

「む、無極流だぁあ……？」

有り得ないと表情で語る『槍持ち』と、鸚鵡返しで声を上げる『盾』。二人の乗り手は呆けた様に動きを止めた。

しかし、ルースにここで終わらせるつもりはない。

「ハァッ！」

貫かれたままの左足を固定し、右足で、槍を踏み折る。激痛に顔を歪めるが、その時には紋章を描き終わっていた。距離は近く『盾』はもう動けない。

ルースはこれが最後だと思いながら、術名を口にした。

「＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞……！」

槍を捨てることが出来なかった『槍持ち』は、踏み折られた槍に引っ張られた形になり、次の動作に移るのに一瞬まごついた。何が起きたのか理解出来ていないような真っ白な表情で、ルースをぼんやりと眺めたまま、額を＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞に貫かれた。

黒い雷はそのままサンダーバードも貫通し、地面に向かって走っていく。

「笑えねぇってんだよ！　無極流とか阿呆か！」

ゆっくりと落ちていくサンダーバードに跨ったまま、『盾』が大声で言った。驚愕を通り越して、前後不覚の表情になっている。

ルースは＜空駆ける矢（トギルフ・タサフ）＞を描き、やや下方の敵へ向かって行った。

「そんな骨董剣法、もう存在してるハズがねぇ！」

連発される＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞を最小限の動きで避け、弾き、『盾』

に迫る。
「こんなに強いなんて！　聞いて――」
黒い大剣が、まだ喚いている『盾』の首筋を切り裂いた。
乗り手を乗せたまま、二匹のサンダーバードは傍目にはゆっくりと落ちていく。
「最期まで逃げることを考えなかった、その姿勢は……敵ながら天晴れだ」
黒魔法の飛行術では難しい空中停止をしたルースは、敵の行く末を見守り、呟いた。
折れた槍に貫かれたままの左足を一瞥する。無理をさせた為出血は酷かったが、今は気にしていられない。
――カインド達の元へ行かなければ。
ルースは馬車を探して、周辺を見回し、息を呑んだ。
「――！」
馬車を見つけたからではない。
こちらに向かってくる魔獣を、見つけたからだった。
＊＊＊＊＊
迫り来る＜紅蓮の炎槍＞はやけにゆっくり見えた。
燃え盛る炎が先端の一点から渦を巻いていることや、＜大円硝子（サークル・グラス）＞をわずかに貫通してから砕くことに初めて気付いたぐらいだ。
最後の＜大円硝子（サークル・グラス）＞はきっちり砕かれてしまった。
敵――というより先頭で走る魔法使いは、どうやらこちらの状況を推測していたらしい。今は表情すら読み取れるほど近付いている

彼の表情は、勝ち誇った笑顔のお手本みたいだ。
「グアーッ！　グアッグアア！」
「――っ！？　もう魔力切れです！！　カインドさん、状況は！？」
「どうなったのだ？　どうなったのだぁあっ！？」
背中のフードで騒ぐドラゴンの子供にも、ガリガリと隊長の声にも答えることが出来ない。残酷な現実を伝えたら憲兵たちがどんな行動に出るか分からないし、何より、痛みに耐えるので精一杯だった。

せめて――、せめてあの魔法使いだけでも抑えないと。

左肩をやられて左腕は動かない。相当な速度で走っている馬車の屋根に胸から上を預けているので、右腕は体を支えている。
ほとんど手首の角度だけで＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を撃った。狙いは二つに分かれた集団のうち、向かって左側の先頭、獰猛に笑った魔法使い。
基本的に黒魔法に反動はない筈なのに、狙いをつけて引き金を引く、その動作が肩に響く。
おそらくこれまでの人生で最も魂を込めた射撃は、あっさり防がれた。どこからか現れた半透明の盾。白魔法の＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞だ。先頭の魔法使いは両手で手綱を握ったままで、手印を組んでいない。魔法使いはもう一人いたのか。
無駄だと思いつつ引き金を引くも、もう二発撃ったところで弾切れ。痛みに耐えて引き金を引いたのに弾が出ない、そのガッカリ感といったら……。
気合で結果が変わるなんて信じちゃいないけど、あんまりにも自分の行動が悪あがきで、むしろ笑えてくる。

「グァアアッ！！」
いつの間にかドラゴンの子供がフードから出ていた。屋根の上で

前足後足を踏ん張り、呻り声を上げる。赤い鬣はもちろん、長い尻尾も逆立て、まるで俺を傷付けられて怒っているかのようだ。

「危ないぞ！　下がってろッ！！」

「グァ！」

本気で叱り付けても、動こうとしない。子供の頃、家で飼っていた犬はちゃんと怒れば、大体言うことを聞いたんだが……。

敵はさらに距離を詰めて来た。＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞は発動させたまま、集団の頭上に掲げるように、斜めに被さっている。維持にはあまり魔力を使わない白魔法は、必要のない状況になったら、こういった形で、視界の邪魔にならないようにどかしておくのが常識だ。

先ほどまで笑っていた魔法使いの顔が、驚きを浮かべた。

「いたぞ！　コレだぁ！」

叫んだ時には、喜びの表情に変わっている。その視線は、完全にドラゴンの子供に向いていた。

やっぱり狙いは、ドラゴンの子供なのか。

「狙いはお前だ！　逃げろッ！！　逃げろって！！」

ほとんど泣き叫ぶように言った。

敵が目的の物を手に入れたところで――あるいは俺がこの子を敵に差し出したところで――助かる見込みはほとんどない。憲兵をここまで追い詰めたら、憲兵共々目撃者は消しておかないと危険だからだ。

どう転んでも助からないのなら、この子だけでも、逃げてくれた方がいい。そもそもヒトの都合に縛られるような存在じゃないんだから。

しかし、ドラゴンの子供は頑として微動だにしなかった。

突然、その小さな体からバチバチと音が鳴る。

当てにならないというか、思い通りにならないというか、とにか

く俺はドラゴンの子供を戦力に数えていなかった。
「グゥゥゥウウウルァァァアアアアアアアアッ！！」
ピシャアアンという轟音と、それと同じぐらいの鳴き声。両手が自由にならない俺は、耳を襲った衝撃に、一瞬肩の痛みを忘れた。
ドラゴンから走った雷は、先頭の魔法使いを襲った。目も眩む様な閃光が視界を埋め尽くす。
「……クソッ！」
光が治まって見えた光景は、もう一度正面に掲げられた＜菱形鉄（ダイヤ・アイ）壁（ロン）＞だった。砕くまではいかなかったらしい。
これが通用するなら、まだ光明が見えたかもしれない。相手にダメージがなくても、防御魔法を一撃で砕くような攻撃は、向こうの勢いを削ぐからだ。ところが現実はやはり残酷で、敵の勢いは衰えるどころか、さらに増している。
「この威力！！　間違いないっ！」
もはやすぐそこまで追い迫った魔法使いが言った。
「……グゥゥゥ――！！」
ドラゴンの子供は諦めていないらしい。また全身を強張らせ、力を溜めるような動きを見せる。
「もういいから！！　お前がこれ以上付き合う必要はないんだよッ！！」
飼い犬がどうしても言うことを聞かない時は……ああ、そうだ、厳しい声で名前を呼んだんだっけ。この手は使えない。
遂に敵が追い付いた。目の前３ｍといったところだ。弓矢を持っていた奴らが剣を抜き、魔銃が俺に向けられた。
「ドラゴンの攻撃だけは注意しろッ！　他は無視して構わない！まずは無力化、殺すより目的を優先させろよ！！」
「オオオオオオオオオオオッ！」
魔法使いの号令で敵全員が雄叫びを上げた。

「――っ！！」

俺は馬車の中に避難することすら思い付かず、屋根に胸から上を投げ出したまま、絶望のあまり固く目を瞑った。

――ルース！

次の瞬間に起こったことは、良くも悪くも完全に予想外だった。

騒ぐことも喚くこともせずに、馬車を走らせていたムキムキが叫んだのだ。

「うああ～～～～っ！？」

俺は驚いて後ろ――馬車全体からすれば進行方向――を振り返った。

鷲だ。二匹の鷲。片方は淡い黄色で、もう片方は黒に近い暗褐色。地面スレスレをこちらに向かって飛んで来る。

馬車も走っていることを差し引いても、とんでもないスピードだ。あっという間に距離を縮め、そのサイズが巨大であることに気付く。

そして、どちらの鷲も猫科の下半身がついていた。

鷲ではない、グリフォンだ。その背には、全身鎧を着込んだヒトが乗っている。

「――ぁ」

挟み撃ちか。何もこのタイミングで来なくてもいいだろうに。

黄色いグリフォンに乗った騎士が、長い突撃槍を構えた。輝く鎧姿から、何もかも一発で吹き飛ばしてやろうという気概が滲み出ている。

激突――向こうからすれば突撃――の瞬間を、俺はぼんやりと待った。

しかし。
グリフォンは二匹とも馬車の脇を通り過ぎ、馬車を囲もうとしていた集団にぶつかった。
「ッ！？」
慌てて目で追う。
黄色いグリフォンに乗った騎士の突撃槍が＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞に当たり、硬質な音が響いた。
「ィィヤァァアアアッ！！」
騎士は意外にも甲高い声で咆哮した。一瞬持ち堪えたかに見えた＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞が砕かれる。先頭にいた魔法使いが、胸の中心を貫かれたのが、見えた。
あとはもう、一方的だ。
「ちょ！？　どうっ、どうっ！！」
ムキムキの焦った声が聞こえると思ったら、突如馬車が揺れた。
車輪が滑り、車体が傾く。
屋根の穴から身を乗り出し、片手で姿勢を支えていた俺には、たまったものではない。意外と迫り来る敵よりこういう状況の方が怖い。さっきまでの諦めも忘れて、叫んでいた。
「おっ、おおっ――――……うわぁあっ！」
一際強い揺れに、俺の体が浮いた。
「グアー！」
ドラゴンの子供がこちらを振り返って鳴いた。
――投げ出される！
「ッ！！」
背中に衝撃。
でも思ったよりずっと優しい。というか柔らかい。
「無事か、カインド！」

頼もしすぎる声に振り向けば――。

「――ルースッ！」

「――グアー！」

ルースは、傾いた車体から投げ出された俺を、左腕一本で抱え上げ、そのまま馬車の屋根に飛び込んだ。

傾いた車体を、まるで踏み付ける様にして、強引かつ迅速に平行に戻す。車輪が擦れる嫌な音がしたものの、何とか馬車は横転することなく停まった。

最終的には道を反転した形になったようだ。

「どう、どう！　いい加減言うこと聞きやがれッ！！」

落ち着きなく暴れまわる馬をムキムキが嗜める声が聞こえた。そういえば、グリフォンは馬の天敵だ。その臭いにすら怯えると言われているのに、すぐそばを通り過ぎれば、パニックになるのも当たり前だろう。

「っはぁ～～～……」

俺は馬車の屋根に座り込み、大きく息をついた。ようやく緊張から解き放たれる。生きてるって素晴らしい。このまま気を失えたらどれだけ気持ちがイイだろうか。

「――ちょ、怪我してるじゃないかッ！？　手当てしないと！」

「ぐあぐあ！」

ルースとドラゴンが焦った声色で言った。ドラゴンが俺の膝の上に乗って来る。

視線を動かすのも億劫だったが、俺は顔を上げた。目の前に血塗れの左足。膝近くまでのブーツの中程、ふくらはぎ部分を槍が貫通している。

「おっ、お前の方が重症じゃねぇか――ッ！？」

「ぐあー！？」

「ああ、闘気で締めているから大丈夫だ。出血は止まっているし、痛みも我慢出来る。動きに重大な支障はない」
思わず俺とドラゴンがツッコんでも、ルースは涼しい顔をして、特に痛がる様子すらない。叫ぶたびに痛みで顔を顰めている俺とは大違いだ。

ぎゃあぎゃあ騒いでいると、ガリガリが穴からやつれた顔を覗かせた。
「……ああ、ルースさん。お互い命があって何よりです。と、とにかく状況はどうなりましたか？」
どこか悟りを開いたような表情で、元から痩せていた顔には張りがない。魔力の使い過ぎというだけではないだろう。
俺は、馬車が停まった所からは少し離れた、敵集団とグリフォンに乗った騎士達の戦いの場を眺める。戦闘らしい戦闘にはなかったのか、もうほぼ終わっていた。
「鎧兜を着込んだ騎士を乗せたグリフォンに助けられた……んですかね？」
「グリフォン!?　グリフォンライダーですかッ!?」
俺の呟きに過剰に反応するガリガリ。立ったまま空を見ているルースが答えた。
「ああ。ルークセントの正規軍、グリフォン部隊だそうだ」

――何でお前がソレを知ってるんだ？

俺が口を開きかけたところに、真上から羽ばたく音が聞こえてくる。
もう一頭のグリフォンがゆっくりと降りて来た。体色は茜色。当然鞍が取り付けられ、鐙に鉄靴が差し込まれているのが見えた。
グリフォンは大きな翼をゆっくりと羽ばたかせ、優雅に着地する。大きい。肩の高さで３ｍほど。この間見たオルトロスとあまり変

わらないが、その翼の存在感といったらとんでもなかった。嘴から鳥っぽい尾までよりも、翼の方が遥かに長いのだ。

その大きな翼を畳み、グリフォンは屈んだ。その視線は、馬車を引いてきた二頭の馬から離れない。

馬の方は、動いたら食われるとでも思っているのか、震えているのに後ずさることすらしなかった。

「上空の敵を倒したところで、三頭のグリフォンが近付いて来るのが見えたんだ。これ以上脅威を増やす訳にもいかないから、突っ込んだ」

ルースが説明する間にも、騎士がグリフォンから飛び降りる。

「初撃をかわされたり攻撃されたり、まぁ色々あったんだが……。このヒトが言うには、彼らはルークセント正規軍で、敵じゃないらしいんだ。それなら協力してもらおうと一緒に来た、というわけだ」

顎に手をやって思案顔を見せるルースに、俺は肩の痛みも忘れて怒鳴っていた。

「正式な軍人に問答無用で突っ込んでった、だぁああッ！？」

「知らなかったんだ、しょうがないじゃないか」

ルースは気分を害したらしく、口を尖らせる。

グリフォンライダーは兜を脱ぎながら、笑いを含んだ声で言った。

「お互い身内には苦労しているようだな」

四十代と思しき、壮年の男性だった。白いものが混じった黒髪は品良く撫で付けられ、口髭もキッチリ整えられている。身長は俺やルースとそれほど変わらないだろう。がっしりした体つきは部隊長を任されるのに相応しい威圧感があった。

いつまでも馬車の上から見下ろしているわけにもいかない。

俺が屋根から降りようとすると、ルースは俺とドラゴンを抱えて飛び降りた。脚を怪我しているのに、痛みに耐える素振りすら見せず、当たり前のことをしただけだ、という顔をしている。

助けられた俺の方が呻いているのが情けない。

「ス、ス、ス……、スロウルム将軍ッ！」

馬車から転げ出てきた隊長が、グリフォンライダーを見て叫んだ。隊長を支えていたらしいガリガリも、御者台から降りたムキムキも、慌てて敬礼をする。

面倒臭そうに返礼したグリフォンライダーはぶっきらぼうに言った。

「君達、憲兵団サートレイト隊の任務は承知している。まずは負傷者の手当てをしたいのだが、よろしいか？」

「はっ！！」

もう一度敬礼をした憲兵達は、直立不動で固まった。

「――サラ！　ダイン！　終わったか？」

グリフォンライダー――スロウルム将軍が叫ぶ。

いつの間にか、道から少し離れた草原に、二匹のグリフォンが降りていた。嘴や爪に血がついていなければ、非常に絵になる光景だ。

騎士の一人がグリフォンから降り、走り寄って来る。先程その突撃槍で魔法使いを＜菱形鉄壁（ダイヤ・アイロン）＞共々貫いた騎士だ。

「はい！　敵は殲滅！　こちらの被害はありません！」

「負傷者二名。早急に手当てを」

「了解しました！」

兜を脱ぎつつ敬礼した騎士を見て、俺は驚いた。

硬そうな茶髪から三角形の耳が飛び出している。

そして、着込んだ鎧は、胸の部分にしっかりとした膨らみが見える。

グリフォンライダーの一人は、獣人で女性だった。

# 9．グリフォンライダー（後書き）

9月26日初稿

## １０．細い腰に空

グリフォンは力強い羽ばたきで空を進んでいた。

「おおおおお～～～～ぅ！？」

「ぐーあー！」

俺の口が、勝手に叫んだ。

「ええぃ、抱きつくなァ！」

サラと呼ばれた女騎士のグリフォンに乗せられた俺は、鎧をつけながら細い彼女の腰にしがみついていた。

淡い黄色のグリフォンは名前をソリスというそうだ。

すでに上空５０ｍは超えている。

確かな大地は遥か下。

視界の半分を空の青が占めている。

正面からの風は強く、少し揺れるだけで鞍から滑り落ちそうな気がする。全身から力を抜くことが出来ない。

「ちょ、コラ！　どこ触ってんの――触ってるんだッ！！」

上昇している時はまだいい。風の関係なのか、たまに短い時間下降することがあって、胃袋が口から出てきそうなその感覚が、怖くて仕方がなかった。

そして、どうやら怯える俺が面白いらしく、ソリスはわざと上へ下へ移動するのだ。

「ハハッ、落ちたら僕が拾いに行くよ。そう怖がらなくてもいい！」

隣の暗褐色のグリフォンからルースが呼び掛けてくる。こちらのグリフォンはノクティス。ソリスに比べるとずっと落ち着いている。

騎手はダインと呼ばれた騎士だが、兜を脱いだところを見ていないので、種族や年齢はわからない。鎧を着けた体つきからすると男性

だろう。
ルースは自分で飛べるくせに、何だかはしゃいでいた。
思わず怒鳴り返してしまう。
「落ちそうだから怖いんじゃねぇよ！　この状況がすでに怖いんだよッ！！」
「わかったから――いい加減――そこから手をどけなさいッ！！」
金属製の篭手をつけたサラの肘が、何度背中に落とされても、この腕をほどく訳にはいかない。
「サラ、相手はラチハークの子爵令息だぞー！」
前を飛ぶ茜色のグリフォンに乗った将軍が振り向いた。スロウルム将軍も、さっきまでの威厳はどこへやら、少年のような若さとテンションの高さを見せていた。
「女性に噛り付くような貴族はいませんッ！！」
「何と言われようと、この腕は放せないッ！！」
サラの台詞も、俺のプライドも、恐怖の前では何の影響も与えない。
将軍は面白がった口調のまま、言った。
「すまないが、グリフォン部隊は空の上では自由がモットーなんだ。少々の無礼は見逃してくれ！　私の鞍が普通の物だったら、こっちに乗ってもらったんだがなー！」

将軍の鞍はどうやら特別製で、完全な一人乗り用だ。何とビックリ、変形機能があった。元々グリフォンに取り付けられたベルト類に、鎧の前垂れ部分を固定し、そこに乗るわけだ。グリフォンから降りた時には、鐙はどこかに収納され、腰回りの鎧として機能するらしかった。

「まぁ、最初は怖くても、そのうち病み付きになる！　それは私が保証しようッ！」
何が楽しいのか、スロウルム将軍は笑った。

――絶対病み付きになんかならねぇ！　ていうかもう二度と空なんか飛ばねぇ！

俺はサラの腰にしがみ付きながら、こんなことになってしまった経緯を思い返した。

襲撃から助けられたその後。

道から外れた小さな丘の上。

ちょっとした木立に座り込んで、俺は治療を受けていた。

将軍は憲兵達と会話中。どうやら襲撃を受けてからの状況を説明しているらしい。

グリフォン三匹は、ダインの監視の下、少し離れた草原で、戦利品でもある馬肉を食べている。

「……」

気まずい。

俺の隣には獣人の女騎士、サラ。俺の肩に手を翳し、白魔法の治癒術である＜低位治癒（ロー・キュア）＞を施してくれている。

彼女の年齢は俺より少し上、二十歳前ぐらい。やけに跳ね上がった髪型なんかに代表される獣人特有の野性味と、騎士らしい上品でキビキビとした仕草が、アンバランスでありながら魅力的だ。顔立ち一つとっても、かなりの美人さん。ついでに、鎧の膨らみを信じるなら胸も相当ある筈である。

そんな美人女騎士に治癒魔法をかけてもらうなんて、かなりテンションが上がる展開だろう。将軍が彼女に俺の治療を命じた時には、心の中で歓声が上がった。

「……」

しかし、である。その気の強さが伺える顔は、何故かとても不機嫌だった。むしろ俺を睨んでいると言ってイイと思う。

何か不快にさせるようなことをしただろうか――？

黙ったまま治療を受けるのも気が引けるので、俺は無理矢理口を開いた。

「……あ、あの。獣人で魔法が使えるのって珍しいんですよね？」

「私は先祖返りでこんな容姿なだけで、純粋な獣人というわけではない。それに、獣人を肉体に頼った体力馬鹿だと思うのは、偏見だ」

サラは目も合わさずに言い放った。メイプラにはそれほど獣人はいないので、どこかで聞きかじったことを言ってみたわけだが。

うん、知ったかぶりは火傷するだけですよね。

またも嫌な沈黙が降りる。

サラから視線を逸らすと、ルースが自分で自分を治療していた。傍らにはドラゴンの子供がその様子を眺めている。

赤い短刀を抜いたルースは、ふくらはぎを貫通した槍の穂先側を、足ギリギリの所で切り落とす。そして、無造作に柄の部分を握り、それはもう何の躊躇もなく、一気に引き抜いた。ずりゅっという音。ルースは軽く顔を顰める程度で、呻り声すら上げなかった。

「いちぃーっ」

「ぐむぁーっ」

見ていただけの俺とドラゴンの方が変な声を上げてしまう。

「……この男の治療にはもう少しかかる。今抜いても出血が増えるだけだ」

ルースにちらりと視線を送ったサラは、冷たい口調で事務的に言った。若い女性なら大抵見とれる程の美形であるルースですら、この態度である。俺達全員にいい感情を抱いていないってことか。というか、この男って。

「問題ない。自分で治せる」

ルースは特に気分を害した様子もなく答え、右手の人差し指で紋

章を描いた。
　黒魔法の低位再生術＜塞ぐ掛け金（ノイクドアペア・ウォルス）＞だ。掌と同じぐらいの大きさの黒い輪が現れる。これを患部に翳す事で、傷口の再生が行われるわけだが……。

「ぐぅぅぅっ……！」

　ルースの端正な顔が、歪んだ。
　黒魔法による治療はとても痛いのだ。槍を引き抜いた時にも大して痛がる様子を見せなかったルースが、脂汗をかく程痛いのだ。その痛みは傷口の深さと治す速度に比例する。貫通するような傷を治す際の痛みなんて、俺には想像することも出来ない。
「お、おい。何も黒魔法で治さなくても。そんなに急ぐんなら、先に治癒術かけてもらえば良かったのに」
「い、急いでいるわけじゃないさ……。白魔法だと動きに支障が……ぐっ……出るからな」
　白魔法の治癒術は痛みがない代わりに、治した部分が元の機能を取り戻すまで、時間とリハビリを必要とする。傷の深さや負傷した部位にも依るが、動かそうにも上手く動かせないし、強烈な違和感が残ってしまうのだ。
「さすがに王都に着けば、もう荒事はないだろ……。そこまでしなくても」
「く……万全を期すに……越したことはない。これぐらいは戦士として当然の嗜みだ。大体、隊長が『もう心配あるまい』と言った直後だったんだぞ、襲われたのは」
　自分で黒魔法の再生術をかけるは、自分自身で傷口をグリグリやっているのとほとんど同じだという。それを当然の嗜みと言い切るとは、頭が下がる思いだ。

「……それほど我々が信用できないのか……」

「はい？」
サラがぽつりと呟いた。俺は意味がわからなくて、思わず聞き返してしまう。
「ふん、何でもない。お前の治療は終わりだ」
そう吐き捨てるように言って、サラは将軍のところへ行ってしまった。
「……」
足音高く去っていく女騎士をぼんやり見送っていると、治療を終えたらしいルースとドラゴンの子供が、俺の隣に腰を下ろした。
「怒っているようだったぞ。何かしたのか？」
「ぐあー？」
「いや、心当たりが一切ない」
本気で何が理由なのかわからないのだから仕方がない。

俺は気持ちを切り替え、左腕を確認することにする。
治療の為、鎧は脱いでいた。さらにベストとシャツを脱ぎ捨てる。ベストに被害はないが、シャツの方は左の肩から袖口までべっとりと血がつき、ついでに肩に穴が開いている。どうせ捨てるのでタオル代わりにすることに。
すでに固まった血を拭くと、傷跡一つない。感情や態度はともかく、サラはきちんと治療してくれたのだろう。
「キレイに治ったな。動かせるか？」
「肘から先の動きに支障はない……んだが、腕が上がらない」
腕を前に伸ばすのは、何とか出来る。しかし、横に広げる動きは難しい。
これは……何気なく動こうとした時に動かせないことに気付く、なんてことがありそうだ。ちゃんと意識しておかなければ。
荷物から替えのシャツを引っ張り出し着込む、そんな動作にも動かしづらさが付き纏う。鎧をつけるのは、ルースに手伝ってもらう必要があった。

「お前の方は大丈夫なのか？　痛みが残ってるとか、体力が切れかけてるとか。問題があるなら言っておいてくれ」
鎧をつけるのに悪戦苦闘しながら、ルースに尋ねる。
「ふむ。報告しておかなければならないようなことは、ない。強いて言えば、ブーツが血塗れになってしまったことぐらいだ」
「俺も使った分の魔弾補充しないとなぁ」
未明に使った分も補充していなかった所に、さっきの襲撃で使いまくった為、残りは＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞が四発。弾倉に空きがあるのは心細い。

「それぐらいはこちらで保障するさ」
俺とルースが座ったまま振り向くと、将軍が苦笑していた。傍らにはサラと、憲兵隊々長。
すぐに立ち上がり、俺は顔の前で両手を振った。
「いえいえっ！　護衛してもらっている上に怪我も治してもらいました。これ以上恩情を賜るわけにはいきません」
「――遠慮はいらない。他国からの旅行者をこちらの都合に巻き込んでいるのだ。それぐらいはさせてくれ」
将軍はそう言って、俺の鎧についている家紋を見た。
メイプラ子爵の関係者だと気付いたのだろう。
「名乗るのが遅れたな。私の名はトマス・スロウルムという。ルークセント軍魔獣師団所属、グリフォンの方はソリソカルだ」

名前に応じるように茜色のグリフォンが舞い降りた。

スロウルム将軍の隣まで寄って来ると、落ち着いた様子で草原に伏せる。
「私はラチハーク国メイプラ子爵の次男、カインド・アスベル・ソーベルズと申します。こちらは私の従者を務めるルース・アーカードです」

俺は名乗り、ルースと共に一礼した。将軍達グリフォンライダーは軽く頷き、驚いた様子は見せなかったが、隊長は明らかに狼狽した。

「さて、あんなことの後で唐突ではあるが。君達には私と一緒に来てもらいたいのだ」

「……私達はサートレイト隊の方々と、王都の憲兵隊本部まで同行し、そこでサートレイトで起こったことの証言をすることになっていたと思うのですが……」

「それはもちろん承知している。我々が護衛任務を引き継ぐ形だ。王都に行くのは変わらないんだが……、憲兵隊本部ではなく、王宮まで同行してもらうことになる。実を言えば、君達の窮地に居合わせることになったのは、ただの偶然ではない。我々は君達を迎えに来たのだ」

スロウルムの言葉が終わる前に、俺は混乱していた。

王宮といえば、国の中枢である。そこに、ただの外国人の旅人である俺とルースを招くという。

証言や報告なんて憲兵隊の本部で十分だろう。

偶然ではなく、命令があったとするなら余計におかしい。グリフォンライダー三騎、それも将軍と呼ばれるようなヒトを、身分も明かしていない俺達の迎えに寄越すなんて。

さらに正規軍に命令出来るとすれば、それは王か国か、いずれにしても相当な権力を持つモノだ。

「閣下。やはり混乱しておられるようですし……一度本部に寄っていただいてから再度お話する……というのはどうでしょうか？」

隊長がおずおずと将軍に語りかけた。いつの間にか、俺達にまで敬語を使っている。

「それでは、あちらにも必要のない面倒事が増える。お前達サートレイト隊の立場もわきまえているつもりだ。私の方からきちんと話

を通す、安心しろ」
将軍の断定的な物言いに、隊長は顔を伏せてしまった。
ルークセント側では話がまとまったわけだな。
俺達には、横柄さはかけらもない真摯な態度で、将軍が尋ねてくる。
「どうだろう、ソーベルズ卿。一緒に来てくれるか？」
ルースをちらりと見れば、特にご意見はない様子。俺に任せるってことね。

不自然な状況は正直怖い。将軍だって全てを話しているわけではないだろう。何か大きな問題に巻き込まれている悪い予感がする。
とはいえ。将軍の真摯な態度自体に嘘はないと思われた。性格的にも能力的にも憲兵隊々長よりは信用出来る。
――まぁ、隊長より信用出来ないヤツはそうはいないだろうけど。

「わかりました。元々私たちは旅の身の上。それもそう急ぐものでもありません。将軍閣下のご意向に沿わせていただきます」
俺がそう言って頭を下げると、将軍は軽く息を吐いて、肩の力を抜いたようだ。
「こちらの都合に合わせてもらって、本当にすまないと思っている。荷物をまとめてくれ。君達の準備が出来次第、すぐにでも発つ」

俺は治療の為に必要となるかと思って荷物を引っ張り出していたが、ルースの小さな荷物が馬車の中にあった。
グリフォンに怯えて、離れている馬車に二人で向かう。
「要求は同じようなものなのに、隊長に比べれば不快感はなかったな」
あっさり言うルースに、俺はげんなりしながら答えた。
「でも事態は大きくなってる気がするぞ。王都ならまだしも王宮なんて。ラチハークでも見たことしかないのになぁ」

「やっぱりおかしなことなのか？」
「おかしなことだらけだけど、全部説明してるヒマがない。お前はどうする？　俺だけ付き合えばいいなら、お前達だけでも――」
「ここまで来たら付き合うさ」
「ぐあーっ」
ルースは苦笑しつつも最後まで言わせず、ドラゴンの子供は尻尾で俺の側頭部を叩いた。

確かに、ここまで来て、関係ないからどこへでも行けばいい、というのも冷たい話かもしれない。
弱くて身分的な縛りがある俺だって、今ここでサヨナラなんて話になったらイイ気分はしないだろう。

馬車に着くと、ムキムキとガリガリが寄って来た。
「ここでお別れか。王都に着いたら、さっきの戦いを肴に酒でも、と思ってたが」
「まぁ、王都で会うこともあるかもしれませんし」
右手を差し出してくる二人と、順番に握手をする。
不思議なことに、俺は別れるのが少し寂しかった。出会って丸二日、話し始めたのは今朝からだと言うのに、一緒に酒を飲むのも悪くないと思える。
ルースとも握手を終えた二人に尋ねた。
「そちらも王都に？」
「ええ。本部への報告任務は継続中です。それと、これは独り言なんですが――」
ガリガリはそこで声のトーンを落とした。

「――今、ルークセントの上の方は、ゴタゴタしているようです。スロウルム将軍は人格者ですが、それ故に、多数派とは言えません。気を付けてください」

その内容は、俺の嫌な予感を膨らませるものだった。しかし、俺が知っておいた方がいい情報なのだろう。これまでの印象で言えば、堅実で冒険をしないガリガリが、わざわざ耳打ちをしてまで伝えるべきだと思うほどの。

そして、こんなやり方で懸念を伝えてくれるぐらい、俺達を心配してくれているのだ。

「お世話になりました。お三人の旅の安全を祈ります」

「ぐあー」

俺は、心からの感謝を込めて、キチンと頭を下げた。ドラゴンも俺の肩からわざわざ顔を出したようだ。ルースは右の拳で胸の中央を叩いた。

「じゃあな」

「それでは」

憲兵二人は背筋を伸ばした敬礼で答えてくれた。

荷物を持って戻る途中、やはり直立不動で隊長が立っている。いきなり腰を直角に曲げて頭を下げてきた。

「……数々のご無礼、大変失礼致しましたッ」

「いやいやいや。今更ですし、ちゃんと名乗ってないこっちが悪いんですよ」

そっちも名乗ってないけどな！

俺は内心の罵倒を隠して、笑顔で答える。

隊長も完全に作った笑顔で、ビシッと敬礼すると、初めて聞くハキハキとした声で言った。

「憲兵団サートレイト隊々長、ノリプトン・ティンクです！　ぜひ、ご実家の方にも、よろしくお願い致します！」

……今さっき上がったばかりの憲兵への高感度が一気に下がった。

「わかりました。サートレイト隊々長ノリプトン・ティンク様は、外国人の私にも素晴らしい対応をしてくれたと、詳細をお話させて

いただきますね」
さすがにイラっとしたので、皮肉を込めた台詞を残し、将軍の所へ急ぐ。隊長は凍った笑顔でずっと敬礼したままだった。

草原では将軍を含むグリフォンライダーが三人が打ち合わせをしているらしく、すぐ傍でグリフォンが三頭、羽を畳んで思い思いの姿勢をとっている。
「おお、来たか」
将軍のすぐそばに、茜色のグリフォンが鳥類の前足と猫科の後足で立っていた。確か、名前はソリソカルと言ったか。

グリフォンは俺達に視線を向けたかと思うと、突然前足を折った。真っ直ぐに伸ばしていた首も地面に向け、草原に嘴が付きそうだ。それは、どう見てもお辞儀だった。

残り二頭のグリフォンもそれに倣うように、こちらに向かって頭を下げる。

「――ッ！？」
俺も驚いたが、グリフォンライダー三人の反応はもっと極端だった。サラなんかは一歩後ろに下がったほどだ。
軍人三人がそのまま動かないので、恐る恐る口を開く。
「あ、あの……何か問題が……？」
「いや、グリフォンは、良く言えば誇り高い――悪く言えば傲慢な生き物なのだ。グリフォンライダーがどんなに命じても、気に入らない者を乗せないこともある。それが……」
将軍が戦慄すら匂わせる表情で言う間に、ドラゴンの子供がフードから出てきた。俺の肩に前足を乗せ、頭を下げたグリフォンを見下ろす形になる。

「ぐあー」
ドラゴンの、どこか威厳すら漂わせた鳴き声に、グリフォン達は頭を上げた。
その光景は、まるで主人と家来を思わせる。平伏した家来に馬上から労いの言葉をかけるような。
つまり、グリフォン達がお辞儀をしたのは、俺ではなくドラゴンに対して、ということだろう。

「――あ」
サラが呟き、グリフォンライダー達が視線を交わらせた。互いに目配せをし合い、何かを確認したように見える。
アイコンタクトは一瞬だった。将軍が口を開く。
「それが君が拾ったというドラゴンの子供か」
「は、はい。そうです」
少しの間黙っていた将軍は、俺の視線に気付くと、咳払いを一つした。
「……んんっ。城に着いたら、その辺りの事を詳しく聞きたいものだな。では、騎乗！」
強引だが有無を言わせない号令で、俺達はグリフォンに乗り込むことになった。

俺は完全に侮っていたのだ。
魔法も使えないし、ラチハークではほとんど魔獣に乗る機会はない。俺は、空を飛ぶのがこんなに怖いとは、想像もしていなかった。
地面が遠ざかっていくにつれて、視界に入る範囲が広がり、確かな存在を感じられるモノがどんどん減っていく、その恐怖。
ソリスがいきなり宙返りを披露した。

地面が上。足元には空。当然回想なんて吹っ飛んだ。
「ぅひぃ～～～ッ！？」
「ぐーあー！」
「うるさいっ！　もういっそ落ちろッ！！」
サラはもう諦めたのか、俺がしがみ付くのを黙認してくれるようになった。力を込め過ぎた腕が震えているからかもしれない。むしろ台詞はどんどん厳しくなっていったけど。
落ちろとか鬼か。

「カインド！　今度、君を抱えて飛んでみたいんだ！　きっと楽しいぞ！」
ルースが笑いを堪えた様子で言った。
どっしりとしたグリフォンに跨っていても怖いのに、抱えられただけで空を飛ぶなんて、絶対に楽しい筈がない。
言い返そうにも、恐怖で、気の利いた返答が出来なかった。悔しかったので、とりあえず叫ぶ。
「うるせー！！」
「アンタの方がうるさいっ！！」
サラの口調が微妙に変わってきた。彼女もどこか気が緩んできたのかもしれない。少なくとも、むっつり不機嫌さを表すだけでなく、直接文句を言ってくるのは、前進じゃないかと思うのだ。

「おっ、見えてきた！　苦行ももう終わりだぞ、ハッハッハ！」
将軍の声に恐る恐る顔を上げる。

緑ばかりの大地の向こう、地平線に別の色があった。

「あれが……」
俺にとっては、とても長く感じた空の旅だったが、実質は数十分といったところだろう。確かに馬車で行くよりずっと早い。

ひと時恐怖を忘れてぼんやりしている間にも、その様々な色は、どんどん大きくなっていく。

それまではしゃいでいたスロウルム将軍が、どこか畏敬の念すら感じさせる声色で呟いた。

「そう、あれがルークセントの王都、クルミア。そしてその中央に位置するのが、目的地――クルミア宮殿だ」

## １０．細い腰に空（後書き）

１０月１日初稿

# 11．国の宝

上空から見ると、王都クルミアは中心から五つの方向に街が広がっていた。

それぞれ大きな街道が走っており、北の道はそのままユミル学院にも繋がっている筈だ。

東側だけが東北と東南に分かれている。東南の道がこれまで馬車で移動して来た道で、俺の祖国ラチハークまで続く。

「……っ」

俺は圧倒されていた。こんな光景は、空でも飛ばないと見られない。

ふわり、と急に少し高度が下がった。

「ひぃっ！！」

途端に恐怖がぶり返し、出来るだけ視界をサラの背中だけにする。

「この光景を見せてもまだ駄目かー！　こうなったら、夜の王都を上空から見せる必要があるな！！」

「断固拒否しますッ！」

俺が将軍の軽口に叫び返している間にも、ぐんぐん高度は下がっていき、地面が近くなっていく。

目を瞑るのも怖いので、状況が確認出来る程度に、下界を覗いた。

都のほぼ中央に城があった。

かなり広大な敷地を堀で囲み、その内に壁が張り巡らされ、いくつかの塔が立っている。

どうもグリフォンはそこを目指している様だ。

「――ちょ、直接王宮に降りるんですかあああッ！？」

俺は思わず叫んでいた。王都とは言っても、都の外にある駐屯所

なんかに降りると思っていたのだ。
「黙ってなさい！　我々は特別！」
サラが肘鉄と共に答え、続けるように将軍が言った。
「魔獣師団の中でも、グリフォン部隊は王都守護の役割を担っているんだー！　平時は色々決まりがあるんだがなー！　さぁ――、降りるぞ！！」

ソリソカルが前に出た。茜色のグリフォンを頂点とした三角形の形になる。
がくん、と一気に高度が下がり、二つの塔が近付いてくる。
「ぅあああああぁぁぁぁぁッ！？」
グリフォン達はわざわざ塔の間を通過し、城壁の内側に突入した。綺麗に刈り込まれた芝生が、眼前に迫る勢いで視界を占領する。
俺は思わず、腕により力を込めてサラの腰に噛り付き、激突の衝撃に備えていた。
「～～ッ！！」
地面にぶつかる一瞬前、グリフォンは大きく翼をはためかせた。上からと後ろから、押し付けられる様な不思議な感覚。
そして、あっけないほど優しく、ソリスは地面に降り立った。
「――……っは～～～～……」
すぐそこに芝生を確認した時には、俺の体が勝手に大きく息を吐いていた。どのぐらい前から呼吸を忘れていたのかもわからない。
地面のありがたさを噛み締めていると、サラがやけに静かな声で告げて来た。

「……もう一度だけ、言います。そこから、手を、離しなさい」

「――あれ？」
気が付けば、俺の右手が彼女の胸に位置している。当然鎧の上からなので金属の感触しかしないが、それだけに今の今まで気付かな

かった。
そうっと右手から力を抜き、彼女の体から離れる。
いきなり頬に衝撃。
俺は、サラの裏拳で、グリフォンから文字通り叩き落された。
「わ、わ、悪かったとは思うけど、何も殴らなくてもいいじゃん！」
「当然の報いよッ！　ヒトの胸鷲掴んでおいて、よくも文句が言えたものね！？」
地面に座り込んで抗議をする俺を、グリフォンの背に座ったままのサラが見下ろす。頭の上から飛び出した三角の耳がピンと立っていた。

「今のは、カインドが悪い」
「ぐーあー」
すでにグリフォンから降りていたルースと、いつの間にかフードから出ていたドラゴンの子供がため息交じりに声を上げた。多分殴られる前に、自主的に地面に降り立ったのだろう。
ルースが腕を伸ばすと、ノクティスはわざわざ頭を下げて、撫でやすい体勢になった。嘴を撫でられ、くるくると心地良さそうに鳴いている。
俺もあっちの方に乗りたかったなぁ。
「災難だったな。だが……裏拳一発だったら儲けモノだったと思うぞ」
隣に立った将軍が、言った。後半はギリギリ俺に聞こえるぐらいの声量だった。笑いを堪えた表情をしている。
俺は慌てて足に力を込めようとしたが、萎えてしまって立ち上がれない。
「無理に立とうとすると怪我をする、そのまま少し休むんだ」
「……すみません」
「謝る必要はないさ。グリフォンに限らず、魔獣に初めて乗った者は、大抵そうなる。君の従者みたいなのは、むしろ珍しいぐらいだ

な」

俺が休んでいる間に、グリフォン達は帰還した。ダインの乗ったノクティスを先頭にして、入ってきたコースを戻る形で城壁の外へ飛び去って行く。

王都の東が、グリフォン部隊の基地だそうだ。

俺の足に感覚が戻ってきたのは、十分近く経ってからだった。ドラゴンの子供をフードに入れ、立ち上がる。

「では行こうか」

将軍の案内で、王宮正面に向かう。

グリフォン達が降り立ったのは、王宮全体からすると北側の裏庭、その外れだった。

城壁に沿った連絡通路を移動し、南側の開放的な庭園に出る。

「ほう、これは……」

ルースが呟くくらい、庭園は素晴らしかった。広い空間を贅沢に使用し、様々な種類の植物が確認出来る。所々に見える木々はどっしりと根を下ろし、年季どころか風格すら感じさせた。枝から差し込む光はどこか柔らかく、庭園全体に落ち着きすら与えている様だった。

刈り込まれた常緑樹で作られた仕切りの間を通る。

草花も豊富だ。一種類を一箇所に植えるのではなく、わりと大雑把に配置されているのに、どこか調和が取れていた。今は特に、春に咲く花々が咲き乱れ、景色だけでなくその香りまで楽しませてくれる。

小道を抜け、ほぼ真南にある王宮正面に出た。

巨大な宮殿が司会に飛び込んで来る。

門から宮殿まで続く、広大な広場には、忙しく歩くヒトたち。

城壁に比べると、内側は文化的とでも言おうか、かなり装飾重視だ。いくつかの塔が見えるが、その目的は戦や警備ではなく、権威付けだろう。宮殿自体も豪華で威圧的な印象を受ける。

当然だが空から見るよりも大きく感じられ、俺は圧倒された。将軍に小声で尋ねる。

「――正面から入ってもいいものですかね？」

さすがにヒトが多い。馬車で隊長が言った通り、背の高いエルフや背の低いホビットもちらほら見えた。

どうも視線が痛い。

俺はおのぼりさん丸出しだし、ルースは装備がみすぼらしい割りに美しく、しかも落ち着き払っているので、かなり目立っていた。

「悪事を働いたわけでもなし、コソコソする必要もなかろう」

俺一人が居心地の悪さを感じているらしい。

ズンズン進む将軍についてやけに広い階段を上り、宮殿内に入る。エントランスは広く、天井が高い。埋まるほどふかふかの絨毯や綺麗な石造りの階段、俺には誰だかわからないデカい肖像画等の贅沢品が目を引く。

感心していると、慌しい足音が聞こえてきた。

「……――ッ！？」

兵士達だ、と思った時には、囲まれていた。

その数、三十人ほど。将軍を先頭にした俺達四人を円形で包囲するには十分過ぎる。

全員ピカピカの鎧に身を包み、身なりが整えられ、槍やハルバードを装備している。

正規軍、王宮勤務の衛兵達である。

彼らが構える武器が狙うのは――、俺とルースだ。

エントランスにざわめきが起きる。文官や下働きの女性達が、遠巻きからこの捕り物の行く末を追っていた。

これは……罠か。逃げ出さないよう懐に招き入れ、捕らえる。

朝からの騒動に、空の旅でいっぱいいっぱいだった俺は可能性すら考えていなかった。助けられ、何だかんだと交流出来たグリフォンライダー達を疑わなかったのだ。

「どういうことだ、これは？」

ルースが静かな口調で言った。すでに右手は大剣の柄を握っている。

俺は慌てて将軍を見た。

今までのくだけた態度も、全て俺達を油断させる為のウソだったのだろうか？

「――私も聞きたいな。どういうことなんだ、コレは？」

将軍はゆっくりと口を開いた。目の前の衛兵を見据え、その瞳には確かな怒りを含んでいた。少なくとも俺には、彼が演技しているようには思えなかった。

おそらくは隊長格であろう衛兵が、将軍に怯みながらも武器は下ろさず、答える。

「命令を受けました……！　その二人を捕らえろとっ！」

全員の視線が俺とルースに集まる。

サラは混乱しているのか、三角形の耳がぺたんと垂れていた。

「その命令は誰から受けた？」

「それは――」

「俺だよ、スロウルム将軍」

廊下側の死角から、品の良い服に身を包んだ男が現れた。カールした長い金髪に四角い顔。腰には豪奢な拵えの細剣。耳が僅かに尖っているものの、体つきは中肉中背で、顔立ちも合わせると、エルフっぽくない。

「ではお主に聞こうか、コーヴィン将軍。……どういうことなんだ、

コレは？」
　コーヴィンはゆったりと歩きながら、こちらを見下しきった表情で、その問いに答えた。
「我がルークセントの国宝を盗んだ犯罪者を捕らえるのは、当然のことだろう。そっちこそ、どういうつもりだ、スロウルム。犯罪者を堂々と宮殿に招き入れるとは」
「我々も命じられた任務を遂行しているに過ぎない」
　スロウルム将軍は冷めた視線で、すぐ傍まで歩いて来たコーヴィンを見据えた。
　互いに敵意を剥き出しにして、二人の将軍が視線を交わした。
　とは言え、俺はそれどころではない。

　国宝を盗んだ犯罪者？
　当然心当たりなんて――。

「その任務を命じたのは？」
「――王女殿下だ」
　混乱する俺に追い討ちをかけるように、さらなる単語。
　しかし、コーヴィンはスロウルム将軍の台詞を鼻で笑った。
「フン、信用ならん」
　例えでまかせだとしても、王女という言葉に対してこの態度は、国と王族に忠誠を誓う軍人としていかがなものだろう。
「王女殿下には、公式の場にて話を伺うとしよう。……その二人を捕らえた後でな！」
　コーヴィンの宣言に反応するように、衛兵達が一歩にじり寄った。
　兵士の本分は命令を守ること。彼らは盲目的にコーヴィンに従う。
　そこに交渉の余地や手心はない。
「貴様ッ！！」
　スロウルムがそれまで抑えていた怒りを露にし、サラが俺達の前に出た。彼女の手も腰の剣を掴んでいた。

ルースまで腰を低くし、背中の大剣を抜こうとする。俺は慌てて止めた。
「ちょ、ちょっと待て！　何かの間違いだとしても、衛兵を傷付けたら――」
「無抵抗で捕まれって言うのかっ!?　こっちに非はないぞ!!」
「でも」
俺がルースの説得を続けようと一歩動いたその時、首筋に槍が突き付けられた。
「!!」
「抵抗す――」
「グァアアアッ！」
衛兵の言葉を遮る怒りを含んだ鳴き声。
それまでフードの中で大人しくしていたドラゴンの子供だった。
俺の肩に前足を乗せ、突き付けられた槍をその小さな口で噛み折る。
「――!!」
衛兵達に緊張が走った。ほぼ全員が一歩下がったほどだ。
「それが……!」
一歩も動かなかったコーヴィンの目の色が、変わった。まるで極上の女を目の前にしたような、飢えた視線。
その目を見て、俺は確信した。コーヴィンの目的は俺やルースじゃない、ドラゴンだ。
「グゥウウウウウ――」
呻るというより、呼吸を整えるような鳴き方には、聞き覚えがあった。
どこからともなく小さな炎が現れ、ドラゴンの口の周りをゆっくりと旋回し始める。
これは、宿や道での襲撃の時に見せた精霊魔法らしき攻撃だ。

俺は肩に乗るドラゴンに向かって怒鳴った。
「お前も待てってッ！！　怪我させたら結局罪になる！」
「ゥゥウウウ――」
炎は一度大きく燃え上がり、次に小さくなった。輝きが増している。勢いが弱まった訳ではなく、凝縮されたと見るのが妥当だ。
「魔獣は問答無用で殺されることだってあるんだぞ！！　やめろってば！！」
「ウルァァァ――！」
どんなに怒鳴っても、ドラゴンは攻撃を止めようとはしない。呻り声は咆哮と言ってもいいほどの勢いに達している。
「アアアアア――！！」

「やめろッ、イクシス！！」

俺は思わず叫んでいた。
イクシスというのは、小さな頃、実家で飼っていた犬の名前だ。どうしても言うことを聞かない犬を、当時名前を含めて叱っていた。さっきの襲撃の際にチラっと思い出していたからか、体が覚えていたのか、無意識のうちに口を付いて出てしまったのだ。

「ッ！」
ドラゴンの子供は身を竦め、それに反応する様に炎は霧散した。
エントランスに沈黙が下りる。
「っは～～～～～……」
誰も身じろぎすらしない中、俺は盛大にため息をついた。
ドラゴンを見ると、首を縮めて、上目遣いで俺を見た。
「ぐぅ～」
情けない鳴き声。バツが悪そうな表情に見えないこともない。

ともかく最悪の事態は避けられたかと顔を上げると。

「……？」
周りにいた全員がドラゴンではなく、俺を見ていた。
「命令を聞いたぞ……」
「完全に支配下に置いている……」
「あれがあの……」
衛兵だけでなく、遠巻きに騒動を観察していたらしい城勤めの文官達までざわめきだした。
「――な、名前を呼んで、応えた――」
コーヴィンが信じられないものを見たという表情で呟いた。さっきまでの見下した表情は鳴りをひそめ、汗が噴き出している。
「……っ」
将軍とサラまでもが、俺を見て言葉を失っていた。
「いつの間に名前なんて付けたんだ、カインド？」
ルースは衛兵に囲まれていることも忘れた様子で、首を傾げた。
いやいやいや、それどころじゃないでしょう。

誰か説明してくれないかなぁ等と思った頃、良く通る声がエントランスに響いた。
「そこまでです。衛兵達は武器を下ろしてください」
正面にある階段の踊り場に、金髪の少女がいた。華奢で小柄な体にドレスを着込み、豪華なマントを羽織っている。
傍らには背の高い茶髪の男が控えている。やや薄い頭髪からすると、五十は超えているだろう。こちらも豪華なマントを身に着けていた。将軍達のような武の匂いは一切しないし、どうやら剣一つ帯びていないようだ。
衛兵達は槍やハルバードを納め、背筋を伸ばした姿勢で俺達の包囲を解いた。さらに壁際に下がると、直立不動になる。

少女はゆっくりと階段を下りて来た。背の高い男も彼女に続く。

「スロウルム将軍に命令したのは私です。内容は――彼らを保護し、ここへ連れて来ること」

静かなエントランスに、少女の台詞だけが響く。

「しかし、彼らは――」

「控えなさい、コーヴィン将軍」

少女に詰め寄ろうとしたコーヴィンを、彼女の後ろに控えた男が一言で止めた。

タイミングと声色、抑揚が完璧だった。

痩せた老人一歩手前の割りに、声にも力がある。外見の印象では、周りを威圧する雰囲気等ない筈なのに、やけに怖い。

コーヴィンは、続く言葉を忘れたかの様に口を動かした後、黙った。

「――殿下」

将軍とサラが片膝を付き、頭を垂れた。

「任務完了ですね」

少女は頷きながらそう言うと、俺とルース、そしてドラゴンの子供に視線を移した。

綺麗よりは可愛らしいの方が賞賛としては似合う容姿だ。俺より年下、と言っても一つか二つほど、十四、五歳だろう。良く見れば、頭の上には小ぶりの王冠が載っている。

「ご挨拶が遅れました。私の名はリィフ・エイダ・サイ・ルークセント――」

真っ直ぐに俺を見ながら、少女は愛らしい口を開く。

「――ルークセント王国第一にして唯一の王女です」

一瞬呆けていた俺は、我に返るとすぐに言った。

「私はラチハーク国メイプラ子爵が次男、カインド・アスベル・ソーベルズと申します。これなるは私の従者、ルース・アーカードで

ございます」
ルースと共に、出来る限り上品に頭を下げる。
王女は膝を折って返礼し、俺の肩に乗るドラゴンを見据えた。

「ルークセント王女の名を持って、貴方方を歓迎します。我らが国宝『龍の卵』を保護し、届けてくれた客人として」
王女の宣言は、普通の声量ながら、エントランス全体に響き渡った。

けれど、言葉が聞こえても、それを理解出来るかどうかはまた別の話だ。

# 11．国の宝（後書き）

10月6日初稿

## 12．英雄と名前

ここのところ質素な生活を送っていたので、豪華な服が落ち着かない。

俺とスロウルムは廊下でルースを待っていた。

「食事より事情の説明の方がありがたいのですが……」

「夕食と説明を同時に、という王女殿下の心遣いさ。元々は憲兵本部での事情聴取の筈だったんだ、それに比べれば気が楽じゃないか」

壁に背を預けたスロウルムが苦笑しつつ言った。

鎧を脱ぎ、朱色の長衣を纏った将軍は、戦士としての力強さを残しつつ、壮年の落ち着きと高貴な雰囲気が滲み出ていて、相当なダンディっぷりだった。

「まぁ、こちらの方が面白そうではありますけどね」

俺もまたシンプルながら礼式に則った服装に着替えさせられていた。深緑の正装はルークセント側が用意した物だ。王族との会食に軽鎧姿で参加させる訳にはいかない、ということだろう。

「グアー」

俺の右肩に腹を預け、垂れ下がったドラゴンの子供が鳴いた。フード付きベストは流石に着れなかったので、ほとんどマフラーの様に、首か肩に引っかかるしかない。

テーブルに着くまでは辛抱してもらおう。

結局、俺が知りたいことを話してくれない将軍との意味のないやり取りに少々飽きた頃、ルースが鼻息荒く廊下に出てきた。

「食事一つの為にどうして着替える必要があるんだ！　剣まで取り上げられてしまったぞ！」

不機嫌な表情で捲し立てるルースは、とんでもなく目を引いた。

元々綺麗だったシルバーブロンドは櫛を当てられ輝きを増し、空色の正装に映えている。大剣とみすぼらしいマントがないだけで、武の匂いが一切しなくなる。

俺と同様それほど凝った作りではない服が、まるで王者の風格を備えているかのようだ。

王冠でも載せれば、そのまま玉座に座っても違和感一つないに違いない。

一瞬見蕩れた自分に気が付いて、俺はわざと皮肉を口にした。

「完全にお前の方が目立つなコリャ」

「こんな服は僕だって着たくなかった。女官がぜひこれをと差し出して来て、それで仕方なく……」

「ぐあーっ、ぐあっぐあっ」

ため息交じりのルースにドラゴンが顔を寄せる。

途端に笑顔になったルースは、ドラゴンの赤い鬣を撫でながら言った。

「慰めてくれるのか……。優しいなぁ、イクシスは」

「ぐーあーっ」

ルースの中では、ドラゴンの子供はイクシスという名前で決定らしい。というか状況が状況だったし、昔飼っていた犬の名前を呼んでしまっただけです、とは言い出せない雰囲気だったのだ。

ドラゴン自身もどうやらそれを自分の名前だと認識しているようだし、わざわざ取り消すこともないかな、とそのままになっている。

将軍の案内で、入り口を固める二人の兵士達に敬礼されながら、食堂に入った。

室内は広く、蝋燭の光で淡く照らされている。

すでにテーブルには、王女と、先程彼女の傍らにいた背の高い男、さらにコーヴィン将軍が着いていた。

「ソーベルズ卿をお連れしました。アーカード殿とイクシス殿もご一緒です」
スロウルムの紹介に合わせて、俺達は一礼。
王女達も立ち上がって、返礼をした。

「お越し頂きありがとうございます。今夜は私的な招待ですので、あまり緊張なさらずお食事を楽しんで下さい」
そうは言っても王族との食事なんて初めてですし……。
俺は愚痴を飲み込み、曖昧な笑顔で応じた。
「こちらは、リンゼス・コーヴィン将軍。そして、摂政役を務めるレイゼント公レストファー・エンバリィです」
王女に紹介された二人は、無表情のまま頭を下げた。
コーヴィンは俺達を無視すると決めたようだ。視線を外し、しきりにグラスを傾けている。
長身の男はエンバリィというのか……。
大臣ぐらいは務めているだろうとは思っていたが、まさか摂政とは。ルークセントには現在王がいないので、王女が成人するか夫を娶るまでは、彼が最高権力者だ。どうりで怖い筈である。
王宮での王女に摂政、将軍二人が席に着いた晩餐。国賓でもそうそうない状況だ。俺達一人ひとりに給仕が付いているし、至れり尽くせりだ。

食事は贅を尽くした豪勢な物で、王女の言う通り、それほど格式ばってはいなかった。量も多く、皿を開ければ女官が次から次に運んで来る。ついでに高価なワインまで出され、俺達は遠慮なく料理を堪能した。

「――という訳で、絶体絶命とも思える窮地に陥った私達を、グリフォンライダーの方々が救ってくれたのです。まるで英雄譚の一場面に遭遇した様な、劇的な幕切れでした」

舌も軽くなり、俺は王女の問いに答える形で、サートレイトから王都までの経緯を話し終えていた。
当然ルースに助けられた部分とドラゴン――イクシスが卵から孵った場面は端折った。
ルースは元々俺の従者で、一瞬の油断で俺が盗賊団に攫われたことにし、イクシスは偶々森で会って懐かれたことになっている。
「大変な旅をしていらしたのですね。何の罪もない旅行者を何度も危険に晒してしまうとは……。国を代表して謝らせて頂きます。申し訳ありません、ソーベルズ様」
王女の言葉に、晩餐の場は凍りついた。
調子に乗って気遣いを忘れていた様だ。俺は慌てて言い繕う。
「いえいえっ、憲兵隊の方々やグリフォン部隊の御尽力で事無きを得ましたので！」
気まずさに居住まいを正す俺に、雰囲気を変えようと気を利かせてくれたのか、エンバリィが語りかけて来た。
「ドラゴンは最初から貴方の言うことを聞いたのですか？」
「――あ、はい。基本的には」
反射的に答えて、俺はずっと棚上げにされていたことを思い出した。
「私にはどういうことなのか見当もつかないのですが……、このドラゴンの子供のことを何か御存知なのですか？」
イクシスが格闘していた肉から顔を上げ、俺を見上げた。例え小さいとはいえ、魔獣をテーブルの上で食事をさせるのは特例中の特例だそうだ。
俺の問いに答えたのは王女だった。
「ソーベルズ様のお話に聞き入ってしまって忘れていました。始めから説明させて頂きますね」
ワインではなく、紅茶で口を湿らせ、王女は続ける。
「ルークセント王家には『龍の卵』という物が、約二百年の間、代

々伝わっていたのです。小ぶりの宝箱に入った、赤い線が入った黒い卵でした……」

そこまで聞いた時点で、俺の背中には冷や汗が伝った。

忘れもしない、盗賊団の物置にあった卵――イクシスが孵った卵も黒地に赤い線が入っていた。

「歴代の王が思い立つ度に、その時代の技術で調査されましたが、わかることと言えば、生きているらしいということぐらいだったのです。無理なことは出来ず、この城の宝物庫で、二百年以上ひっそりと保管されていました。一年と少し前――私の父ウッドウェイン前王が永眠する、その直前までは」

王女の眉根に、一瞬、苦痛の皺が浮かぶ。しかし、すぐに元の真剣な表情に戻った。

「ウッドウェインは自分の死期を悟り、事後のことをエンバリィと私に託しました。その際、受け継いだ品の中に、『龍の卵』は確かにあったのです。それが、葬儀や事務処理を何とか終わらせた頃には、消えていました。おそらく、ウッドウェインの死に国中が混乱した隙を付かれたのでしょう」

王女がため息をつくと、コーヴィンが口を開いた。

「当然、我が憲兵隊が総力を挙げて捜索をした。その歴史的価値はもちろんのことだが、何よりも魔獣の卵――それも龍の物とすら言われている卵だ。仮に孵ることがあれば、どの様な被害が出るのかわかったものではない。王宮の内部から王都の人間まで調べ尽くし、すぐに範囲をルークセント全体まで広げて行方を追っていた。それが外国人の旅行者ふぜいに――」

「私のお客様です。言葉遣いに気を付けて下さい、コーヴィン将軍」

王女の言葉にコーヴィンは黙った。

ついさっきこんな場面があったなぁと思ってコーヴィンを盗み見ると、その顔には微かに非難――いや、怒りの色が見て取れた。国家の代表格に対して思うところはあっても、地位や立場が高い者ほど普通は顔に出さないようにするものなんだが……。

エンバリィがさりげなくその後を引き継いだ。

「一年以上、国の総力を挙げて探していた『龍の卵』の手がかりが憲兵隊からもたらされたのが、一昨日のことでした。壊滅した盗賊団のアジトに、赤い線が走る黒い卵の殻があった、という報告です」

サートレイト隊からの報告のことか。その時隊長あたりが、国宝の可能性を示唆され、俺達を目撃者として連れてくるよう命令されたんだろう。

一度詰め所から開放されたのに、数時間経っただけで本部まで同行しろと言い出したのは、憲兵隊本部どころか国からの命令だったのだ。

「報告によると、卵の殻には孵ったばかりだと思われる痕跡があったようです。しかし、憲兵隊が付近の捜索を行っても、オルトロスや馬の死体があっただけで、それらしい魔獣は発見されませんでした。例え魔獣であっても、孵ったばかりの幼獣が、そう長距離を移動出来るとは考えられません」

エンバリィの挙げる事実を受けて、王女が結論付けた。

「そこで、貴方方が何かご存知ではないか、とお越し頂いたのです。小さなドラゴンをお連れなのは、今日までわかってはいませんでしたけれど……」

「……なるほど……」

小さな声で相槌を打つしかなかった。

あの卵が城から盗まれた物だということは。そこから孵ったイクシスの本当の持ち主は、ルークセント王国、あるいはルークセントの王族にあることになる。

俺達のような旅行者を、わざわざ晩餐に招いて話をするというこ

とは、当然王女達としては所有権を主張する筈だ。
「ぐぁ？」
イクシスが首を傾げる仕草に、胸が痛む。情が完全に移っている証拠だった。

俺の表情を読んだのか、王女が済まなそうな声色で言った。
「もちろん、『龍の卵』と呼ばれていても、そこから何が孵るのかわかってはいませんでした。魔獣の卵であるということは確かですが、割って確かめる訳にはいきませんからね。――その子が『龍の卵』から孵ったという証拠はありません」
シラを切り通すという選択肢もあるかもしれないが、俺はその『龍の卵』からイクシスが孵るのをこの目で見ている。どれだけの価値があるのかもわからない国宝を、それと知りつつ騙し取るような胆力が俺にあるかどうか……。
こちらを見据える王女は、俺の葛藤を知ってか知らずか、淀みなく続ける。

「しかし、『龍の卵』という伝承が、ただの権威付けや誇張でないことは確かなのです。その卵をルークセントにもたらしたのは、かの英雄、アレイド・アークだったのですから」

それまで話を聞いているのかもわからなかったルースが、ぴくりと反応した。
俺も驚いて、口を開いたまま固まってしまう。
「歴史上で果たした役割や様々な逸話で有名な方ですし、お二人ともご存知のようですね。当然、ルークセントでも、真偽は別にしていくつもの物語が語られています。その中でも、特に重要視されるのが――」
「通り名の一つ『龍の友達』」
俺は思わず、王女を遮って呟いてしまった。

アレイド・アークが残した逸話は多く、その行動は範囲も深さも常軌を逸したものだった。

結果として、通り名もたくさんある。『三つの切り札』や『次なる一歩』あたりはまだいい方で、『英雄長』『黒衣の大渦』なんてものまで存在するぐらいである。

そんな中、本人が好んで冠されることを望んだのが『龍の友達』という通り名だ。

「そう。世界が創造された時に最初の命として生み出された四十八体の龍、その一体である赤尾白龍とアレイド・アークは友人関係にあった、という伝説です。このことから、魔獣を使役するルークセントでは、彼は今でも非常な尊敬を集めているのです」

ここで言う龍とは、その辺に存在するドラゴンとは一線を画す、ほとんど伝説上の生き物だ。５０ｍを超える体を持ち、ありとあらゆる種族の言葉を使いこなし、エルフですら足元にも及ばない精霊魔法を軽々と操った等と言われる。

アレイド・アークはそんな存在と友情を結んだ唯一の英雄だった。

現在は真龍と呼ばれている四十八体の龍は、普通魔獣には分類されないが、強力な力を持つ別の生き物と意思の疎通が出来た、というのは、魔獣乗りにとっては尊敬出来ることなのだろう。

「その『龍の友達』が『龍の卵』だと明言して残していった、という伝承がある卵ですから――」

「……だからニセモノの筈がない……」

俺の言葉を最後に、食堂が静かになる。

エンバリィの語った状況証拠ならともかく、最後のアレイド・アーク云々は、他の国の者にとっては根拠になどならないだろう。

しかし、魔獣国家としての誇りを持つルークセントとしては、拘る理由になる。

これは、諦めるしかないかなぁ……。
「ぐ～ぁっ」
大ぶりの肉を腹に収め終えたイクシスが、テーブルから俺の肩に飛び乗った。胴体を俺の首に預け、スカーフやクラバットの様に、頭と尻尾を垂らす。
「――っ」
その安心しきった表情を見て、渡したくない、と思った。
所有権や正当性や倫理観等から目を逸らしてでも、この小さな生き物と一緒にいたい、とそう思った。
例え、一生ルークセントから追われる身になったとしても――。
数瞬前の逃げ腰はどこへやら、意識が加速する感覚。
「その子が『龍の卵』から孵ったドラゴンだとして」
王女が上品にカップを置くと、言った。
逃げ出す算段を組み立てていた俺の頭が、一気に現実に帰る。
「一つ大きな問題があります。ソーベルズ様、貴方方のことです」
「はい？」
「ぐぁ？」
俺の名前に反応するイクシスに、王女が微笑み、すぐに真剣な表情に戻った。
「先程、貴方はその子を『イクシス』と呼びましたね。そして、ドラゴンの子供はそれに応え、魔法を途中で消すという、本能とは異なる行動を取りました」
それまでルースと同様黙っていたスロウルム将軍が、いきなり説明を始めた。
「ルークセントでは魔獣を扱うようになってから数百年、その生態の研究も行ってきた。騎獣に出来る出来ない関係なくな。その中には当然龍種も含まれる。ごく一部の龍種は精霊魔法を扱うが、これを途中で消した固体は、自然界ではこれまで観測されたことがない」

「……」

そういえば、あの時衛兵から将軍まで皆驚いていたっけ。

「そして……グリフォンも含まれるんだが、一部の魔獣にとっては名前とは非常に重要なものらしい。ちょっとした気まぐれで言うことを聞いてくれることはあっても、魔獣が心の底から認めるのは――本当に従うのは、その一生で名付けた者ただ一人だけだ。ソリソカルも私が名付け、私にのみ従っている」

ということは要するに。

「ふん、魔獣に心だと？　もっと徹底的に調教してやればいいのだあんなケダ――」

「口を閉じなさい、コーヴィン」

コーヴィンとエンバリィうるさい。

王女は軽く息を吐き、言った。

「憲兵隊とグリフォン部隊の報告を合わせると、その子と接触をしたのはソーベルズ様とルース様だけのようです。――単刀直入に窺わせて頂きます。どちらが初めに名前をお呼びになったのですか？」

俺は王女から視線を外すことが出来なかったが、ルースだけでなくイクシスまで俺を凝視しているのは雰囲気でわかった。

「……わ、私です」

蚊の鳴くような声で俺が答えるのを見て、今度こそ王女は大きくため息をついた。

「つまり、『龍の卵』から孵ったドラゴン――『イクシス』は未来永劫ソーベルズ様にしか従わない、ということです」

王女の台詞というよりも、状況に対して開いた口が塞がらなかった。

一生追われる身となってもイクシスを連れて逃げよう、なんて決意を固める前から、ネコババしたも同然だったんじゃないか。

知らなかった上に成り行き任せだったとは言え、自分の意思とは無関係に悪いことをしたかと思うと、わかっていて悪いことをしたのよりも、何故か心の負担が大きい。

賠償だとか刑罰だとか、償う為には何をすればいいのか。

問答無用で投獄されないだけマシかもしれないが、不安はどんどん大きくなってくる。

俺は王女の前にいることも忘れて、頭を抱えた。

スロウルムが生真面目な表情でさらに追い討ちをかけて来る。

「魔獣師団の中でも、グリフォンやワイバーン等の繁殖に成功したものは、幼獣の頃に名付けられる。生まれたばかり、孵ったばかりの方が名付けの成功率は上がるのだ。名付けた者は、乗り手として親として、一生の面倒を見る義務が生じ、故に、自らが名付けた魔獣が生きている間、退役することは出来ない」

こ、これは暗に、俺にルークセント軍に入れって言ってるのか!?

ユミル学院に辿り着くことも出来ずに、どのぐらいの戦力になるのかわからないイクシスの世話をしつつ、有事に備えて訓練を続ける。兵士になる覚悟はあったが、魔獣乗りとして外国の軍に入るなんて。年をとった自分が、フードにイクシスを入れて、杖を突き突き戦列に参加する……。

そこまで想像して、慌てて頭を振って打ち消した。

「スロウルム将軍、止めて下さい。ソーベルズ様が怯えになってしまったではないですか」

王女の言葉に顔を上げれば、面白がるように口の端を上げたスロウルムの顔があった。さすがにイラっとしてしまう。

俺の感情を正確に読んだらしい王女が、早口で言った。

「罰や義務を一方的に押し付けることは絶対にありませんので、そ

ういった心配はなさらないで下さい。私達も、突然の事で、決めかねているのです。盗難にあった『龍の卵』を届けて頂いたお礼もしなければなりませんし。ソーベルズ様、国賓として正式にルークセント王国が貴方方のご安全を保障致します。ですから――」

王女はそこで言葉を切り、上目遣いで俺を見た。

これまで実年齢以上に大人びて見えた王女の顔が、途端にあどけなくも可愛くなる。

「少々の間、この宮殿に留まっては頂けませんか？」

「……は、はぁ」

色々ありすぎて疲れていた俺に出来る事と言えば、生返事をすることぐらいだった。

## １２．英雄と名前（後書き）

１０月１３日初稿。
説明まとめようとしたら時間がかかってしまいました。

ＷＥＢ拍手を設置してみました。
手軽に押して頂けたら幸いです。

## 13．バタバタのち朝食

「では、お部屋をご用意させて頂きますね。……改めて、私個人からお礼を申し上げます。『龍の卵』を、父の形見を取り返して頂き、本当にありがとうございました」

深々と頭を下げた王女――いや、この時だけはリィフという少女――の言葉で、場はお開きになった。

エンバリィとコーヴィンはさっさと部屋を辞し、俺達は将軍が呼び出したサラに部屋まで案内される形になった。

サラは鎧姿に剣を下げた、王宮に入った時の格好のままだ。蝋燭を持った彼女の後ろを、何も考えず付いて行く。

「ぐぁ……」

半分以上寝ているイクシスが小さく呻ったのを見て、ルースは微笑んだ。

「イクシスがそれほど重要だったとは、な。不思議な雰囲気ではあると思っていたが」

俺は前を歩く女騎士の背中に語りかけた。

「サラは知ってたのか？　コイツが『龍の卵』から孵ったドラゴンの可能性があるって」

「当たり前だ。私達三人は直接王女殿下からご命令を賜ったんだぞ」

胸を張るサラ。最初から押し上げられている胸当てが軋むようだ。

「ルークセント王家に『龍の卵』が伝わってるってのは――？」

「貴族から平民まで、子供の頃に聞く話だ。一年前に盗まれた時は国中が大騒ぎだった」

サラの口ぶりからすると、『龍の卵』という国宝の存在も、それがどこかへ行ってしまったことも、ルークセント全体が知っていたということか。

それなら、盗賊団の情報網で、『龍の卵』があの森の中のアジト

にあることを、知っている者がいた可能性が増える。

少なくとも道での襲撃は、イクシスが目的だった。

それが意味するところとは――。

駄目だ、酒と疲れで頭が回らない。

サラが足を止め、こちらを振り返った。

「ここだ。客室と従者用の小部屋が続いている。風呂とトイレも簡単な物があるから、好きに使ってもらって構わない。何か入用があれば、手近にいる兵士か女官に頼むんだな」

「風呂もあるのか！　ありがたい！」

ルースが抱きつかんばかりの勢いでサラに詰め寄った。

驚いた様子のサラが、あくまで説明口調を崩さず、返した。

「湯を用意してもらうのは時間がかかるぞ」

「問題ない。＜火炎の球＞で沸かす」

ルースはさっさと部屋に入っていった。すでに上着のボタンを外しているところを見ると、よほど入浴したかったのだろう。

「あー、色々とご迷惑をかけたようで……」

「お前達は国賓扱いなんだから、これぐらい当たり前だ。言っておくけど、夜の間はウロウロするなよ」

「りょーかい。おやすみ、サラ」

サラは返事の代わりに、おざなりな敬礼をして去っていった。仕事でやっているだけだってことか。その背中を見送ってから部屋に入る。

用意された部屋は広く、調度品も豪華な物が多かった。天蓋付きの大きなベッドなんて久しぶりだ。暖炉には小さな火がおこされ暖かく、揺り椅子や寝椅子等くつろぐ為の家具まである。寝る為だけのベッドしかない国営の宿とは大違いだ。

廊下側にあるドアとは別に、奥にもドアが二つあった。

片方が従者用の部屋へと続き、もう片方が風呂とトイレがある小部屋のものだ。
上着とブーツを脱ぎ捨てたルースが、風呂場から顔を覗かせた。
「沸いたぞッ。僕が先に入ってもいいか！？」
「ああ。その代わりと言っちゃあ何だけど、俺にこっちの部屋使わせてくれ。寝心地のいいベッドが恋しい」
「わかった！」
部屋の片隅に置かれた荷物に向かうルースを見て、俺は驚いた。
シャツの肩部分にベルトが回っていて、脇の下に、鞘に収められた例の短刀が下がっていたからだ。上着とシャツの間に隠していたと見られても仕方がない諸行である。
「おま……、ソレ持って王族と食事してたのか……」
思わず呟いた俺の台詞に、ルースは上の空で答えた。
「戦士として当然の嗜みだ。僕には宮殿がどの程度安全かわからない。ここに来てすぐのこともあったしな。最低限の武器は持っているべきだと判断したんだ。現に、王女との会話で不穏な空気になりかけただろう？」
俺は脱力してしまい、ベッドに腰を落とした。
「よくバレなかったなぁ。それ見つかっただけで、牢屋行きってこともありえるぞ」
「バレなかったし、まぁいいじゃないか。それより風呂だ」
着替えを取り出したルースは、完全に風呂に意識がいっているらしい。
元気だったらもう少し小言を言いたいところだが、それすら面倒だった。
「俺は、風呂はいいや。もう寝る。おやすみ」
「そうか。おやすみ、カインド、イクシス」
風呂場に消えたルースを見送った俺は、首に巻きついたイクシスをどかし、ルークセント側に用意された上等な服を脱いだ。

普段の服装に着替えただけで、開放感が訪れる。
「まぁ、執行猶予とはいえ、いきなり取り上げられるようなことがなくて、良かったか」
仰向けになって口を開けたり閉めたりしているイクシスを見ながら、俺は呟いた。
問題解決は先送りになっているだけだとしても、その分何とかなるよう努力することは出来る筈だ。
「ぐー……」
イクシスは完全に眠っているので、ベストを枕元に広げ、フードに突っ込んだ。小さなドラゴンは、丸まって心地良さそうな鳴き声を上げたので、満足しているんだろう。
「おやすみ、イクシス」
「……ぐむぁ……」
俺もベッドに入って、目を閉じた。
疲れていたからか、久しぶりに飲んだ酒のせいか、上等なベッドのおかげか、考え事をする暇もなく、意識が沈んでいった。

気が付けば、夢を見ていた。
日が昇る前ルースに起こされたところから始まる、一日をもう一度追体験するような夢だ。
ガリガリと一緒に宿屋の主人の部屋に向かう。ヘルハウンドを何とか凌いで、部屋の中へ。部屋に潜んでいた敵に襲われるも、イクシスのおかげで攻撃は防がれる。そして、彼はガリガリの白魔術で拘束される。
その時にはあまり気にも留めていなかった顔の造作まで、ありありと再現された。
赤毛の髪は綺麗に整えられ、無精髭もない。三十代ぐらいの太っても痩せてもいない平凡な顔。その中で目だけがギラギラと殺意に染まっている。

俺は、襲撃者の額へ、魔銃で＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を撃ち込む。
驚いたような顔で首筋を伸ばす、襲撃者。額には、真っ黒で小さな穴。時間が止まったかのようにそのまま凍りつく表情。彼の目は、光を失ってもなお、俺を見据えている。

何故か、何度もこの場面が繰り返された。
俺は数え切れないほど＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を彼の額へ撃ち込んだ。
その時には、大した葛藤はなかった筈だ。
そもそも自分は薄情な人間だ。命を狙ってくるような相手に、手心を加える慈悲なんて持ち合わせていない。進んで手を汚そうとも思わないが、必要ならば踏み出すことなんて簡単だ。しかも、その時襲撃者を倒すことが出来たのは俺だけだったのだから、迷うことなんてない。

そう、思っていた筈なのに。

他にも様々なことがあった一日の中で、ヒトの命を奪ったことが、最も焼きついてしまっている。
ヒトの人生を奪ったことはあっても、ヒトの命を奪ったことはなかったからか、自分で考えている以上に、俺の心には大きな負担だったのだ。

ようやく場面が進んだと思ったら、いつの間にか子供の頃の思い出の中にいた。
実家の広すぎる庭を抜け、街に通じる裏路地を走っていた。
常に前を走る少年。
こちらを振り返るその顔が、逆光ではっきりとは見えない。
俺は、彼に置いて行かれない様、必死に足を動かしながら、声を上げようとした。

「――――――っ！！」

声を上げようにも、喉が塞がったように出せない、その感覚で目が覚めた。

嫌な夢を見た所為で荒い呼吸のまま、顔を動かすと、枕元のイクシスが俺の顔を覗き込んでいる。

「ぐあー？」

その顔を見て、ようやく全身の力が抜けた。

天蓋から下がったレース、そして部屋の窓にかかったカーテンの向こうから、日の光が差し込んでいた。もう朝らしい。このところルースに起こされる日々が続いた為か、疲れた上で早めに寝たからか、俺にしてはかなりの早起きだ。

イクシスの頭を撫でながら、上半身を起こす。

気分は良くなくても、体の方は十分な休息を取れたらしい。伸びをすると、色々なところからポキポキ音がした。左腕の動きにも問題はないことに気付いた。腕を回して違和感がないことも確認。

さて、いつまでも罪悪感に浸っている訳にはいかない。

早く目が覚めたのなら、することは一つだ。

俺は、イクシスがフードに入ったままのベストを羽織り、静かにベッドから降りる。

「……しぃー……」

何事かと顔を寄せてくるイクシスに、人差し指を唇に当て、音を立てるなのジェスチャーをしつつ、ドアの一つへ近付いた。

このドアの向こうは、従者用の小部屋である。

昨日の朝はともかく、その前は二日続けて腹を殴られ、跳ね起きた。思い出すだけで、鳩尾がじんわり痛くなってくる。それぐらい体に残っているのだ。

これは復讐せねばなるまい。
あれほどの戦士に同じことは出来ないにしても、驚かすぐらいは俺にもやれる――かも知れない。
音を立てないように深呼吸を一度して、ドアノブをそっと握る。
頭の中で数字を数えると。
「朝だぞ――ッ！　起きろルース！！」
蹴破らんばかりの勢いで、バターンと大きな音をさせつつ、ドアを開けた。

「……」
そのままの体勢で、俺は固まった。
イクシスも固まった。

ルースはすでに起きていた。だが、問題はそこではない。
驚いた顔でこちらを見ていることから、少なくとも俺の目論見は成功したといえる。
ルースは着替えの途中だったのか、全裸だった。一気に全部脱ぐのはどうかとは思うが、それも些末なことだ。
俺より細いのに、むしろ野生的なしなやかさを感じさせる、すらりと長い手足。
やけにくびれた細い腰。
所々薄い傷跡がありながらそれがアクセントにしかなっていない、産毛一つ見当たらない肌。
差し込む朝日を浴びて輝くシルバーブロンドの髪。

そして、ささやかな膨らみを持った胸と、ふんわりと丸い尻、三角形の隙間が存在する足の付け根。

もっと筋肉質なら、その膨らみも盛り上がった筋肉だと思い込むことが出来たかもしれないが、男の目を捕らえて離さない、その美

しいラインが意味するところと言えば、一つしかない。

ルースは女だ。

「――――ッキャアアアアアアアァァァァァアアアアッ！？」

叫んだのは俺だった。

俺は叫びながら、開けた時と同じぐらいの勢いでドアを閉め、部屋の端まで後ずさった。

壁を背にして、ズルズルと座り込んだ。今になって腰が抜けたようだ。

起きた時よりも荒い呼吸を必死になって抑え付ける。

「ぐぁ？」

肩に前足を乗せて覗き込んで来るイクシスには、何故俺が混乱しているのか理解出来ないらしい。

別種族の性差なんて、大した関心事じゃないってことか。

しかし、俺には青天の霹靂だった。

女――オンナ――女性……。

頭を抱えて逃避に入ろうとした、その時、廊下側のドアが開いた。

「――何かありましたか！？」

衛兵が二人、室内に踏み込んで来る。その表情は真剣だ。ピカピカの鎧に装飾過多な槍。

昨日取り囲まれた苦い思い出が蘇る。

部屋の片隅に座った俺に、槍を突き付けようとした衛兵達は、すんでのところでそれを思い留まったようだ。おずおずと尋ねて来る。

「あ、あの……どうか致しましたか？」

俺は我に返った。

「――ああ、すみません。とても怖い夢を見たようです。思わず大

声で叫んでしまった……」
陳腐な言い訳だが、嫌な夢は見ていたことだし、厳密には嘘は言っていない。立ち上がって、気まずさを誤魔化す様に、ズボンの埃を払う仕草をした。
「はぁ～、や、お騒がせを致しました。本当に申し訳ありません」
「あ、はぁ……」
衛兵二人は納得いかないといった顔をして、部屋から出て行った。

やり過ごせたと思って、視線を動かすと、小部屋へと続くドアからルースがこちらを窺っていた。
「……」
「……」
二人揃って、無言で見詰め合ってしまう。
「ぐあー」
イクシスがルースに向かって朝の挨拶をした。
彼――いや、彼女は俺のすぐ前まで歩み寄って来て、真剣な表情で口を開いた。

「い、色々と言いたい事はあるだろうけれど……、カインド、察してくれっ！」
「察せるわけがねぇだろ、ボケェ――――――ッ！！」
思わず大声で突っ込んでしまう俺。ルースは珍しく眉を寄せ、困った表情だった。
「そ、そこを何とかっ」
「察せって何だよッ！？　そこは説明するか、シラを切るか、普通二つに一つじゃね？」
「じゃ、じゃ、じゃあシラを切るっ！」
「じゃあって何だよ、じゃあってッ！？　そこまで言っておいて、なかったことにはならねぇだろうが――――ッ！！」
「そ、そこまで言うなら、こっちにだってあるんだぞッ！　いきな

り部屋に入ってくるなんて、貴族として、いや、男としてどうなんだ!?　あまりにも無礼じゃないか!!」
「お、驚かそうと思っただけだよ!　こっちの方がもっと驚かされちまったけどな!!」
「グァーッ!!」
イクシスまで加えて、ギャーギャー言っていると、控えめなノックの音がした。

「「何だッ!?」」
勢い余って、二人揃って叫んでしまう。

衛兵が出て行った時のまま、少し開いていたドアから顔を覗かせた女官が、ビクっと顔を引きつらせて固まった。
「あ、あの……ッ。お、お食事をお持ち致しましたので……」
女官の中でも年齢の低い、まだ十代前半らしい少女だ。王宮での仕事に慣れようと必死に頑張っている時期だろう。
健気に働く少女を怒鳴りつけてしまった。
俺は、落ち着いた声色を用意して、穏やかに謝った。
「……ごめんなさい、気が立っていて。従者の分も含めて、ここに運んでくれますか?」
「は、はいっ」
半泣きの少女は、食事を載せたサービスワゴンを運び入れ、テーブルの上に食事を用意する。若干手つきが危なっかしいが、真剣な態度は好ましかった。
「僕からもお詫びを言わないとな。怒鳴ったりして、本当にすまなかった」
「いっ、いいえッ!!　わ、わ、わたくし等に頭を下げられては――ッ!!」
しっかりと頭を下げるルースに、少女の顔は一気に真っ赤になった。俺の時と反応が全然違う。

しかし、ルースの性別を知ってしまうと、この美しい顔立ちも紳士的な立ち振る舞いも、何だか罪作りなものに見えてしまうから不思議だ。

「そ、そ、それでは、ごゆっくりとお食事をお召し上がり下さい！」

若い女官は深々とお辞儀をして、赤い顔のまま部屋から出て行った。

何となく勢いが削がれた俺は、ルースを見やって、息をついた。

「とりあえずメシにするか。腹も減ってるし」

「……むぅ。それもそうだな」

向かい合って席に着き、食事を始める。

用意された朝食は、昨日の夕食に比べるとそこまで豪勢な物ではなかったが、それでも品目は多く、やけに上品な味付けだった。何より食器がピカピカと眩しい。

イクシス用らしく、何かの生肉と牛乳が別の皿に分けられ、中央に置かれていた。当然テーブルの真ん中でイクシスが食事することになる。

料理は俺の舌に合ったし、昨夜は酒を優先させていたのでやや空腹だった。

それでも心から食事を楽しむ気になれなかったのは、ついさっきの出来事の所為だ。

パンを千切る仕草に紛れさせて、ルースの顔を覗き見ていたら、当の本人が静かに言った。

「……何だ」

「あ、その、美人だなーって」

不意打ちに、考えていたことが無意識に口から出てしまった。

「はぁっ！？」

まるで空から槍が降ってきた、とでも聞いた様な顔で、ルースが声を上げた。

「あ、いや、会った時から綺麗な顔だとは思ってたんだけど、女性だと知ってから見ると、普通に美人さんなんだな……、と」
焦った俺は、普段なら例え女性相手でも言わない様なことを捲くし立てていた。
そんな自分に気が付いて、途端に恥ずかしくなる。
訝しげな顔をしていても、ルースの顔立ちは整い過ぎていた。
「そこはなかったことにして触れない様にするんじゃないのか、普通は」
「尤もだ」
皮肉交じりに返されて、俺はそう言うしかなかった。

食事が終わり、自分達で淹れた紅茶を飲み始めた頃、ルースがポツリと呟いた。
「説明はしたくない。事情もあるし、個人的な感情に基づくものでもある。出来れば今まで通り、男として扱って欲しいんだ」
ルースの口調には、説明を拒否する拒絶と、ほんの少し匂わせる程度の妥協と、友人への懇願が微妙に入り混じっている様に感じられた。
これだけの容姿なら、使い方を少し考えるだけで、幾らでも成功出来るだろう。どこか抜けている気がするものの、頭だって悪いとは思えない。豊満な女性が好きなヤツだと物足りないかもしれないスタイルだって、男の好みを変えてしまうぐらいの魅力を持っていた。
髪を伸ばしドレスを着て微笑めば、王族に嫁ぐ事だって出来るかもしれない。何も大剣を振るって旅をする必要などない。

初めて、ルースの生い立ちに興味を持った。

しかし俺は、何度か命を助けてくれた恩人の頼みを断るほど、恩知らずではないのだ。

「わかった。今まで通りな」
「グァー！」
「恩に着る。ありがとう」
俺とイクシスの返事を聞いて、ルースは頭を下げた。

「――ところでイクシス、こっちに来い。口が汚れているじゃないか」
垣間見せた神妙な様子はどこへやら、謎の女戦士は素早くテーブルからイクシスを抱き上げ、その口を布で拭き始めた。
「ぐむぁ～っ！！」
暴れるイクシスを宥めながら、何とか抱き止めようとするルースを見て、気付いた。
一般にご婦人は愛らしい小動物が好きだし、例え相手が嫌がっても構おうとする。
ルースもその辺の嗜好は女性なんだ。
「こら、暴れるな！　拭くだけなんだから！」
「ぐむむッ！　ぐ、むが～っ！！」

小さな納得でどこか満足した俺は、じゃれ合う一人と一匹を眺めながら紅茶を啜った。

## １３．バタバタのち朝食（後書き）

１０月２０日初稿

## １４．王都の騒ぎ

イクシスの我慢が限界に達したと判断した俺が、小さなドラゴンを保護してやったその時、ドアが音高く鳴った。
「はい」
先程の反省を活かし、穏やかな声で返事をする。
入ってきたのは鎧姿のサラと、朝食を運んでくれた若い女官だった。
「おはよう」
「ああ。この娘が入りづらそうにしていたぞ。お前達、何かしたのか？」
俺達の挨拶に、サラはキツイ視線を返して来た。
彼女の背に隠れていた女官が、慌てた様子でお辞儀をして、朝食の片付けを始める。
「怖い夢を見たんでね、寝起きが悪かったんだ。さっきちゃんと謝ったぞ」
サラに向かって何度も頷いてみせる女官。
「ふん、私には謝ってない癖に……」
「あ、そう言えばそうだった。胸とか掴んでゴメンなさい」
「わざわざ思い出させるな！」
「――ッ！」
俺の台詞に引いたのか、新人女官は焦った様子で片付けを済ませ、そそくさとお辞儀をして部屋を出て行った。
サラをからかう代償とは言え、少々高くついた気がする。

当の女騎士は、俺の評判等知ったことではないのか、本のページを捲るように話題を変えた。
「街に――王都クルミアに行くつもりはあるか？」
「ああ、ぜひ行ってみたい。昨日はグリフォンで空から見ただけだ

ったからな」

「王宮に閉じ込められても窮屈で気が滅入るだろう、という王女殿下のご配慮だ。確か補充が必要だと言っていただろう、王都で済ませてしまえばいい。流石にお前達だけで宮殿を出るのを認めるわけにはいかないから、私が同行することになるがな」

有難く王女の配慮に乗らせてもらうことにして、俺達は王宮を出た。

俺もルースも普段通りの軽鎧にマント、イクシスは俺のベストについたフードの中だ。

サラは出会ったときと同じ全身鎧を着込み、腰には剣が下がっている。

重厚な門を潜り、堀にかかった橋を超えると、緩やかな下り坂が王都の中ほどまで続く。王宮自体が小高い丘の上に建っていることになる。

手前の方は高い建物が余裕を持って配置され、その向こうに比較的小さな建物が乱立している。

王宮の玄関から続くこの道が、そのまま南の大通りになるようだ。やや高い位置からの王都の街並みや活気は、素晴らしかった。何も空から見なくても、俺にはここからの眺めで十分だった。

緊急事態には外すことが出来る跳ね橋を超えれば、そこからが都の本番である。

「流石に人が多いな……」

ルースが感嘆しつつ呟いた。

石畳で舗装された大通りは、馬車が七、八台が横一列になっても平気な幅がある。とは言え実際にゆっくりと進む馬車は、行きと帰りで二台ずつで四台と、半分ほどしか使っていない。

それ以外はヒトの群が占領している。

種族も様々だ。
人間以外だと、やはりエルフやホビットが目立つ。エルフには浮世離れした雰囲気があるし、ホビットは子供かと思うと顔がおっさんだったりする意外性があるのだ。彼らを見ると、兵士か冒険者風の装いの者が多いが、街娘の服で忙しそうに走るエルフともすれ違った。
隊長が言っていた様に、一目で獣人とわかる者はほとんどいない。良く見ると耳が尖っていたり、少々毛深い手をしている御仁がいるかな、というぐらいだ。
サラのような先祖返りは相当珍しいのだろう、その整った容姿と獣耳が相まってかなり目立つ。
まぁ、獣耳がなくても異常に視線を集めるルースと、ベストのフードに小さなドラゴンを入れた俺が一緒なので、目立っているのは彼女だけではないんだけど。

先頭をズンズンと歩いて行くサラを追いかけて、大通りを進む。
大きな料理屋、服飾店、武具屋。やはり王都の中央に近い店は繁盛している大手らしい。
いくつか覗いてみたい所があったのに、サラは歩調を緩めることなく、どんどん行ってしまう。ヒトが多いので、見失ったら大変だ。ルースはともかく、俺は少し早歩きで付いて行った。
気付けば結構な距離を歩いていた。丘の上にある筈の王宮はもう見えない。

「ここが魔道具の専門店だ。品揃えで言えばルークセント一番だろう」
サラが足を止めたのは、大通りから一つ角を曲がって数分歩いた先にあった店の前だった。
ガラス張りの正面に、やや大型の魔銃が数丁、綺麗に並んでいる。子供たちがガラスに顔をくっつける様にして並ぶ光景が微笑まし

い。
　店内に入れば、魔銃本体に各種魔弾が整然と陳列されていて、武器というより美術品の様相だ。
「おおー……」
「ぐぁー……」
　ルースやイクシスは物珍しそうに見ているが、ラチハークでこういった店に慣れている俺としては、むしろ懐かしささえ感じてしまう。尤も、俺が通っていた魔道具屋はもっと乱雑でどこに何があるかは掘ってみなきゃわからないような所だった。
　とりあえず昨日までに減った分、＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞が込められた魔弾は買うとして。
　実戦での経験から、もう少し選択肢を広げたいと思っていたのだ。
　値段が三倍ほどの＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞を六発。とは言え、俺の持つ魔銃で撃てるサイズだと、威力はそこまでではない。ほとんど気休めである。
　もっと大型の魔銃なら、もう少しランクの高い魔法や、より魔力を込めて威力の強い魔弾を撃てたりするのだが、流石に旅の途中で買えるような値段ではない。
　魔銃は威力を求めると、大きさと値段が加速度的に増えていくのだ。

「ルース、あんまり何でも触るな」
　手当たり次第に手に取るルースに、俺は声をかけた。
「ふわっ！？」
　驚いたルースが、ちょうど眺めていた魔法爆雷を落としかけるのを、彼女の手ごと押さえ付け、何とか阻止する。
「――っと！　危ねぇなぁ。こんな所で爆発させてみろ、誘爆して店だけじゃ済まない規模になる。悪い意味で王都の歴史に名前が残るぞ」
「そっ、そうなのか」

食事抜きで一泊の宿泊代にはなる魔法爆雷を二つ。こちらも威力的には、ルースの放つ＜舞い散る毬栗（バモベクナッド）＞よりもランクの低い＜弾け（ベモベ）る傘（ツツル）＞程度の物だ。陽動になら使えるかもしれない、ぐらいの保険である。

「いらっしゃいませー。魔法爆雷が二つに、３８口径＜打ち抜く煉瓦（ウォールド・テルーブ）＞弾が六発、３８口径＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞弾が――」

金額は全部で、金貨一枚――銀貨十枚ほどになった。

覚悟はしていても、結構高い。

俺が財布を探っていると、サラが横から口を出してくる。

「ルークセント軍グリフォン部隊宛で請求してくれ」

店主も心得た様子で、すぐに証文を取り出し、サラにペンを渡した。

「――いいのか？」

「スロウルム隊長が保障すると言っていただろう。……というか、これは軍としてのメンツの問題だ。憲兵隊に保護されていた者が、敵との交戦で損失を負っていては、面目が立たない。出来うる限りは保障して当然だ」

証文にサインをしながら、サラは固い口調で言った。

そういうことなら遠慮せず、奢られるしかない。

買い終えた品を、すぐに装填出来るよう剣帯から下げたバッグに入れる物と、荷物にする物とに分ける。最後に＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を魔銃に装填し、ようやく弾倉が全て埋まった。

頼もしい重さを取り戻した魔銃をホルスターに戻し、俺は口を開いた。

「さて、俺の用事は済んだ。ルースは何かあるか？」

「血塗れになったブーツの代わりが欲しかったんだが。昨日部屋にあった、このブーツが貰えるなら、これで十分だ」

ルースが自分の足を持ち上げ、ぴったりとしたラインの細いブーツを示して答えた。

「もちろん自分のものにして構わない。靴屋に行って、自分で選ぶ

のも自由だ。当然軍が支払うから、料金の心配はしなくていいんだが……どうする？」

「いや、これでいい。むしろ、昨日まで履いていた物より遥かに上等で、気後れしてしまうな」

ということは、せっかく王都まで出て来たというのに、もう用事は全て片付いてしまったのか。

天気は良く、過ごしやすい気温、時間も昼前。このまま帰るのは少し勿体無い。

店を出ると途端に目的がなくなる。俺はサラに問い掛けた。

「補充を終えたらすぐ王宮に戻れ、なんて命令は受けてないよな？」

「当たり前だ。我々はお前達を軟禁している訳じゃないぞ」

顔を顰める女騎士とは対照的に、ルースは輝くような笑顔で言った。

「それならもう少し見て回ろう！　こんな大きな街は初めてなんだ！」

「ぐーあー！」

サラの反対もなかったし、俺も王都見物はしたかったので異論はない。

とは言え、王都クルミアで一番の観光名所は宮殿だ。それ以外にコレといった目玉はなく、他所にはない珍しい点は、ただただヒトが多く店が乱立していることぐらい。

俺も最初ははしゃいで色々と覗いていたが、数軒も店を冷やかした頃には、ここまでヒトがいるかという大通りの混雑ぶりに、かなり疲れてしまった。

「カインド、君も食べるか？」

未だ元気が有り余っている様子のルースが、どこからか買ってきたのか、パンに野菜や揚げた肉を挟んだ軽食を差し出して来た。

「どうせなら、どこかで腰を落ち着けて食事にしたいね」

俺はそう言ってから、パンを一口分千切って、イクシスの口に入れる。

サラが軽く息をつきながら言った。

「同感だ。私の知っている店で良ければ、そこに行こう」

いつの間にか、南の大通りも中ほどまで来ていた。この辺りまで来ると、こじんまりとした店が増えてくる。人数もだいぶ落ち着き、ゆったりと歩くことが出来る。

サラが入っていったのは、そんな場所にある料理屋だった。

それほど広い訳でもなく、八人ほど座れるカウンターに、テーブルが五つほど。椅子はほぼ埋まり、結構な混雑をしている。

サラが店内に入った途端、何人かの客が驚いた表情を浮かべ、彼女に声をかけた。顔馴染みらしい。

普段よりほんの少し柔らかい口調で挨拶するサラを追い掛けて、奥に空いていた小さなテーブルにつくことが出来た。それぞれ剣をテーブルに立てかけ、質素なデザインの椅子に腰を下ろす。

すぐに、店主と思しき年配の男性が、水を入れたグラスを持って来る。

テーブルに座ったイクシスをちらりと見たが、特に驚いたり騒いだりはしなかった。やはり魔獣持ちが良く訪れるので、珍しい光景じゃないんだろう。

「男連れとは初めてじゃないかね、サラ嬢。それもこんな美形とは……今週はこの話題で持ち切りになるよ」

「任務上のことです。私的なものじゃありません。とりあえずピザを三人前。あとメニューを下さい」

笑いをかみ殺すような男性の物言いに、サラは冷静な口調で返した。取り付く島がないとはこのことだ。

それでも店主は人の良い笑みを浮かべ、カウンターの向こうへと去った。

「なかなか人気者じゃないか、サラ」

「珍しがられてるだけだ。狼獣人でグリフォンライダーだからな」
どうでもよさげな口調でサラが言った。

俺の隣に座ったルースが呟く。
「ああ、そうか――『咎食』ベクター・ウルフ・サイフォン……」
ベクター・サイフォンは狼獣人にして、最初のグリフォンライダーと言われている英雄だ。彼もまた二百年ほど前の人物で、アレイド・アークより少し下の世代になる。アレイドや彼の四人の弟子達よりは知名度が低いが、魔獣に乗る者からは多大なる尊敬を集める、シブめの英雄と言える。当然、魔獣騎兵国家たるルークセントでは人気がある筈だ。
狼獣人かつグリフォンライダーであるサラは、何かと彼を引き合いに出されることも多いだろう。
「まさか苗字がサイフォンとか言うんじゃないよな？」
少し意地悪な俺の質問に、サラは大きくため息をついた。
「それももう何十回と言われてる。私の名前はサラ・ゴーシュだし、『咎食』ベクターとの血縁関係は一切ない」

そんな話をしていると、二十歳くらいの女給が熱そうなピザを抱えて来た。何故か凄い笑顔だ。
「サラ、久しぶり。厨房は彼氏連れだって大騒ぎよ～。今度紹介してね！」
その台詞に、サラは頭を抱えた。
「だから任務中だと言ってるのに……」
このまま泳がすのも面白いとは思うが、サラに全部任せるのは少し可愛そうなので、俺は助け舟を出した。
「我々はラチハークからの旅行者です。今回縁があって、サラさんに命を救われまして。そのまま護衛をしてもらっているようなものなんですよ」
「ぐあー」

「まぁ、そうなんですか。あらあら、可愛らしい子ですね～」
女給はイクシスにも笑顔を向けた。ピザをテーブルに並べ終えた彼女は、一頻り頷き、ルースに顔を寄せて口を開いた。
「この際、どうです？　この娘引っ掛けて、お国にお持ち帰っちゃうっていうのは」
「？」
「エイミィ！！」
ルースがきょとんとした顔で止まり、サラは三角の耳をピンと尖らせて怒鳴った。
「では、ごゆっくり～」
最後にサラにメニューを渡すと、女給は満足した笑顔を見せて、自分の仕事に戻っていった。何となく、あの女給とサラとの、普段の関係がわかった様な気がする。からかう側とからかわれる側がはっきり分かれているタイプの友人関係だ。
サラは頭を抱えたまま、顔を伏せ、せっかくの温かい料理に目もくれず、呻っている。
そして、店内の客の大半は、そんな女騎士を慈しむ目で見守っていた。加えて、極一部の客はもう少し強い、嫉妬交じりの視線をルースに送っていたりする。
ルースが俺の袖を引いた。
「なぁ、何であの娘は、君じゃなくて僕にあんなことを言ったんだ？」
「お前の方が、サラに釣り合うと思ったんだろ」
「う～ん、確かにカインドじゃあ、サラを抱え上げることは出来ないだろうけど……」
まだ良く理解していないらしいが、一から説明するのは面倒だ。
俺はルースの勘違いは放っておくことにして、ピザを食べ始めた。シンプルながら熱々で、味付けも好みだった。王宮ではスープでもお茶でも熱すぎるような料理は出て来ないので、これぐらいの温

度が恋しかったのだ。
「ぐふぁっ、ぐぁっぐぁっ」
イクシスと一緒になってハフハフ言いながら、ピザを片付けていく。
「いい加減、回復しろよ、サラ。ピザが冷めるぞ」
「言われなくてもわかってるわよっ！」
俺の言葉に、サラは顔を上げた。完全に赤面している。
「からかわれるのも、好かれてる証拠だって」
「フンッ、適当な慰めなんかいらない」
サラは怒涛の勢いでピザを口に詰め込んだ。

その後は追加注文をしても、特に何か言われることもなく、俺達三人と一匹はゆっくりと食事を堪能することが出来た。
全員で七人分ぐらいは平らげ、テーブルには皿が高く積まれたぐらいだ。

そろそろ出ようかという話になり、俺が少し重くなったイクシスをフードに納めた頃、店の入り口が乱暴に開いた。
入ってきたのは、騎士が二人、従者らしき者が三人だった。先頭の男は、豪奢な鎧に身を包み、その上に非常に高級そうなマントを羽織っている。騎士は二人とも細剣を腰に下げ、従者は身長と同じくらいの槍を持っていた。
「――！」
彼らの顔を見たサラの表情が苦いものに変わった。
「出よう」
小さく呟いたサラが剣を帯び、席を立った。
その態度に引っかかるものを感じつつも、俺とルースは急いで後を追いかける。
その時、店の中ほどまで進んでいた騎士が、大きな声で言った。
「何だ、臭うかと思えば、グリフォン部隊の紅一点ではないか」

雑然としていた店内が、彼の言葉に静まり返った。

サラの足が止まり、ゆっくりと騎士に顔を向ける。彼女は礼儀を欠かない範囲で最低限の敬礼をした。俺に向けるよりも遥かに冷め切った視線を彼に送りながら、言った。

「お久しぶりです。コーヴィン大佐」

「魔獣師団は暇そうでいいな、ゴーシュ。いやぁ、男連れで食事とは恐れ入った」

嫌味たっぷりの台詞を言いつつ、コーヴィン大佐と呼ばれた騎士が歩み寄って来る。

店内から非難のざわめきが起こるが、取り巻きの従者の一睨みで静まってしまった。

コーヴィンということは、あのコーヴィン将軍の血縁者なのだろう。厳つい顔立ちと高圧的な表情は、どこか似ている。よく見れば、耳がわずかに尖っていた。それでも、やはりエルフらしさは耳以外見受けられない。

彼は、もう一人の騎士と一緒に、いやらしい笑みを浮かべながら、サラを舐める様に見下す。

「やはりあれか。グリフォンと共に生活していると、飼い主も節操がなくなるのか？」

サラの硬そうな茶髪がざわりと逆立った。

コーヴィン大佐は気にした様子もなく続ける。

「それとも獣人には元々節操なんてものはなかったかな？」

「ちょっとアンタいい加減に――」

つい先程楽しそうにサラと会話をしていた女給が、そこまで言って言葉を詰まらせた。従者の一人が槍を彼女に突き付けたのだ。

コーヴィン大佐のあまりの態度についていけなかった俺は、そこでようやく思い至った。

――あ、この展開は、マズイ。

突然、ボキリ、と奇妙な音がした。

女給に突き付けられた槍の柄を、ルースが拳で叩き折ったのだ。

俺の後ろにいた筈の男装の剣士は、いつの間にか、店の中ほどにいる女給のすぐ前で従者を見据えている。

ああ、やっぱり。ルースの行動原理は、まだいまいち把握出来ていないが、この場面は見過ごすわけにはいかないらしい。

「きっ、貴様、邪魔だてする気か！？」

槍を折られた従者が叫ぶうちに、残った二人の従者が、今度はルースに槍を突き付けた。

「我々を誰だと――」

「知ったことかッ！！」

久しぶりに聞く気がする、ルースの大音声だった。

槍を突き付けられようとも、姿勢は正しく、声に力があった。

「ただ声を上げただけの女性を、武器で脅すような輩が誰であろうかなど、考えたくもない！　品性の欠片もない冗談で悦に入る輩も、同様だ！」

ルースの両手がかすみ、残った二本の槍も叩き折られる。

従者達は槍を構えた姿勢のままで、何も出来なかった。

「下品な飼い主共々、この場から立ち去れッ！！」

店の隅々まで響くその台詞に、次々と賛同の声が上がった。

「そうだそうだ！」

「さっさと帰れ！」

「サラさん侮辱しといてこの店で食事出来ると思うなよ！！」

それほど広くない店とはいえ、ほぼ満員だった客が全員叫べば、

一つの大きなうねりとなる。
流石に従者達も出入り口に向かって下がり始めた。

「……貴様ら……っ！」
コーヴィン大佐は顔を真っ赤にして、ルースを睨んでいた。右手が震えながらも、剣の柄を握った。
再び店内が静まり返る。
ルースの目が冷たく光った。例え今は剣に触れていなくても、コーヴィン大佐が剣を抜いた瞬間、ルースは黒い大剣で彼を斬るだろう。そう確信させる殺気が、俺にすら感じ取れた。
幾ら何でも怪我をさせてしまうのはマズイ。

俺は慌てて、口を挟んだ。
「その剣を抜いたら、お終いですよ」

「……な、何だと！」
コーヴィン大佐がびくりと体を震わせる。傍らで事態を眺めていた俺のことなど、気にも留めていなかったらしい。赤黒く、目を見開いた顔は、引くほど怖かった。
内心の怯えを隠して、あくまで冷静な態度で、俺は説得を試みる。
「今ならまだ、槍の取り扱いをしくじっただけ、という言い訳も立ちますが、剣を抜くという行為は誤魔化しようがありません。対してこちらは、未だ無手のままですから」
「……っ」
剣の柄を握るコーヴィンの右手から、力が抜けたのがわかった。
それでもまだ離すには至っていない。理屈でわかったところで感情が暴走することもある。怒った頭でもわかるように説明しなければ。
「武器も持たない相手を傷付けたところで、そちらの名誉が著しく傷付くだけ。何よりこの衆目の中です。人の口に戸は立てられませ

ん。貴方と貴方の家の名誉を賭けるだけの覚悟がおありですか？」
「……ぐ」
頭に上った血が、今度は下がってきたのか、コーヴィンの顔色が赤から青へと変わっていく。
「こんな所で抜いた剣が、もし何の関係もない国民に怪我をさせたら、目も当てられないことになってしまいます。名誉を失い、醜聞を集める可能性がある敵地に踏み込む等、とてもとても……。私だったら、戦略的撤退を考えるところですが」
俺の台詞を後押しする様に、店内の視線が騎士に集中する。
数秒の間をおいて、コーヴィン大佐が、ゆっくりと右手を下ろした。
「たっ、確かに国民を傷付けるのは私の本意ではない！　ここは引いてやろう！」
見事な捨て台詞を吐いて、彼は身を翻した。
取り巻きの騎士と従者達が、こちらを窺いながら、後を追う。
「いっ、いい気になるなよ！！」
何故か俺に向かってそう言うと、コーヴィンと取り巻き達は、傍目には堂々とした態度で、店を出て行った。

ドアが閉まるのを待っていたかのように、店内に喧騒が戻る。
客達はルースを囲んで喝采を上げた。その勇気と実力を誉めそやし、肩を叩く。ルースもまんざらではなさそうな顔でそれに答えていた。

「はぁ～～～」
俺はと言えば、特に何をしたわけでもないのにどっと疲れ、大きく息を吐いた。
手近な椅子に腰を下ろし、体の力を抜いた。
「グァー……」
俺の肩に前足を置いたイクシスが心配そうに覗き込んで来た。

イクシスの頭を撫でてやりながら、どうしてこうなったのかぼんやりと考える。

もう一つ視線を感じて顔を上げると、サラがこちらを見ていた。

今にも泣き出しそうな、それでいて嬉しさや喜びも垣間見える、複雑な表情だった。

「……な、何だってこんな……」

「俺にだってわかんねぇよ」

搾り出すようなサラの呟きに、俺は苦笑で返すしかなかった。

## １４．王都の騒ぎ（後書き）

１０月２８日初稿

また更新間隔が開いてしまいました……

もうちょっとペース上げたいです

## 15．昼下がり、正面広場

未だ興奮冷めやらぬ料理屋から出てみれば、昼を少々回ったところだった。
宮殿へ戻るのは、気が進まなかったけれど仕方がない。

「じゃあ、アイツは、コーヴィン将軍の弟だったのか……」
「なるほど、いけ好かない感じがそっくりだ」
「ぐぁー！」
相変わらず人が溢れる大通りを宮殿に向かって戻る。
俺達はコーヴィン大佐について話ながら、歩いていた。

あの後、何故か料理屋店内では酒盛りが始まり、事態の整理も、今後の対策のための情報収集も出来なかったのだ。もう少しいろ、という客達のお願いを振り切るようにして、店から出て来たくらいである。

サラが三角の耳を伏せながら、言った。
「……わかってるのアンタたち……、面倒臭い奴を敵に回しちゃったのよ！？」
さっきよりは少ないとは言え、まだ人通りは多い。サラの大声に周りにいた人々が振り返った。
ルースと俺は顔を見合わせる。
「あの場面ではああするしかなかっただろう？」
「その意見には賛同しかねるが、ああなっちゃったんだから仕方ねぇって」
ルースの正義感や義務感は置いておくとして。
俺としては、それほど悲観していなかった。
俺達は一応国賓として扱われている身の上だし、相手も立場のあ

る貴族なら、この程度の恨みでこっちの命を狙ってくるようなことはないだろう。事が大きくなれば、あの店や客にも調査が為され、コーヴィン大佐達が何をしたのかが白日の下に晒されることになる。どの様な証言がされるかは、先程の帰れコールで明らかだ。

嫌がらせぐらいはあるかもしれない。

しかし、命の危険を経験したばかりの俺には、所詮その程度のことと、いつも以上に割り切れてしまうのだ。

むしろ、何かがあった時に、ルースがどういう行動に出るのかの方が心配だったりする。

それでも一応情報だけは聞いておこうと、俺はサラに問い掛けた。

「んで、面倒臭いってのはどういうことだ？」

「コーヴィン大佐――弟のトリート・コーヴィンはただの貴族上がりのボンボンだけど、兄のリンゼス・コーヴィン将軍は実力も権力もあるんだ」

「つまり、コーヴィン将軍が厄介な訳か……。でも、イイ年して大佐にまでなってる大人が、ちょっとくらい自尊心傷付けられたからって、兄貴に言いつけたりするかぁ？」

「そういう奴だから心配してるんでしょうが。……まったく、今問題を起こす訳にはいかないってのに……」

サラが片手で顔を覆ってしまった。

それを見て、ルースが口を開いた。

「実力というか強さは大体わかるが、権力というと？」

「コーヴィン将軍は、王宮警護が任務の親衛隊を率いているし、憲兵団の団長も兼ねている。王都の兵士はほとんど彼の傘下と言っていい。魔獣師団でも発言力を伸ばしてるぐらいだ。加えてコーヴィン家は伯爵だぞ。代々軍人の家系で、軍部にも貴族たちにも顔が利く。権力的に抑えられるのは、摂政のレストファー・エンバリィ公爵ぐらいしかいない」

それは流石に、ちょっと怖いかもしれない。

「だからあんなことを言われても、我慢してたのか……」

ルースが納得したように呟いた。
「親衛隊はグリフォン部隊を敵視しているから、スロウルム隊長まで含めて隊全員が、普段から挑発されている。隊の皆が我慢しているのに、私だけ挑発に乗ることは出来ないだろう。特にトリート・コーヴィンは私が嫌いらしくてな。あんなことはしょっちゅうだ」
あれは、サラ個人が嫌いとかではなくて、女性を攻撃することに愉悦を感じているだけな気がする。恋愛感情等ではないだろうが、少なくとも弟コーヴィンはサラにいやらしい視線を向けていた。
俺は紳士なので、こんな推測はもちろん口にはしない。代わりに気になっていたことを聞いた。
「じゃあ、実力の方は？」
「トリート・コーヴィン大佐はその辺の兵士に毛が生えた様なものだが、リンゼス・コーヴィン将軍は強いぞ。私などではソリスに乗っても、勝てるかどうかわからない。魔獣に乗らなくてもイイ勝負になるのは、ルークセントでもスロウルム隊長ぐらいじゃないかな」
「そこまで強いとは思わなかった。確かに、そんな奴に目を付けられちゃあ、堪ったモンじゃないな……」
気が付けば、大通りを抜け、跳ね橋のすぐ前だった
ここまで来ると、かなりヒトが少なくなる。
ルースが爽やかな笑顔で言った。
「なに、直接的な暴力なら僕が対応出来る。心配することはないさ！」
「そこはあんまり心配してねぇよ」
「お前達は一応国賓扱いだ。正面切って攻撃を仕掛けるようなことはまずない」
「そうなのか……」
俺とサラの突っ込みを受け、途端にしょんぼりするルース。
女だとわかったことで、素直に可愛いと思うことが出来るという

ものだ。
イクシスの処遇で執行猶予の身とは言え、俺達は外国人旅行者であり、ルークセント内の権力闘争とは距離を置ける。正面切った攻撃ではない嫌がらせ等は、サラやスロウルム将軍の方が大変だろう。しかも彼らはそれとずっと付き合っていかなくてはならない。
そう考えると、かなり迷惑なことをしてしまった気がしてきた。

跳ね橋を渡り、緩やかな坂道を上った。すぐに王宮の正面広場が見えてくる。
「――ん？」
ざわめきが聞こえて来た。
広場の喧騒とはまた違う、火事場の野次馬達が上げるような、奇妙な緊張感と好奇心を伴った声だ。
サラを見ると、訝しげな顔をしていた。彼女は早足になって、俺達よりも先に城門を潜る。
「――なっ！？」
全身鎧を着込んだサラが、鋭い声をあげ、まるで壁にぶつかったかの様に立ち止まった。
後を追いかけて、俺とルースも城門を潜る。
王宮の南側、広大な正面広場には多くのヒトが溢れていた。高そうな服に身を包んだ文官らしき男達に、装備の質に差はあれど一目で兵士と見て取れる集団、さらに商人や女性が少々。本来なら昼食の時間帯で、ここまでの人数が屋外に出るようなことはない筈だ。

そんな人々の中、城門と宮殿玄関のちょうど真ん中あたりに、剣を地面に突き立てて、トリート・コーヴィン大佐が立っていた。
「何だぁ……？」
俺は思わず呟いてしまった。
「来たな、外国人」
ピカピカに磨かれた鎧に身を包み、豪奢なマントを羽織ったトリ

ート・コーヴィンは、呆けた俺に気が付いたのか、口を斜めに持ち上げる。

その後ろには、まるで保護者の様に、頼もしげな笑みを浮かべたリンゼス・コーヴィン将軍がいた。

「こ、これは一体どういう……？」

サラの台詞に答えたのは兄であるコーヴィン将軍だった。

「弟が、お前達に名誉を著しく傷付けられた、と言うのでな。決闘を申し込みに来たのだ」

本当に兄貴に言いつけやがったのか……。

俺は一気に脱力してしまい、将軍の言った台詞の後半をちゃんと把握することが出来なかった。

「思い切り直接的な手段で来たな」

むしろ感心した様子でルースが呟く。

「け、決闘……！？」

サラは鸚鵡返しで言った。彼女も相手が何を言っているのか、いまいち理解出来ていないらしい。

「弟は親衛隊に属する騎士。例え不愉快な思いをしたとしても、激情に任せて剣を抜くこと等出来ない。しかし、古来よりルークセントでは、戦士の問題を決闘で裁いてきた。決闘という死力を尽くした勝負なら、何の問題もあるまい」

俺の制止がなければ、コーヴィン大佐は激情に任せて剣を抜いていたけどな！

俺の心の叫びを代弁するかのように、サラが言った。

「そっ、そもそも私達はコーヴィン大佐の名誉を傷つけて等いません！」

コーヴィン将軍は、こっちの言い分を聞く気などないのだ。路上の石ころを見るような表情からそれがわかった。

「弟は傷付けられた、と主張しているのだ。そちらに主張があるな

ら、それこそ決闘で示せばいい。これ以上の問答は無用だ。――トリート、やれ」

「はい、兄上！！」

トリート・コーヴィンは篭手を外し、放り投げた。

俺に向かって。

「っ！？」

がらんと金属的な音をさせながら、俺の足元に落ちる篭手。

群集がどよめいた。

俺はどこかで、決闘を受けるのはルースだと思い込んでいた。

俺達の中で、大佐の言動に最初に抗ったのはルースだし、俺がしたことと言えば言葉でやり込めた程度。荒事はルースに任せて来たので、それが当たり前になっていたこともある。とは言え、まさか俺に決闘を申し込んで来るとは……。

この篭手を拾えば、決闘は成立する。

サラが一歩踏み出して叫んだ。

「彼はラチハークの人間で、しかも王女が正式に招待している国賓ですよ！」

リンゼス・コーヴィン将軍が勝ち誇った顔で言った。

「フン、体面を繕う為だけに与えられた招待なぞに何の意味がある。聞けばお前もラチハークの貴族だというではないか。まさか逃げ出すようなことはあるまいな？」

俺個人としては心の底から逃げたい。身分を明かしていなければ、あるいは逃げるのも一つの手かも知れないが、流石にこれを突っ撥ねるのは母国の名誉にも関わって来る。

俺は内心の動揺を隠して、口を開いた。

「受ける前に二、三聞きたいことがあるのですが……」

「何だ？」

「ルークセントでの決闘は、命をかけるような類のものでしょうか？」

「いいや。基本的には、互いに防御魔法をかけ合い、どちらがそれを先に破るか、というものになる。場合によっては怪我をすることもあるだろうが、命に関わるようなことにはならない」

どうやら最悪の条件ではないらしい。

命を賭けた決闘等は勝っても負けてもロクなことにはならないのが普通だ。怪我の心配もそれほどしなくていいのなら、事後処理もスムーズに行くだろう。

「なるほど。使用する武器は何でしょう？」

「自由に選んで構わない。こちらはこのレイピアを使用する」

将軍は、トリート・コーヴィンの前に突き立てられた細剣を手で示した。

「立会人はどなたですか？」

「ここにいる全員が立会人だ。望むのなら、お前が決闘責任者を選んでもいいぞ」

「……わかりました、受けましょう」

俺は篭手を拾い上げた。

「ぐぁっ」

「ちょっと！」

「大丈夫なのか、カインド」

口々に声を上げる面々をそのままに、俺はコーヴィン兄弟に近付いていった。彼らの周りには、子飼いと思われる兵士達が、まるで主君を守るように立っている。全員の視線が俺に注がれた。

「ふん、よくぞ逃げずに受けたものだ。勝てると思っているのか？」

弟の挑発には乗らず、篭手を押し付けるように返す。視線は兄に向け、俺は言った。

「私はルークセントの様式を存じ上げません。最低限のことは知っておきたいですし、色々と準備もあります。少々お時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

コーヴィン将軍は、余裕たっぷりの笑顔で頷いた。

「よかろう」

やけに俺を睨んでくる弟は最後まで無視して、ルース達の下へ戻る。

「……時間は稼いだ。対策を立てたい。場所を移動しよう」

サラは何か言いたそうな表情をしていたが、言葉を飲み込んで、歩き始めた。

文官達のざわめきや兵士達の野次、女性の上げるルースへの黄色い声が耳に付いた。

集団を横切るように広場を縦断し、宮殿近くの木陰で顔を付き合わせる。

「さて、どうしよう？」

開口一番の俺の台詞に、サラとルースは呆れた顔をした。

「な、悩むくらいなら受けないでよっ！？」

「落ち着いてるから、何か手があると思っていた。本当に大丈夫なのか、カインド」

「文句なら終わってから受け付けるよ。サラ、トリート・コーヴィンの戦力は、その辺の兵士に毛が生えた程度だって、言ってたよな？」

サラが三角の耳をピンと立て、俺を睨んだ。

「その程度なら勝てるって？　貴方が？」

「そこまで自惚れてねぇよ。傾向を知らないと対策が立てられないだろ」

「剣術は、一般的な兵士とそう変わらない。ただ、コーヴィン大佐は精霊魔法の方が得意だった筈だ」

「魔法はアリなのね……」

そこは不安要素と勝機の見極めが難しい所だ。俺の剣術など道場通いの子供にも劣る。かといって魔術は使えない。戦術の幅を広げるには魔銃を使いたいところだが、魔法の使用を認めると防御手段がないことが問題になる。

「そこは条件を付ければ回避出来るかもしれない。向こうはお前を舐めているだろうから、同じ条件なら少しは融通が利くはずだ」
「大体把握した。スロウルム将軍に事情を話して、連れてきてくれ。決闘責任者を頼みたい」
俺が知るルークセントの人物で、ある程度信用出来るのは、サラとスロウルム将軍ぐらいしかいない。サラは当事者なのでコーヴィン側が嫌がるだろう。となるとスロウルム将軍に頼む他ない。
「わかった。何とか連れてくるから……勝手に暴走するなよ」
「俺よりルースに言ってくれ」
俺の軽口に構わず、サラは宮殿の中に走っていった。

スロウルムが来るまでの間に、何とか勝負になる道筋を考えなければ。
「ぐぁー……」
肩に前足を乗せたイクシスが、心配そうに顔を寄せて来る。
「僕が助太刀に入る訳には、いかないのか？」
「流石に無理だろ……。頼むから、決闘が終わるまでは手を出すなよ。話がこじれる」
俺が答えると、ルースは顔を顰めた。
「幾らなんでもそんなことはしない。相手が卑怯なことでもしない限りは」
「代理を立てるのは難しいだろうなぁ。わざわざ俺をご指名したのも、何か理由があるだろうし」
「君なら勝てると踏んだんじゃないか？」
「それは当たり前のことだろ」
自分で言うのは情けないが、三人の中で一番弱く、コーヴィン大佐でも勝てると判断されても何ら不自然ではない。
気になるのは、勝てることを前提として、何か策を弄していないか、だ。
しかし、今は目の前の決闘に集中しなければ。

「お前の見立てだと、アイツどれぐらい強い？」
「君三人分ぐらいだ」
「ぐっ」
「ぐぁー？」
俺は自分で問い掛けておきながら、絶句した。
あと二人、どこから持って来ればいいんだ……。
「大事になるようなことはないと思う。向こうは舐めてかかって来るだろうから、そこが鍵だ。君達ぐらいのレベルなら、気合一つで結果は幾らでも変わる。勝機はあるぞ」
何ともありがたいお言葉で。

頭を抱えていると、サラがスロウルム将軍を連れて走って来た。
「事情は聞いた。まさかこんな事態になるとはな……」
スロウルム将軍は、困惑しつつもどこか面白がっている様な表情で言った。
恐縮するしかない俺は、深く頭を下げた。
「申し訳もございません。何故か、気付いたらこんなことに」
「サラのことを庇ってくれたそうじゃないか。コーヴィン兄弟の人格もわかっている。謝ることはない。――それより、戦うのはソーベルズ卿、君だと言うじゃないか。心配なのはそこだ」
当たり前だけど、俺って信用ないなぁ。
「まぁ、やれるだけやりますよ」
「私が責任者を務める以上、贔屓は出来ないぞ」
「公平に判断して頂けるだけで十分です。向こうがヘンなことをしないように、注意を払って下さい」
スロウルム将軍がしっかりと頷いたのを確認し、コーヴィン兄弟の待つ正面広場の中央へ向かった。

人ごみが大きくなっている。文官や女官など、宮殿に勤めるヒト達が騒ぎを聞きつけて集まって来たらしい。俺達の顔を見ると、道

を空けてくれる。
「ようやくか。おお、スロウルム、わざわざご足労だな。決闘責任者として連れて来たわけか」
兄弟で何やら語り合っていたコーヴィン将軍がこちらを見て、せせら笑った。
尚も俺を睨むトリート・コーヴィンの方を見ないように、口を開いた。
「私が知っているルークセントの方は少ないもので。よろしいですか？」
「もちろんだ。将軍職にある者なら、片方に肩入れした判断なぞしないだろうしな」
「どこかの誰かじゃないんだ、そんなことはしない。……条件を聞かせてもらおう」
皮肉たっぷりのコーヴィン将軍の台詞を皮肉で返して、スロウルムは言った。

俺の正念場は実質ここだ。
何とか五分五分まで勝負になる条件を勝ち取らなければ。

「決闘は武を競うことで行う。武器はそれぞれ持っているものだ」
兄の言葉を受けたトリート・コーヴィンが、突き立てられていた細剣を引き抜き、翳した。
俺も腰の剣と魔銃に手を添え、訊ねる。
「魔法の使用は？」
「そちらの好きにするが良い。トリートは精霊騎士だ」
まるで自分の決闘の様に主導権をとるコーヴィン兄。相談すらしていない様だけどいいのか。
「では、魔法で決着を付けるのはナシにしましょう。名誉を賭けた決闘は、あくまでも剣で雌雄を決する、ということです」
「フン、何か策でもあるのか？　まぁ、いい。認めよう」

「魔獣は一緒でも構いませんよね」
ここが通るかどうかで結果は全く変わってしまう。
何とか受け入れて貰おうと、さりげなく言ったつもりの俺の台詞に反応したのは、トリート・コーヴィンだった。
「なっ、何だと!?」
「え、ルークセントでは魔獣を伴うことは認めていないのですか？
魔獣騎兵国家とまで言われるルークセントで？　共に戦うといっても、こんな小さなドラゴンですよ？」
「ぐぁっ」
イクシスがフードから顔を出し、小さく鳴いた。
「じょ、条件を一緒にするのが決闘の基本だ！　私は魔獣など――」
「いいじゃないか、トリート。あのような小さな魔獣に恐れをなした等と言われてみろ。末代までの恥だ」
弟の台詞をコーヴィン将軍が遮った。
――よし、これで何とか勝負になるかもしれない。
トリート・コーヴィンの実力が俺三人分だと言うなら、俺とイクシスで二人分、もう一人分くらいなら何とか策で捻り出せる……といいなぁ。
俺が内心満足していると、コーヴィン将軍が何かを思いついたか様に手を打った。
「そういえば、ルークセントの作法というなら、決闘の勝者は敗者から一つ要求出来る、というのがあったな」
「……？」

「こちらが勝った暁には、そのドラゴンを頂こう」

「はぁ!?」
俺は思わず叫んでしまった。
スロウルム将軍も物凄い顔で呟く。
「コーヴィン、貴様……！」

「何を驚くことがある。魔法防御を使うことで決闘が命のやり取りではなくなったその頃から、命の代わりとして、一つ品物や行動を貰うことになった。決闘を真剣勝負にする為に、必要なことではないか」

スロウルム将軍を見ると、苦りきった顔で頷いた。でまかせを言っている訳ではないのだろう。

「確かに古い作法ではあるが、ないこともない。だが、何も知らない外国人にそんなことを要求するのは……」

「相手の要求は呑んだのだ。こちらの要求を呑んでもらっても構わないだろう。そもそも『龍の卵』はルークセントの物。返してもらうだけだ。まさか今更逃げ出すようなことはあるまいな？」

周りの群集がそろそろ焦れて来ているのもわかる。今ここでなかったことには出来ないだろう。

俺は大きく深呼吸をして、言った。

「……わかりました」

サラの名誉の為にも、そう簡単に負けるつもりはなかった。しかし、イクシスをどうこうするつもりなら、絶対に勝たなければならない。

覚悟を決めた。

スルウルム将軍が感情を押し殺した声で言った。

「では、これより決闘を行う。責任者は私、トマス・スロウルム。防御魔法を双方にかけ、これを剣で砕いた者を勝者とする。魔法で砕くのは反則となり、その時点で負けとなる。ソーベルズ卿はドラゴンを伴う。よろしいか？」

「異論なしッ！！」

「はい」

コーヴィン大佐が堂々と答え、俺も同意した。

「ならば、双方用意だ！」
スロウルム将軍の叫び声に続いて、広場の人々の歓声が上がった。

# １５．昼下がり、正面広場（後書き）

１１月４日初稿

## 16．ぬるい決闘

集まっていた人々が、俺達の決闘の場を作る為、広がっていく。
正面広場に、円状の即席闘技場が出来上がる。直径は５０ｍ弱くらい。
そして、中央にスロウルム将軍。

俺は、ルースとサラがいる南側の端まで下がった。

「かける防御魔法は＜付属硝子（フィキシング・グラス）＞、介添人準備ッ！」
まるで野次馬を煽る様に、演説口調でスロウルムが叫ぶ。

サラが俺の前に来て、印を組み始めた。
「私が原因でこんなことにまでなるなんて……。すまない」
「いや、料理屋でのことは、ただのきっかけってだけだ。弟の大佐のことがなくても、コーヴィン将軍は何かしら因縁付けて来ただろうよ」
おそらく、狙いはイクシスなのだ。
弟コーヴィンは本気で名誉を回復したいと思っているのかもしれないが、兄はたまたま起こった出来事を利用しているだけに過ぎない。もちろん、元々気に入らないグリフォン部隊への嫌がらせという面もあるだろうけど。
印を組み終えたサラの手が俺の胸元に触れた。サラが触れた部分から、淡い光が放射状に広がっていく。
「……＜付属硝子（フィキシング・グラス）＞をかけた。頭と胴体の前側に、一枚防御結界が張られている状態だ。範囲は頭頂部から足の付け根まで。肩から先は含まれていない」
「手足と後ろ側は防がれていない訳か……。強度は？」
「掠るくらいならかなり耐えられるが、強い攻撃を的確に当てられ

ると砕ける」
「＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞一発当てたらどうなる？」
「砕けるな。ただ、普通の＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞なら、砕いて終わりだ。相手にダメージは与えないだろう」
と言うことは、俺の魔銃なら＜付属硝子（フィキシング・グラス）＞に当てれば、相手を傷付けることはないのか。幾らコーヴィン大佐が嫌な奴だとしても、殺してしまうのは寝覚めが悪いし、恨みを買うのも後々良くない。
「わかった」

同じように、トリート・コーヴィンもローブ姿の老人に白魔法をかけられていた。

向こうを見ながら、ルースが言う。
「なかなか上手い条件を捻り出したもんだ……」
「その分イクシスを賭けることになっちまったけどな」
「勝てばいいだけの話だ。イクシスもあんな奴に持っていかれるのは嫌だろう？」
「グァッ！」
ルースに頭を撫でられたイクシスが元気良く鳴いた。
「勝手に何かするなよ、イクシス」
「ぐむー……」
「必要になったら、その時は頼むから。いつでも応じられる様に準備しておいてくれ」
「グア！！」
イクシスの返事を聞いて、俺は一歩前へ出る。
「頼むわよ、カインド！」
「行ってこい、カインド！！」
サラとルースが左右から両肩を叩いた。
片方は男装しているとはいえ、美人二人に激励されるとは。取り巻きの人数はともかく、介添人の質では圧倒的大差で勝っているな。

やる気がさらに出た。
「よし、やってみるか！」
「グァーッ！」
肩に前足を乗せたイクシスを連れて、俺はスロウルム将軍の所へ戻った。

タイミングを合わせたのか、ほぼ同時にコーヴィン大佐も足音高く歩いて来る。緊張と興奮で唇が震えていて、厳つい顔がさらに凄いことになっている。
スロウルム将軍が、両方の手の甲で、俺とコーヴィン大佐の胸をコンコンと叩いた。衝撃は伝わるが、スロウルムの手は鎧には触れない。＜付属硝子（フィキシング・グラス）＞はしっかりかかっている。
「うむ、双方込められた魔力量は同じだ」
どうやら今のコンコンは魔力量を確認する作業だったらしい。スロウルム将軍は、大きく息を吸って、声を大きくした。
「最後に確認をさせてもらう！　勝者の主張を認め、決闘の後は遺恨を残さないことを誓うか？」
「誓う！」
「誓います」
コーヴィン大佐と俺の承諾に、群集の野次と喚声が上がった。

「では、離れて！」
相手を見据えたまま、十数歩下がる。
コーヴィン大佐も、勇ましくマントを脱ぎ捨て、同じくらい距離を空けた。
「次いで、抜剣！！」
俺は右手で抜いた剣を左手に持ち替え、さらに魔銃を抜いた。出し惜しみ出来るような余裕はない。
イクシスが鬣を逆立てたのが空気の流れでわかる。

コーヴィンは、抜き身のままだった細剣を一頻り振り回し、ピタリと俺に向けた。
「……決闘、始めッ！！」
スロウルム将軍が、高く上げた右手を、振り下ろした。

合図と同時に、俺は後方へと地面を蹴った。
逆に、コーヴィンは細剣を正面に構えながら、俺へと突っ込んで来る。
俺は魔銃を構えた。
「撃てるのか、外国人ッ！？」
一気に距離を詰めながら、舐め切った顔でコーヴィンが叫んだ。
例え拳銃型の魔銃で撃てる様な下位魔術でも、相手に怪我を負わせるには十分だし、当たり所によっては死ぬこともある。それを恐れて、俺が引き金を引けないと思っているのだろう。
幾らなんでも舐め過ぎだ。
「撃てますよー」
俺は引き金を引いた。
「ッ！？」
俺の撃った＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞が、狙い通り、迫り来るコーヴィンの足元に着弾する。コーヴィンは少なからず驚いた表情で足を止めた。
さらに一発。
これで少しでも、撃たれるかもしれないという恐怖を植え付けられれば、儲けモノなのだが。
「くっ！　こ、この……っ」
コーヴィンが呻る間にも、俺はさらに距離を空けていた。
歯軋りの音がここまで聞こえてきそうな彼の顔を直視しないように、その一挙手一投足を観察する。
こうやって距離を取りながら決着を先送りにしつつ、何とか隙を付くなりして、コーヴィン大佐に一本入れる機会を窺おう、という算段なのだが。

俺の目論見は、あっさりと打ち砕かれた。

「ただのハッタリだ、トリート！　時間稼ぎに付き合うんじゃない！」

リンゼス・コーヴィン将軍の怒号が広場に響き渡った。

「――はっ、はいっ、兄上！！」

兄の激励に自分を取り戻したらしい。

トリート・コーヴィンは細剣を一度振って、正面に構え直した。

一瞬の間を置いて、再度突っ込んで来る。

今度は俺が呻く番だった。

「うぁっ！？」

こっちは舐めていた訳でも、準備が出来ていなかった訳でもない。

それなのに、俺が後ろに跳んだ時には、今まで俺がいた場所にコーヴィンがいる。つまり、そこから一歩踏み出し、剣を振ればその攻撃は俺を捕らえるのだ。

突進の勢いをそのまま乗せた突きが、来る。

「――っ！」

軽口を言う暇もなく、俺は石畳に体を投げ出した。全身全霊で右に転がり、何とか立ち上がる。

しかし、敵はそう簡単に逃がしてはくれなかった。

「逃げるな卑怯者めっ！」

コーヴィン大佐が叫び、突いた姿勢のまま、細剣を真横に薙ぎ払う。反射的に出した俺の剣が、その斬撃を弾いた。

「逃げなきゃ負けるでしょうがッ！！」

正面にいるのは良くない。突き技はその内喰らうのが目に見えている。敵の脇へ脇へと移動しなければ。縺れる足に鞭打って、崩れた体勢のまま地面を蹴った。

「どうした外国人！　逃げるばかりか！！」

乗ってきたコーヴィンの攻撃が二度三度と繰り返された。

顔を狙う袈裟斬りを剣で弾き、脇腹を狙う水平斬りを飛び退いて回避、逆側から迫る攻撃を屈んでやり過ごす。
「――くおっ！」
俺は情けない気合声を上げながら、左の剣を振るった。余裕たっぷりでコーヴィンの細剣が撃ち落とす。
「そんな攻撃当たるかぁっ！！」
「なら、こっちだ！」
コーヴィンが踏み出そうとする足元に、俺は＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を撃ち込んだ。
「っ！？」
凍りついた様に止まったコーヴィンの隙を突いて、俺は何とか細剣の届く範囲から抜け出した。
たったこれだけの攻防で、自分の息が上がっているのがわかる。策を考える所じゃない。
必死に動いて足掻いて、それでも負けないのが精一杯だった。

＊＊＊＊＊
「――これはちょっと厳しいか……」
サラが苦い表情で呟いた。右手を強く握り締め、何かきっかけがあれば飛び出してしまいそうな顔をしている。
「二人とも本気なのはわかるが。訓練一つ受けていないカインドはともかく、コーヴィン弟は軍人だろう？　素人同然の人間を相手にして、あの体たらくはちょっとなぁ」
顎に指を添えたルースの批評に、女騎士が食って掛かる。
「主の心配はしないのか！？」
ルースは一瞬考えた。
主とは誰だろう。

そういえば、カインドとは主人と従者という関係だと言っていたか。
「もちろんしている。だが、決闘に送り出した以上、信じて見守るしかない」
三角の耳を伏せ、サラの勢いが緩んだ。
「そっ、それはそうだけど……」

カインドとトリート・コーヴィンの攻防は続いている。
攻め立てるコーヴィンと、それを受け防ぎながら、移動し続けるカインド。

「カインドの持つ剣の方がかなり重いらしい。コーヴィン弟が両手剣使いだったりしたら、今頃目も当てられないことになっていたと思う」
「まともな防御になってないのに、何とか凌いでるのはそれが理由か……」
カインドの剣は、敵の攻撃軌道に差し出されているだけだった。勢いを流すことも、接触の瞬間力を込め弾くこともせず、それどころか押さえ付けている様にも見えない。
あれでは、重い攻撃は到底防ぎ切れるものではない筈だ。
「相手が綺麗な決着に拘り過ぎなのも、付け入る隙になる。その点、カインドはわりと手段を選ばない方だから、有利な要素だ」
本来なら、あれぐらいの実力差があれば力押しで十分事足りる。連続で攻撃を続けることで、相手に反撃を許さなければ、負けることはないのだから。
しかし、トリート・コーヴィンはカインドを無理に追いかけず、その分反撃を受けている。
最も、防御と同様、ただ剣を振り回すだけで全くなっていないカインドの攻撃は全て防がれている状況だった。

「あとはイクシスをどう使うかと……」
ルースは誰に言うでもなく、口の中で呟く。
「貧弱な攻撃をどう当てるか、だな」
＊＊＊＊＊

何度か攻撃をしてみてわかった。
剣術勝負で、俺が防御魔法を砕くことは出来ない。魔銃を牽制に使ったところで、万に一つも無理だ。
これなら、魔法での決着をアリにして、魔銃の早撃ちに全てを賭けた方が良かったかもしれない。
こんな後ろ向きのことを考えているとルースが知ったら、怒るだろうなぁ。
魔銃に込められた＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞弾は、残り二発。装填を許してはくれないだろうから、撃ち尽くした瞬間、手段を一つ失うことになる。

コーヴィンが叫んだ。
「ええいっ！　いい加減、正面から勝負せんかぁっ！！」
横へ横へと逃げる俺に焦れたのだろう、一際力を込めた横薙ぎを振るってくる。
「くぅっ！」
剣で防ぐことには成功したものの、俺は体勢を崩した。慌てて踏ん張り、構える。
しかし、コーヴィン大佐は追撃せずに、飛び退いていた。
嫌な予感がする。
「……もういい。これ以上付き合っても疲れるだけだ」
コーヴィンはそう言って、さらにブツブツと呟き始めた。
ただの愚痴なら煽ってやるところだが、その語りかける様な声色は、精霊魔法の詠唱に他ならない。

攻めるべきか、回避の準備に費やすべきか。
一瞬悩んだ俺は、さらに距離を取り、コーヴィンの魔法に注意を向ける選択肢を選んだ。
剣と魔銃を構えて目を凝らせば、コーヴィンの周りに５ｃｍくらいの氷の結晶が舞っている。
すでに呪文は終わりを迎えつつあった。
「――を散らす。……喰らえっ！　＜冷氷の錐＞っ！！」
氷の結晶が、コーヴィンの叫びに応えるように動きを止め、鋭い部分がこちらを向く。

角度からするとその狙いは、俺の足元――いや足か！

およそ十数個の氷塊が、一気に発射された。
「う――うわぁあああああっ！」
俺は恥も外聞もかなぐり捨て、全速力で逃げた。
一秒前まで俺がいた場所に、バチバチと氷塊が降り注いでいく。
＜冷氷の錐＞が当たった石畳は凍りつき、一抱えほどの氷が凝結していく。
「つめてっ！？」
氷塊の一つが右足のすぐそばに着弾すると同時に、がくんと体がつんのめった。
足元を見ると、踵まで含めて氷が出来上がっていく。
俺が移動したのとそっくり同じ軌跡で、氷の小山が連なっていた。
その最後、連山の端に、俺の右足が食い付かれた形だ。
動こうにも、右足が縫い止められて動けない。
「これで逃げられまいっ、外国人！！」
コーヴィンが台詞と共に肉薄してくる。引き絞られた細剣は、敵へと打ち出されるその瞬間を待っているかの様に光っていた。
足に気を取られていた俺は、迎撃する準備が出来ていない。
「――イ、イクシス、頼むッ！」

「グゥウアッ！！」
思わず叫んだ俺の声に、イクシスが鳴いた。
その小さな口元に、俺の頭と同じくらいの炎の塊が現れ、俺とコーヴィンの間、俺から見て３ｍほどの所に飛んで行き――。
盛大に爆発した。

「ぐぅぅぅぅッ！！」
「ひぁあああっ！？」
俺とコーヴィンは悲鳴を上げた。正面広場に響く爆発音に掻き消され、周囲には届かなかっただろうが。
爆発の規模は＜弾ける傘（ベモベッツル）＞や一般的な魔法爆雷より、少し大きかった。
そこそこ距離があって直撃はしていないのに、爆発の余波だけで俺は後ろにひっくり返った。いつの間にか右足を拘束していた氷は砕けていた。
全身を叩く小石と風が熱い。

何とか立ち上がって顔を上げると、粉塵が巻き上がり、未だ爆音の残滓が残っている。
腕で顔を覆い、どっしりと構えるスロウルム将軍が見えた。
「や、やりすぎじゃね？」
「ぐ、ぐぁー……」
俺の呟きに、イクシスがばつの悪そうな表情になった。
「ふ、ふ、ふ――ふざけるなぁあああっ！！」
土煙の向こうからコーヴィン大佐の怒号が聞こえてくる。
「コントロール出来ないのなら、そのケダモノをどこかにやれっ！！　危うく爆殺されるところだったではないか！？」
確かに、俺が相手の立場だったら、やっぱり怒る。しかし、イクシスがいなければ負けることは確実なので、コーヴィンの主張を受

け入れる訳にはいかない。
俺は平静を装って、呼びかけた。
「叫ぶ程度には元気じゃないですか。第一、魔獣と共に戦うことはそちらも了承済みのことでしょう」
「その通りだ、コーヴィン大佐。すでに付けられた条件について、とやかく言う権利はない。それとも決闘を放棄するか？」
スロウルム将軍が真っ直ぐに立って言った。いつも通りの態度で、動揺や気負いは見て取れない。俺を擁護しようとした訳ではなく、責任者として当たり前のことを言っただけの様だ。

土煙が晴れ、思ったよりも遠くにいたコーヴィンの顔が見えた。
顔面蒼白と表現するに相応しい表情で、目を凝らせば、ちょっと涙目になっているのが確認出来る。
「そ、それは……っ」
覇気を失った弟に、兄が大声で語りかけた。
「ドラゴンの攻撃も魔銃と同じだ。少々派手だろうとハッタリには変わらない。そろそろ茶番は終わらせろ、トリート！」
コーヴィン将軍はさっきの爆発でも怯んでいないらしい。
発破をかけられたトリート・コーヴィンは数秒呆けた表情をし、次いで俺を睨みつけた。
「おのれ……、恥を掻かせおって……っ！！」

逆恨みです。

俺はそう言い返そうとしたが、コーヴィンが形振り構わず飛び出して来たので、諦めた。これ以上火に油を注ぐこともないだろう。
相手は十分頭に血が上っているのだ。
「はぁぁぁあああっ！！」
土煙をその体で切り裂く様に、トリート・コーヴィンが突っ込んで来る。

俺は魔銃を構え、その足元へ＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞を撃った。
「――っ！」
狙い通りギリギリの所に着弾したのに、コーヴィンの勢いは衰えない。
「いいいやあああああっ！！」
初めて気合声を上げたコーヴィン大佐が、細剣を突いて来た。
俺は体を屈め、何とか突きをやり過ごす。
最後の弾で、腰の横を狙って牽制射撃。撃ち出された＜貫く枯れ葉（ハサー・テルーブ）＞は、コーヴィンを掠めるほどすぐ傍を通って、少し離れた石畳に当たった。
それでも敵は止まらない。
「ぁあああああ！」
甲高い声を上げたコーヴィンは、体重を乗せた横薙ぎを繰り出す。
向かって、右。
慌てて差し出した俺の剣は、相手の攻撃の勢いを止めきれず、大きく弾かれる。剣を握っている左手が弾かれた剣に持っていかれ、正面が開いてしまった。
「ぐぅぅっ！！」
「これで、終わりだぁあああああああっ！！」
コーヴィンが叫びながら、細剣を体の正面に戻し、力を溜めるのが俺の目にゆっくりと見えた。
見えたとしても、それに対応出来るかどうかは、別の話だった。

# 16．ぬるい決闘（後書き）

11月9日初稿

# 17．酷い策

コーヴィン自身、そして細剣が迫る。
俺は剣を弾かれ、体の正面がガラ空き。必死に防御体勢を取ろうと足掻くが、自分の体は嫌になるほどゆっくりとしか動かなかった。

これは……ダメかっ！？

思わず閉じかけた視界の隅で、小さな影が動いた。
イクシスだ。
「グァウッ！！」
俺の肩から飛び出したイクシスが、突き込まれる細剣の先端に噛み付く。小さな体でも相当な勢いだったのか、コーヴィンの細剣は軌道をずらされ、右胸と腕の間、何もない空間を貫いた。衝撃に備えていた俺の全身から冷や汗が湧き出す。
「このっ！　離せぇえええっ！！」
勝負を決める筈だった一撃を外されたコーヴィンは、大声で叫びながら、イクシスに噛み付かれたままの細剣を振るった。
先端に噛み付いていたイクシスが細剣以上に振り回され――弾かれる様に宙に舞った。
「――イクシスッ！」
小さな黒い体を視線で追い、叫んでしまう。
しかし、イクシスは空中で俺をしっかりと見て、大きく鳴いた。
「グアーッ！！」
まるで心配と叱責を混ぜた様に聞こえるその鳴き声で我に返る。
視線をコーヴィンに戻すと、相手は既に次の攻撃に移っていた。また突きだ。
「いやぁあああっ！」
「――くぅっ！」

コーヴィンの叫び声と俺の呻り声が重なる。
俺は今度こそ体を捻り、コーヴィンの突きをかわした。
相手の腕が伸びきった所を狙って、剣を合わせるのが精一杯だった。二つの刃がぶつかったが、合わせただけなので軽い音がしただけ。そのまま強引に剣を滑らせ、鍔迫り合いに持ち込み、俺は叫んだ。
「イクシスッ、大丈夫か！？」
「グアッ」
イクシスが元気に返事を寄越した。

空中で羽ばたきながら。

――と、飛べたんだなお前。
元々蝙蝠のものに似た翼があるのは知っていた。でも、それはイクシスの体に比べても小さいものだったし、これまで使ったところを見たことがなかったのだ。
剣に噛み付いた口も歯も無事。地面に落ちることで怪我をする心配もない。
「なら、良しッ。戻って来い！」
「させるかぁっ！！」
力勝負で押し切ろうと、コーヴィンが交差した細剣により力を込める。
金属と金属が擦れる嫌な音。
俺も剣に体重を乗せ何とか堪える。向こうは剣自体が軽く、こちらは剣を握っているのが利き手ではない。条件はそう変わらない筈だが、全く鍛えていない俺がいつまでも持ち堪えるのは厳しそうだ。
俺はコーヴィンの眼前へ魔銃を突き付けた。
「っ！？　またハッタリか、卑怯者めっ！」
一瞬息を飲んでも、コーヴィンの細剣から力が抜けることはなかった。これだけ牽制に使っていれば慣れてしまってもおかしくはな

い。
それなら――。
俺は、コーヴィンの視線が魔銃から離れないうちに、ゆっくりと引き金にかけた人差し指に力を入れた。目を見開いたコーヴィンが少しずつ動く引き金を見据え、大きく唾を飲み込んだ。
「今更……そんなハッタリなどに……！」
弾倉が回転し撃鉄が動くのを見て、明らかに怯えだすコーヴィン。例え防御魔法が防いでくれることがわかっていても、銃口から飛び出すモノが怖いことに変わりはない。
俺はあくまで冷静にじっくり引き金を引いた。
「大体っ、それを撃てばお前が負け――！？」

がちん、と。撃鉄が落ちた。

「～～～っ！！」
コーヴィンが目を瞑った瞬間、俺は剣を滑らせつつ、後ろへ跳んだ。
俺の魔銃から魔弾は発射されなかった。

もちろん残弾数を把握した上でのハッタリだ。

呆けた表情でコーヴィンの目が開くまでに、さらに距離を稼いでおく。
「な……！？　弾切れ？」
「弾切れです」
呟くコーヴィンに向かって魔銃を構え、引き金を数回引く。がちんがちん、と撃鉄の音がしただけだった。
これでもう魔銃は使えない。俺は魔銃を腰のホルスターに差し込み、剣を右手に持ち替えた。
群集から忍び笑いが漏れ、コーヴィン兄弟側の兵士達でさえ苦笑

を浮かべているのが見える。
「グーァッ」
イクシスが小さな翼をパタパタ動かして、俺の頭に乗っかった。
微かだが、頼もしい重みに声をかける。
「さっきは助かった。ありがとな」
トリート・コーヴィンは下を向き、屈辱と激憤を押し殺している。
こっちを気にする余裕もないらしい。
――今のうちだ。
俺は出来るだけ口を動かさず、自分でも聞き取れるかどうかの声量でイクシスに呼び掛けた。
「……イクシス、聞こえたら尻尾で俺の肩を叩け……」
右肩にポンポンと小さな感触。よしよし。
「……酷い作戦を考えた。俺が挑発するから――」
俺はコーヴィンを見据えながら、ちっぽけな思い付きをイクシスに伝え始めた。

＊＊＊＊＊
「……っ」
ルースは奥歯を噛み締めていた。
頭部から飛び出した耳を小刻みに動かしながら、サラが言った。
「あそこまで怒らせて大丈夫なのか？　勝敗以上に身の危険を心配した方が良さそうな顔色だが……」
確かにトリート・コーヴィンの怒りは相当なものだろう。兄からの叱責には慣れていても、周囲の人々――特に取り巻きから笑われる、というのは我慢ならないことだったに違いない。
ゆっくりと顔を上げたコーヴィン大佐からは、怒りを越えて恨みすら読み取れた。

しかし、ルースの思考は別に向いている。
「命の危険があるぐらいの方が、カインドには向いているかもしれないな」
サラが驚いた顔をしてルースを見つめた。
「せっかくイクシスが隙を作ってくれたのに、出来たことと言えば鍔迫り合いに持ち込んだ程度。あの場面ならカインドでも一本取れただろうに……」
「い、いやでも……、あれだけ実力差があって、良く頑張ってる方じゃ」
サラの台詞に、ルースは大きく息を吐いた。
「攻撃を入れなきゃ意味がない。目指すところが回避や時間稼ぎばかりじゃあ、何度凌いだところでいつかは捕まるんだ。もう一歩踏み込むべきだ、うん」
ルースから見れば、カインドの戦法は受けに寄り過ぎている。今回の決闘には時間切れも増援もないのだ。カインド自身がどうにかしなければ、結果的に待っているのは敗北である。
「カインドには、その攻撃の手段がないんだろう？　ヘタな攻撃は結局大きな隙になってしまう。結局負けてしまうじゃないか」
サラはそう言って視線を決闘を行う二人に移した。
確かに、かなりの実力差がありながら決定的な一撃は喰らっていないのは、カインドが不用意な攻めに出ていないからだ。
しかし、やはりルースには歯がゆい戦い方だった。
戦法の好みや偏りはあって当然にしても、勝つ為の冒険は必ずしなくてはならない。
頑張っている程度では駄目だ。確実な一撃を与える手段がないのなら、強引にでもその一撃へと繋げる何かが――。
「――コーヴィン大佐が詠唱を始めた……」
サラの呟きに、ルースは我に返った。
顔を上げて目を凝らせば、トリート・コーヴィンが小さな声で呪

文の詠唱をしている。詠唱の内容までは聞き取れないが、集まる精霊の質からすると、氷系魔法ではないらしい。
感覚を研ぎ澄ませ見当をつけたルースは言った。
「これは……光系魔法か」
＊＊＊＊＊

俺とイクシスの相談が終わった頃、コーヴィンの詠唱も終盤を迎えていた。
「……＜光輝の虚像＞っ！！」
コーヴィン大佐が術名を高らかと叫ぶと、彼も含めて周囲の空間が、陽炎の様に揺らめいた。何かがあるのはわかっても、はっきりとは判別出来ない。数秒の後、揺らぎが治まっていくのに合わせて、ヒトの姿が少しずつ見えてくる。
やがて、コーヴィンが姿を現した。
三人も。
「ぶ、分身！？」
野次馬がどよめく中、俺も同じように叫んでいた。
５０ｃｍほどの距離を取っているそれぞれのコーヴィンは、三人が三人とも、残酷さを滲ませる笑顔を見せて笑った。
「ふははっ！！　貴様如きに＜光輝の虚像＞を使うのも癪だが、さっさと終わらせてやる！　大人しくやられて地面に這い蹲れっ！」
かなり距離を取っているので、俺の耳ではどのコーヴィンから笑い声が出ているのかはわからなかった。しかし声は一人分だ。実体が三倍になった訳ではないのなら、本体を見極めれば、何とか対応出来る筈。
「行くぞっ外国人！！」
三人のコーヴィンが同時に一度剣を払い、同時に構えた。
「――グゥゥゥウ――」
俺の頭に乗ったイクシスが呻り声を上げる。魔法らしき攻撃をす

る時の呻り声だ。俺は慌てて、小声で言った。
「待て、まだ早いっ！　ここは何とか凌ぐから……！」
イクシスへの制止が終わるか終わらないかのうちに、コーヴィン達は石畳を蹴った。
少しずつ角度がずれており、三人の軌道が交わるのは、当然俺がいる場所だ。
俺も相手も危険だが、背に腹は変えられない。俺は魔法爆雷を使うつもりで、腰のバックに左手を入れた。手にガラス球のような感触と、魔弾の硬い感触。
「――！」
瞬間的に思い付く。
俺は魔弾を掴めるだけ掴み、迫って来る敵へと投げつけた。
十発ほどの魔弾は自然にばらけ、三人のコーヴィンに向かって行く。俺は今まで以上に目を凝らし、魔弾の行く末を観察した。
俺から１０ｍほどの所で魔弾がコーヴィンまで達する。最初に中央のコーヴィンに魔弾がぶつかる――ことはなかった。鎧や服に魔弾が吸い込まれる。次いで俺から見て右のコーヴィン。こちらも魔弾は跳ね返されることもなく、コーヴィンの体に入る。左のコーヴィンには、胸当てへ魔弾が飛び――弾かれた！
「はぁあああっ！！」
コーヴィン大佐の叫び声と共に、三つの細剣が俺の顔面へと突き込まれるが、中央と右は無視して、左の細剣にのみ集中する。
「……っ！！」
目を瞑る訳にはいかない。
右に一歩踏み出し、体を捻る。三本のうち、左のコーヴィンが突き込む細剣だけを必死で避けた。
顔の真横を敵の攻撃が通過する。中央と右の細剣は、眉間と米神に触れたのに、何の感触もない。

心の底からほっとした。魔法によるまやかしだとわかっていても、顔に攻撃される状況を見せつけられるのは怖い。とは言え、安堵に浸るのは後だ。

「たぁ！！」

俺は、左から右への横薙ぎのイメージで剣を振るった。俺の剣が二人のコーヴィンの幻影をすり抜けていく。

「――ぐぅお！？」

コーヴィンが初めて俺の攻撃に対して焦った様子を見せる。伸ばした腕を引き戻し、細剣の鍔で俺の剣を受け止めた。

火花が散り、＜光輝の虚像＞によって作られた幻影が消えた。

またも鍔迫り合いになる。しかし先程と違うのは、俺は利き腕で剣を振り、しかも左手は空いているのだ。両手で柄を握り直し、口を開く。

「ま、魔法で出したお仲間が……っ、消えてしまいましたね！」

「おのれっ、あ、あんな泥臭い……っ、手でえっ！！」

「あ、あんなハリボテっ、泥臭い手で十分ですよっ！」

「貴様ぁっ！！」

コーヴィンが体ごと詰め寄り、次の瞬間飛び退った。流石に不利な状況での鍔迫り合いは嫌だったらしい。

一度押された俺が追撃する間も無く、距離を作られる。

だが、向こうから退いたのは初めてだ。俺は笑みを浮かべた。

「……魔法って言っても大したことないですねぇ」

「な、何だと！」

俺の台詞にコーヴィンが唾を飛ばした。

これだけ反応がイイと、つい調子に乗ってしまう。

「だって、兵士見習い一人まともに捕らえられないじゃないですか」

「い……、一度捕まった身で何を言う！！」

「アレ、そうでしたっけ？」

阿呆の様に聞き返す俺に、コーヴィンはワナワナと体を震わせた。
「……ならっ！　思い出させてやるっ！！」
芝居がかった仕草で左手を振ったトリート・コーヴィンは、こちらを見据えながら呪文の詠唱を始めた。詠唱から魔法の種類を判別出来るほど精霊魔法には詳しくないが、ついさっき聞いたものと全く同じなら間違うこともない。
――氷系魔法だ！　これなら……！
「イクシス、頼むぞ。あくまで自然にな」
「グァッ」
俺はコーヴィンから目を離さないように、扇状に移動した。
俺と相手の間に、イクシスが爆発系魔法で穿った直径５０ｃｍほどの穴があったのだ。途中に障害物があると、マズイ。幸い、呪文を唱えているコーヴィン大佐は、こちらの動きに合わせて移動することはなかった。
穴は俺から見て右側、ややコーヴィン寄りの位置になる。
剣を両手で握り締め、俺は腰を落とし、構えた。
コーヴィンの周りに氷の結晶が現れ始める。
「――＜冷氷の錐＞！　くふふふ……、さっきの三倍は魔力を込めてやったぞ……」
嫌らしく笑うコーヴィン大佐の言う通り、氷の結晶は、さっきよりも数が多かった。ゆっくりと漂っていながら、まるで発射寸前の矢の様に、獲物を狙う殺気が感じ取れた。
「……同じ手は二度喰いませんよ」
「そこまで言うなら試してやるわ！！　行けぇぇえええっ！！」
氷塊が一瞬動きを止め、一斉に俺を目指して飛んで来る。その数は三十を軽く越えている。
俺は後ろに跳びつつ、叫んだ。
「イクシスッ！！」

「グルァアア――――ッ！！」
頭のすぐ上でイクシスが叫び、炎の塊が吐き出された。
俺の拳より少し大きい炎の塊は、一直線にコーヴィンへ向かって行く。速度は＜冷氷の錐＞に比べると遅い。思ったよりも俺に近い位置で、氷塊の礫と渦巻く炎がぶつかった。
さっきよりも小さな爆発。魔法爆雷程度だ。それでも爆風と土煙が巻き起こった。

「――ッ！？」
広がる土煙を貫くように、五発ほどの氷塊が飛び出してくる。
最初に着弾した氷塊は、退いた俺の足元、次が足の甲、三つ目がブーツの脛に当たった。残りの二つも近くの石畳に当たり、一つの大きな氷を形作っていく。
足掻く暇もなく、俺の両足は膝から下が完全に凍りに埋まっている状況になった。
「――くそっ！　つめてえェ！！」
「ハッハッハッハァーッ！」
コーヴィンが高らかに笑う。
「同じ手を、さっきよりもしっかりと喰らってしまったな外国人！」

＊＊＊＊＊
「ああ……、あの馬鹿っ！　挑発しすぎるから……っ」
サラが呻く様に言った。
少し晴れてきた土煙の中、氷に動くことを封じられているカインドの背中が見て取れた。
「確かにずいぶんとしっかり喰らったものだ」
ルースはむしろ感心しつつ呟いた。
イクシスの精霊魔法で相殺出来ると思い込んでいたのか、カインドはほとんど避けていない。先程は地面に氷の塊が連なるぐらいに

は逃げていたのに、だ。
三角の耳を伏せたサラが、ルースに青い顔を向ける。
「両足を封じられたら、コーヴィン大佐の攻撃なんて――」
「避けることも出来ないだろうな。今まで何とか凌いでいたのは、全身を使っていたからだ」

「だから何でそんなに落ち着いてるの!?」
自分が戦うことには慣れていても、誰かの戦いを見守ることには慣れていないのだろう。サラは戦士にあるまじき狼狽を見せていた。
何を言っても食って掛かられそうだったので、ルースは簡潔に説明を試みた。
「カインドが諦めていないからだ」
彼の瞳に諦めの色は見えない。むしろコーヴィンの一挙手一投足を逃すまいと、見開いている。
例え短い付き合いでも、わかることはある。
あの目は、やれることは全部やっている目だ。
「そ、そんなこと言ったって、今から何が……!?」

「僕なら氷を砕くところだが――」
そう言った後で、ルースは気付く。
「あ……、イクシスがいない?」

いつもカインドから離れようとしないイクシスの姿が見えなかった。
＊＊＊＊＊
一頻り笑ったコーヴィンは大きく深呼吸すると、言った。
「――さあ、これで今度こそ……、終わりだぁあああああっ!!」
台詞の最後を気合声に変え、未だ晴れきってはいない土煙を切り

裂き、向かって来る。足元は見えなくても、しっかりと俺に狙いを定めた細剣の先端は、やけに目に付いた。そして、すでに勝利に酔っているコーヴィンの顔も。

３０ｍほどの距離は数秒で詰められる。

その間に俺に出来ることは――、イクシスを信じることだけだ。

目を見開いて、その時を待つ。

「死ねえええええ――」

あと一歩。

そこから細剣を突き出せば、地面に縫い付けられた俺に、決定的な一撃を入れられるその位置で。

コーヴィンはつんのめった。

「――え？」

足を取られ、バランスを崩し、派手に転ぶ。

彼が地面に倒れたことで、土煙がいっそう晴れた。

正面広場が静まり返り、俺以外の全員が呆気に取られたのがわかった。

コーヴィンは俺のすぐ前に、うつ伏せで体を投げ出していた。何が起こったのか全く理解出来ていない様子で俺を見上げている。

気の利いた台詞でも言ってやろうかとも思ったが、その間に起き上がられても困る。

俺は、にやりと口の端を持ち上げるだけにしておいた。コーヴィンからすれば、さぞかしムカつく笑顔に見えることだろう。

倒れたコーヴィンの足元、ようやく土煙が晴れた石畳の上で、四つの足で踏ん張るイクシスが鳴いた。

「グアッ！！」

さっさとやってしまえということだろう。

「せいっ！」
俺は、両手で握った剣を、渾身の力を込めてコーヴィンの脳天へ振り下ろした。腰を落とした状態で足を凍らされたので、体重を乗せるのにそれほど不都合はない。
パリン、と薄い食器が割れる様な音がして、あっけなく防御結界が砕けた。
「――勝者、カインド・アスベル・ソーベルズ！」
スロウルム将軍の声が響き、野次馬達から声が上がった。
しかし、それは俺を褒め称えるものではなく、どちらかと言えば不満の方が色濃いものだった。不満の矛先は俺かコーヴィンか、あるいは両方かも知れない。
イクシスが石畳を跳ね、俺の体を伝って肩に乗って来た。
「グァーッ」
「お疲れさん」
勝利の鍵に労いの言葉をかけていると、スロウルム将軍、サラとルースもこちらに来ているのが見えた。
若干の苦笑交じりだが、皆笑っている。
格好悪くても誉れにならなくても、ウケてもらえたのなら、俺としては大満足である。
「な……なに、が……」
まだ地面に倒れたまま呆然としているコーヴィンに、俺は剣を収めながら言う。
「だから、イクシスに足を引っ掛けさせたんですよ」
それが、俺の酷い策、ちっぽけな思い付きだ。
「そ、そんな子供騙しに……」
――子供騙し負けたアンタが何を言うか。
俺はその言葉を飲み込んだ。

コーヴィンにしてみれば、罵倒もツッコミも解説もいらないだろう。決闘が終わったのだからこれ以上怒らせる必要もない。

代わりに、近付いて来るルースに向かって声を上げた。

「なぁー、ルースー！　足の感覚がなくなってきたんだが、コレ溶かせるか？」

# 17．酷い策（後書き）

11月16日初稿

## 18．後始末からの決着

俺の凍りついた足をどうにかする為に、ルースがすぐ後ろまで来た、その時。広場に大きな声が響いた。

「――――これは一体、何の騒ぎですかッ！？」

宮殿の玄関口から続く階段に、数人が立っていた。

先頭にいるのは、ルークセント国の王女――リィフ・エイダ・サイ・ルークセントだった。その表情には、控えめな怒りと呆れが見て取れた。

彼女は、ドレスの裾を持ち上げて、ゆっくりと階段を下りて来る。

周囲の野次馬のうち、まず兵士達が一斉に片膝を突いた。その中には、サラやスロウルム将軍も含まれている。軍人で立っているのはコーヴィン将軍だけだ。トリート・コーヴィンに至っては、よほどショックだったのか、未だに地面に突っ伏したままである。

「私は礼節よりも説明を求めています。誰か教えて下さいませんか？」

王女が近付くにつれて、女官や商人等は後ろに退いていく。そそくさとその場を離れる者も出始めた。

結果として、残るのは軍人と俺達のみになる。

さっきまでの喧騒が嘘の様に、広場は静かになった。

頭を垂れたままのスロウルムが、静かに語り始める。

「トリート・コーヴィン大佐が、ソーベルズ卿に決闘を申し込みました。私はその後になってから、決闘責任者を任されました。ソーベルズ卿はルークセントの仕来りを確認し、条件を提示した上で挑戦を受け、そしてたった今、勝利したのです」

説明の間に、王女が軍人達の前に到着した。眉が震えている。

「私が招待した方に、決闘を挑むに至った、その理由は何ですか？」
「私は存じ上げません。当人にお尋ねになるのがよろしいかと思われます」
ゆっくりと幼児に言い聞かせるような王女の口調にも、スロウルムは怯まずに軽く肩を竦めただけだ。
対して、地面にうつ伏せになったままのコーヴィン大佐がピクリと反応した。
「トリート・コーヴィン大佐、説明して下さいますか？」

説明もいいけど、俺としては足が冷たいことの方が問題だ。
凍傷までいかないにしても、春先に霜焼けにでもなったら、山が多いラチハーク出身者としてはイイ笑い者である。

コーヴィン大佐がゆっくりと体を動かし、地面に座り込んだ。
俯いた顔は、口を尖らせ王女から視線を外しており、これ以上ないほどのふて腐れっぷりを表している。子供か。
「……クルミアの店で、その外国人に侮辱を受けましたもので……」
ボソボソと言うコーヴィンに、王女が見下したまま言葉をかけた。
「ソーベルズ卿は私の客人です。無礼は許しませんよ」
斬り付ける様な王女の台詞に、コーヴィン大佐は座ったまま背筋を伸ばした。
「――っ！　し、失礼しました……。ソーベルズ卿と一悶着がありまして。屈辱を晴らす為、決闘を挑んだ次第であります……」
「……ソーベルズ卿とは夕食を共にさせて頂きましたけれど、礼節を弁えている方だという印象を持っています。コーヴィン大佐、貴方が受けたという、決闘をせねばならない程の屈辱とは一体何なのですか？」
「そ、それは……」
コーヴィンの口が凍りついた。目上の者に対して、スラスラと嘘や誇張を交えた話が出来るほどの胆力はないらしい。勝った後なら、

勢いに任せてあることないこと言うことも出来たかもしれないが、ふて腐れた頭ではそれも無理だろう。

「コーヴィン大佐が説明出来ないのなら、ご兄弟であるリンゼス・コーヴィン将軍が説明して頂けますか？」

王女が、立ったままのコーヴィン将軍へ視線を移した。その目は冷たく、鋭い。

一方、リンゼス・コーヴィン将軍は不機嫌な顔を隠そうともしていない。お前も子供か。

「弟が言うには、侮辱を受けたということでしたので……」

「身内の発言を鵜呑みにして、私の客人を決闘に引き摺り込むのを許した、と言っているのですよ、貴方は。将軍職にありながら、自分の弟、しかも部下の暴走を止めることも出来ないなんて……」

王女の口調は、冷静でありながら理屈っぽく、一つ一つじっくりと追い込んでいるとしか思えない。

俺の中の印象では、普通に上品な女性だったのに、少し印象が変わってきた。

叱責されているコーヴィン将軍は拳を握り締め、体を震わせていた。見る見る頭に血が上っている。怒りを覚えると、弟と同じように顔色に出てしまうようだ。

「兵士の方々もよく見れば、親衛隊所属の方が多い様ですね。昼休みにしては少し長すぎませんか？　王宮警護の役割とは、平時の中でこそ最も――」

これは長い説教が始まる雰囲気だ。

気まずい思いをしているであろう軍人達よりも、俺の方が勘弁して欲しい。だって足が凍っているから。

しかし、王女の説教は遮られた。

「――うるさいっ！！」

リンゼス・コーヴィン将軍の叫び声によって。

王女が驚いた表情で固まった。軍事達も一様に驚愕した様子でコーヴィン将軍に注目した。

当然俺だって驚いた。

王族に対して軍人が怒鳴りつけるなんてありえない。

「私は王家の宝を取り戻そうとしたのだ！　アレイド・アークのもたらした『龍の卵』だぞっ！　ドワーフ混じりに持たせるには過ぎた代物ではないかっ！！」

ドワーフ混じりというのは、ラチハーク国民に対する蔑称だ。

元々ドワーフが多い土地柄だし、種族間の衝突を防ぐ目的で、何世代かごとに、王族には有力なドワーフの一族から娘が嫁いでくる。国民にも、他国と比べればドワーフと人間の混血は多い。

そんな国民を揶揄する言葉がドワーフ混じりである。当たり前だが、ラチハーク国民はこの言葉を徹底的に嫌っている。

実際のところはラチハーク内でも、ウチの一族の様な人間純血主義もいるにはいるが、そんなのは貴族でも極々少数だ。

俺は、自分ではドライな方だと自負していたのに、コーヴィン将軍の台詞にカチンと来た。いつの間に母国愛などに目覚めたんだ……。

王女は、今度こそ眉を吊り上げ、あからさまに怒りを見せた。

「……穏便にことを済まそうとする私を、軍人として意見するのなら、それは許しましょう。しかし、ラチハークに対する侮辱も、ソーベルズ卿に対する侮辱も許しません！　今すぐソーベルズ卿に頭を下げることを命じます！」

広場に響く様な、大きな声だった。

一度下がった女官や商人達までチラチラとこちらを窺っているのが見えた。

「……命じるだとぉっ！？」

コーヴィン将軍が腰の細剣に手をかけた。

「――ッ！？」

それを見たスロウルムとサラが瞬時に駆け出し、王女とコーヴィン将軍の間に入る。グリフォンライダー二人も剣の柄をしっかりと握っていた。

「この……っ！　それもこれも貴様が！！」

弟と同じ様に顔全体を真っ赤にしたコーヴィン将軍が、こちらを振り返り、俺を見据えた。その視線には、逆恨み以上の激憤が込められている。

足が冷たいのも忘れて、俺はおずおずと聞き返した。

「……は、はい？」

コーヴィン将軍がブツブツと呟き始めた。

「貴様なぞが『龍の卵』を孵したのが悪いのだ……。強い力は手放してはならない……。他所に渡るぐらいなら、滅ぼさなければ。それは……――、それは、我々の物だぁあああ！！」

呟きをいきなり叫びに変えたリンゼス・コーヴィンが、俺に向かって突進してくる。

そのスピードは、弟とは比べ物にならなかった。

気付いたらすぐそこに細剣の先端があったのだから。

――あ、死んだ。

俺は、避けることを思い付く前に、自分の死をぼんやりと認識していた。

＊＊＊＊＊

コーヴィン将軍の抜き打ちは速い。確実に高速移動術雷進を使っている。大剣も短刀も抜く暇はない。自分の技量では魔法も間に合わない。

一瞬で判断したルースは、石畳を蹴って、コーヴィンに向かった。

こちらも雷進を使うが、走行距離、角度共に微妙に不利だ。ルースは元々コーヴィン将軍とはカインドを挟むような位置に立っていた。その為、敵が動き出したことに気付くのが一瞬遅れたのだ。カインドの勝利に浮かれていたのも、王女の剣幕に驚いたのもある。

「――ッ！！」

言い訳を探しても仕方ない。

足が悲鳴を上げるのを無視し、ルースは一歩一歩雷進を使って距離を詰める。

コーヴィンがやや下から細剣を突き出した。狙いはカインドの眉間だ。

細剣の先端がカインドを抉る直前、何とか、二人の間に左手を差し出すことに成功した。

掌から指の先まで闘気を集中。錬度の高い闘気使いならば、細剣の刺突すら生身で止めることも出来るが、ルースにそんなことは無理だ。指先なら骨で、掌ならば肉で、細剣の軌道をずらすしかない。

カインドの顔面を狙った切っ先が、ルースの左手に接触する、その瞬間。

細剣がくねった。

「！？」

先端がルースの手から逃げる様に動き、なおかつカインドに向けて進む。

細剣ならではの、しなりを利用した技術だった。柄を握る手の些細な動きを、刃全体で増幅し、先端を縦横無尽に操ることが出来る。

やや突き上げる形だった突きは、カインドの喉への攻撃に変わっていた。

ルースがしまったと思った時には、コーヴィン将軍は腕を伸ばし

きっている。

「カイ――ッ！！」

ルースは叫びつつ、足を踏ん張り、体重と力で強引に勢いを殺した。彼の無残な姿を見たくないという気持ちを押し殺し、後ろを振り返る。

「――っ！？」

再度、驚く。

カインドがいない。技量的にも避ける事など叶わない、それでなくても足を凍らされた彼の姿が消えていた。

――い、一体どこへっ！？

一瞬そう思ったが、戦闘に浸った体は、疑問で満ちた頭を勝手に切り替える。出来事を処理し、脅威を量り、優先順位を決定する。カインドを捜すより、目の前の敵を倒す。それがルースの出した結論だった。

「――無極流無手術――」

コーヴィンもまた驚いていた。その表情は驚愕と不可解で歪められ、次への動きに移っていない。

ルースは、突き込まれた細剣の鍔元近くを、左の掌と親指を除く四本の指で挟んだ。手指の力に加えて闘気でがっちりと固定し、渾身の力で引き寄せる。同時に右肘を後ろに、右手を腰に準備する。

驚きから回復していないコーヴィンは、細剣から手を離すこともルースの力に抗うこともなく、体勢を崩した。

足元から渦巻く流れを右手に乗せ、ルースは叫んだ。

「掌挟撃ッ！！」

左で引きつつ、右の掌底を刃の根元に打ち込む。

良く響く高い音と共に、リンゼス・コーヴィン将軍の細剣は、鍔元で折れた。

「――！！」

ようやく事態に気付いたコーヴィンが、今度は恐怖の表情を浮かべた。

武器を破壊しても、ルースの体に染み付いた動きは止まらない。

右手を打ち抜き、左を引いた体勢から、そのまま体を捻る。

あとは半歩踏み出して肘を叩き込めば、敵を殺すのに十分な衝撃を与えられる。

ルース自身、動きを止めるつもりは欠片もなかった。

＊＊＊＊＊

最初に感じたのは、後ろに引っ張られる様な衝撃だった。

迫り来る死を直前にして、俺は目を閉じてしまったので、何故そんな感覚を覚えたのかはわからない。

「……っ」

しかし、覚悟していた眉間への衝撃は一向に訪れない。

コーヴィン将軍のあまりにも速い突きを喰らって、自分でも気付かない間に死んでいるのだろうか。それにしては、足が重いという、死後の状況にしては、聞いたこともない事態に陥っている。

怖さと好奇心が混じった微妙な心境で、俺はそっと目を開けた。

「――！？」

――飛んでいる！

いや、これは……浮いている！？

高さも距離も５ｍぐらい。

俺はルースとコーヴィンを斜めに見下ろしていた。同時に視界に入る氷塊に埋まったままの両足と、それにくっついた平らな石。

そして、鳥が羽ばたく様な音が聞こえた。
俺は魔法は一切使えない人間だ。故に空を飛ぶことなど出来ない筈。まさか、自分でも知らなかった、俺の隠された力が解放されたのか……？

「――きッ！！」
ルースが何かを叫び、武器も使わずコーヴィン将軍の細剣をへし折った。
このままだとルースは止まらない。
上から見るとよくわかる。
次の攻撃の準備を体全体でしているのだ。そして、ルースの実力とあの勢いなら、例え無手だろうと敵を殺すのは朝飯前だろう。
それはマズイ。

「殺すなルース！！」
「殺してはなりません！！」
焦って叫んだ俺の声に、可憐な声が重なる。王女だ。

「むぅっ！？」
どちらの声が聞こえたのか、ルースは不機嫌な吐息を出し、ビタリと止まった。敵に触れるか触れないかの肘。
それでも攻撃を止めるつもりはない様で、体勢はそのままに、右手の裏拳が走ったのだが。しかも唸りを上げて。
「ぐほっべっ！」
ルースの手の甲が、リンゼス・コーヴィンの顎に、真横から叩き込まれた。
曰く言い難い悲鳴を上げたコーヴィン将軍は、数mほど吹き飛ばされ、さらに数m地面を転がった。そのままピクピクと痙攣する。
「そ、即死してないだけじゃないかアレ……？」
「グァ……ッ」

「ん？　どうした、イクシ――」
今まで聞いたことがない様なイクシスの声に振り返る。
「――おぉッ！？」
目に入ったのは、蝙蝠のものによく似た大きな翼だった。片方だけで俺の身長を越えているだろう。
さらに、俺の腹を、一筋の赤が入った黒いロープ状のものが一周していた。これは尻尾だ。
体そのものはサイズを変えていない。翼と尻尾だけが大きくなっている。
イクシスは、小さな前足を俺の両肩に引っ掛け、尻尾で俺の腹を固定し、羽ばたいていたのだ。

隠された力を発揮したのは俺などではない、イクシスだ。

口を開き、舌を出し、息が荒い。そうとうキツそうである。
「グ……ッ、アッ」
がくんと体が傾いた。一気に高度が下がる。
「うぁっ！？」
「グー……ァー……」
踏ん張っていたのが限界を迎えたのか。イクシスはため息の様な鳴き声を上げ、羽ばたくのを止めた。
「おぁあああああッ！？」
俺とイクシスは３ｍ程の距離を落下した。
ルースの声が聞こえる。
「――カインド！？　イクシスッ！！」
派手な音と土煙を上げて、俺は石畳に落ちた。

「い、痛ってぇー……」
幸いだったのは、膝下が氷で覆われていた為に重かったことだ。
綺麗に真っ直ぐ、足を下にして地面と激突したことで、氷が割れ、

クッションになったらしい。
「……あ！　イクシス！！　大丈夫か！？」
俺は地面から跳ね起きて、土煙の中、イクシスを捜した。
「……グー……」
足元に横たわるイクシスが小さく鳴いた。
慌てて抱き上げ、怪我がないか確認する。
呼吸は落ち着いてきているし、目に見える外傷は一切ない。そこは安心したが、大きくなった筈の翼と尻尾が元の大きさに戻っていた。辺りを見回しても、千切れた翼や肉片等はない。
あんな大きなモノがどこへ消えたのだろうか？
「カインド、無事かっ！？」
ルースの姿が見えた。まるで体当たりするかの様な勢いで詰め寄ってくる。
「あ、ああ。俺もイクシスも怪我はない。ついでに氷も割れた」
「良かった……。いや、よく見せてみろ」
ルースは自分でも俺とイクシスの体をあちこち触り、怪我がないのを確かめた。そして、大きく息を吐く。戦闘での容赦のなさと、俺たちへ見せる表情の差。
つくづく変わった奴だ。

視線を移すと、意識のないリンゼス・コーヴィンを数人の兵士で運び出すところだった。あれだけ偉そうだったコーヴィン将軍が、両脇から肩で支えられ、引き摺られていくのは不思議な光景だった。
王女とグリフォンライダー二人が、わざわざこちらへ歩み寄って来る。
「ご無事で何よりです。貴方方の安全を保障する等と言いながら、本来護る側である軍属の者がこのような事態を引き起こし、謝罪の言葉もありません……」
王女は眉をひそめ、丁寧に頭を下げた。
サラとスロウルム将軍もそれに倣う。

ここはあまり遠慮するのも失礼にあたるかもしれない。俺は謝罪を受け入れた。

「――はい。頭をお上げ下さい。一応怪我を負うことはありませんでしたし、こちらがコーヴィン将軍を怪我させてしまいましたし……」

「非は全てありますから、当然のことです。むしろアーカード様にはお礼を申し上げなければなりません。無法者を止めていただき、ありがとうございます」

ルースは王女の言葉に軽く頷くのみだった。

「あー、コーヴィン将軍はどういった……？」

俺の言葉に、スロウルム将軍が答える。

「無論、牢屋行きだ。調査の上で適切な処置が下されるだろう。弟のトリートの方はどうする？　君達の証言次第で、今すぐ拘束することも可能だが」

少し離れた所で、兵士に囲まれたトリート・コーヴィン大佐が立ち尽くしていた。その表情は虚ろだった。

自分の敗北、暴走した兄の敗北、逮捕とショックなことが多すぎたのだ。

――特に可哀想だとは思わないが。

俺はサラに問い掛けた。

「サラはどうしたい？」

「わ、私か！？」

神妙な雰囲気はどこへやら、サラが少々間の抜けた顔で聞き返してくる。

「いや、俺は決闘に勝ったから、これ以上はもうどうでもいい。でも、お前がまだムカついてるなら、牢屋に送ってやるのもやぶさかではない」

「な、何もそこまでしなくても。私もカインドが勝った時点で溜飲

は下がっている」
「それならこういうのはどうだ？　とりあえず執行猶予で、この先未来永劫、サラ・ゴーシュが執行する権利を持つ。これをコーヴィン大佐に伝えれば、サラに対する嫌がらせも止むだろ。それでも嫌がらせが続くようだったら、その時はサラが怒りに任せてヤっちまえばいい」
俺がそう言うと、その場の全員が固まった。

名案だと思ったけど、外したか？

「……クフッ」
数秒の後、突然、王女が噴き出した。
「――ふ、フフフ、それはいいですね。い、一番効きそうです。ふ、フフフフ……ッ！」
どこがツボに入ったのか、王女はずっと笑い続けていた。

# 18．後始末からの決着（後書き）

11月22日初稿

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5472w/

ドラグーンズ・メイル

2011年11月22日01時02分発行